Movic Game Collection 12

Novel 館山 緑



ONE ～輝く季節へ～

" There is such a thing as forever. . . "
Those words, I wondered who said them.
The words I happened to remember as I looked up at the sky.
They seemed to be the start of something.
Yeah,they were definitely the beginning. The beginning of the end.
There's voices calling me from opposite directions.

Movic Game Collection 12

Novel 館山 緑



ONE

～輝く季節へ～

" There is such a thing as forever. . . "

Those words, I wondered who said then

The words I happened to remember as I looked up at the sky

They seemed to be the start of something

Yeah,they were definitely the beginning. The beginning of the enc

There's voices calling me from opposite direction

ムービックゲームコレクション 12

ONE ～輝く季節へ～
エピソード3

原作◆タクティクス
文　◆館山　緑



MGC

本文イラスト／SEI

プロローグ

記憶の中にだけ、本当の夕焼けはあった。
みさきの大好きな夕焼けは、現実の夕焼けよりもずっとずっと紅く、たなびく雲の輝く様もずっと見つめていたくなるほどだ。
たった十二年間、みさきが見てきたもの、それが美しいものの全てだった。
あれから一緒に中学校、高校へと進んだ友達が既に忘れているような、小さくて綺麗なものだけを温め続けていた。

「みさき、もうそろそろ時間よ」
「はあい」
朝起こされて制服に袖を通して身繕いする。
みさきの眼には、見えていないはずの制服はしっかり映っていた。かつての事故の前から、道を挟んですぐ隣にある高校の制服は同じなのだから。
今みさきが着ている制服は、小学校時代にみさきのことを遊んでくれたお姉さん達が着ていたそれと同じだったから、どんな服なのかは知り尽くしていた。
未だに解らないのは、それを着た自分。
高校三年生になった川名(かわな)みさきの姿だった。

朝食に出た魚の切り身を食べながら、まだみさきは考えていた。
食事をする時にはあまり考え事はしない方なのだが、どうも頭から考えが消えないのは、進路のことについて昨日先生と話し合ったからかもしれない。
炊き立てごはんの上で、切り身をほぐして口に放り込む。
それはいつも通りおいしかったけれど、みさきの顔は晴れなかった。
自分を守ってくれる、過去の記憶を身にまとっていられるのは、あと数ヶ月。この学校の生徒でいられるのもあとわずかだ。
それが全てなくなってしまった時、自分はどうなるのだろう。
考え続けるのが辛くなり、歯を磨いて顔を洗うと足早に学校へ向かってしまった。

そう、学校は期間限定の避難所のようなものだ。
もうすぐ終わりがくることに、自分が向かい合わねばならないものに、みさきは脅えていたのだ。
「おはよう、みさき」
「あ、雪ちゃん。今日は朝練はなかったの?」

「もう終わったとこ。一緒に行こか」
こんな風に、ずっと続いていけばいいのに。
学校生活が終わらなければいいのに。
そんなことを考えながらも、みさきの笑みはまだ、明るかった。

第１章　65点の夕焼け

折原浩平(おりはらこうへい)にとって掃除時間というものは、幼なじみの長森瑞佳(ながもりみずか)が交代してくれるありたい休憩時間のようなものである。

もちろん瑞佳には大いに異論があるに違いないが、浩平はありがたく休憩時間を活用する為に廊下を走っていたのだった。

「浩平、ちゃんと掃除しなきゃ駄目だよ！」

後ろから瑞佳の声がするが、今まで瑞佳が浩平を追いかけてきて、有無を言わさず掃除をさせたことは一度もなかった。多分、いつものように「仕方ないなあ」、と溜息をついて、浩平の分も掃除をしているのだろう。

甘えてしまっている、というのも自分では解っているのだが、どうも面倒だというのが先に立ってしまってついつい逃げ出してしまうのだ。

しかし、瑞佳の眼に付くところにいれば当然文句を言われるので、浩平の足は教室から離れた方へと向かっていた。

（それにしても、寒いよな……）

人気のない場所になればなるほど寒いような気がするのは気のせいだろうか。

屋上の扉のノブが異様に冷たく、冷蔵庫の中に入った方がよほど暖かいのではないかと、嫌な予感がよぎった。

予想通り、金属扉を開けた途端、とんでもない冷たさの風が浩平にまとわりつく。
「……め、めちゃくちゃ寒い」
『立ち入り禁止』の札がかけられているが、わざわざこんな時に屋上に出ている物好きなど、浩平以外には存在しない。浩平は何となく自分の頭上に『馬鹿の見本』という立て札が刺さっているような気分になった。
空は澄んだ朱色を基調とした夕焼けで、わずかに浮いた雲をオレンジ色に輝かせてたなびいていた。しかし、よく見るとその雲はかなりのハイスピードで流れていっている。
風が強いのだ。
そこに立っているだけで硬直しそうなほど寒かったが、夕焼けは燃えるように美しかった。赤系は暖色なので、現実の寒さと無関係に暖かく見えなくもない。
戻ろうか、とも思ったが、寒いから戻ってきたんでしょ、と瑞佳にニマニマしながらモップを渡されるのが悔しいので、意地でも夕焼けを見ていることにした。
「明日は、いい天気だな」
浩平は何となく呟いた。
「そっか、今日は夕焼けなんだ」
突然後ろから返事があり、浩平は振り返った。

長い黒髪が風で乱れるのが眼に入る。それから数秒後に、そこにいるのが黒髪の少女であることに気付いたのだった。

本来なら降ったばかりの雪を思わせる白くきめ細かい肌は、夕焼けに染まって赤銅色に見えていた。形のよい指が乱れる髪を押さえている。

美しい少女だった。

何となく戦前を舞台にした日本映画に、着物で出演すれば似合いそうな古典的な美貌の持ち主だった。

校章の色を見ると、どうやら三年生らしい。道理でこれだけ印象的な少女なのに、今まで逢った記憶がない訳だと納得した。

「あ、別に怪しいものじゃないよ」

少女はにこやかに笑った。

浩平は少女の笑みを見て、何故かアンバランスなものを感じた。

眼が、表情の明るさに反して冷たく見えるのだ。かと言って、もともと冷たい性格という訳でもなさそうだ。

その違和感に浩平が戸惑っているうちに、少女は言葉を続けた。

「夕焼け、綺麗？」



「そうだな。65点ってとこかな」
その少女はふうん、と息をついた。
「結構辛口なんだね」
「俺は夕焼けにはうるさいんだ」
「そうなんだ」
少女は浩平の返事が気に入ったのか、楽しそうに微笑んでみせた。
「いい風が吹いてるね、今日は」
「そうか?」
浩平は寒くてたまらないのだが、彼女はそうでもないらしい。
「95点くらいあげてもいいかな」
「結構いい点だな」
少女はうなずいてみせた。
「私、この場所が好きだからね。あ、そう言えば、夕焼けの次の日が晴れ、って迷信らしいよ」
「え、そうなのか。本当なんだと思ってたよ」
「夕焼けを見てると、明日が晴れって気分になるけどね」

少女は浩平の方へ顔を向けた。
「私は川名みさき。あなたは？」
「俺は折原浩平」
「よろしくね、浩平君」
一年先輩のどこかおっとりとした少女、川名みさきはにっこり笑った。
「浩平、君……っておい」
突然名前で呼ばれるというのに戸惑っている間に、みさきはますます呼び名をエスカレートさせてゆく。
「だったら浩平ちゃん」
「それは絶対に嫌だ」
生まれてから一度たりともそんな呼ばれ方をしたことはないし、ちゃん付けのニックネームを付けられたこともないので、違和感は強烈だった。
「私のこともみさきちゃんって呼んでいいよ、浩平ちゃん」
そういう問題と違うだろう、と思ったが、みさきはお構いなしだ。
浩平はぐったりしながら訊いた。
「……俺に選択の余地はないのか？」

「可愛いのに」
みさきは大げさにうなだれてみせた。何となく可哀想な気もしなくはないが、ここで屈したら一生『浩平ちゃん』になってしまう。
「あのなあ、俺のどこを見たら可愛いなんて言葉が出てくるんだ」
浩平の外見がアイドルのようなタイプなら、可愛いと呼ばれることも仕方がないのだろうが、どう考えてもそのへんの男子高校生でしかないのだ。
「雰囲気、かな」
「かな、って言われてもな」
みさきは軽くうなずいてみせた。
「私ね、人を見る眼はあると思うんだ。眼は見えないんだけどね」
そこまで聞いて初めて、浩平はみさきの言動の違和感に思い至った。
(眼が、見えないんだ)
みさきの笑みの明るさと、眼に漂う冷たさのアンバランスさ。言葉づかいのニュアンス。浩平が感じていた違和感はそこから発していたのだ。
一学年上に盲目の先輩がいる、という噂を、前に聞いた記憶が戻ってきた。
「なあ、もしかして」

「うん、多分そうだよ」

問いの前半分だけで通じてしまうのは、多分みさきがこれと同じ問答を飽きるほど繰り返してきたからだろう。浩平が口籠（くちご）もっているとみさきが首を傾げる。

「どうしたの？」

「いや、その……眼の不自由な人と話したことないから、どんな風に接すればいいのか解らなくて」

みさきはさっきまでとは違う、本当に悲しそうな顔でうつむいた。

「普通で、いいと思うよ」

風が止んだ。

ゆるゆると舞っていたみさきのつややかな黒髪が、いつの間にかほっそりした制服の肩にかかっていた。

「そう、だよな」

「……うん」

眼が見えない、というのを特別に考え過ぎること自体が、みさきにとって失礼に当たるだろう。みさきが特別視されることを望んでおらず、浩平にとってみさきが、可愛くて気のいい普通の先輩としか感じない以上、普通に扱うべきなのだ。

「じゃ、改めて自己紹介。俺は二年の折原浩平だ。よろしく、みさき先輩」
みさきに再び嬉しそうな笑顔が戻った。
「よろしくね、浩平ちゃん」
まだ『浩平ちゃん』が続いていたのか、と浩平は大きくうなだれた。
「やっぱり『浩平ちゃん』は、ちょっとなあ」
「だったら、浩平さん」
「いや、俺の方が年下なんだし、とにかく呼び捨てでいいから」
そもそもここ数年来、歯医者に行った時くらいしか、さん付けで呼ばれたことなどないので、どうにもこそばゆかった。
しかしみさきの方はそれでは嫌そうだった。
「だったら、私のことも『みさき』って呼び捨てで呼んでね」
逢ったばかりの、しかも年上の女性を名前で呼び捨てする勇気はさすがになかった。
「……解った。せめて『浩平君』にしてくれ」
「うん。よろしくね、浩平君」
みさきは微笑んだ。
翳(かげ)りのない笑顔は、見ていると楽しくなってしまうような感じだった。

腕時計を見ると、掃除時間が終わっていた。そろそろ校舎の中から人の気配が消えてきたような気がする。
「じゃ、そろそろ俺、行くから。またな、先輩」
「またね、浩平ちゃん」
「……いや、だから浩平ちゃんは」
「冗談だよ」
この笑顔で言われたら何でも許してしまう。浩平は笑い返した。
「ね、また逢えるよね」
「そりゃあ、同じ学校だし。廊下で逢ったら必ず声をかけるからな」
「楽しみにしてるよ」
軽く右手を振ってみせると、浩平は教室に戻った。

もう既に掃除は終わり、ほとんどのクラスメートは教室からいなくなっていた。瑞佳も帰ってしまったらしい。数人の女生徒が、商店街に繰り出す前にお喋りに興じているだけだった。
ファストフードショップの、クリスマスキャンペーン商品がおいしいのまずいのという、

他愛もない話をしている。その脇を通り抜け、浩平は廊下に出た。
楚々とした古典的令嬢風のみさきがハンバーガーをぱくついているところは、あまり想像できないが、歳相応の女子高校生なのだからそういうことも当然あるのだろう。
思い浮かべてみようとしたが、見事失敗に終わってしまう。
みさきの雰囲気からすると、どうもしずしずと抹茶などを和菓子と一緒にいただく、とか、ごはん物なら懐石料理。そんなイメージなのだ。
(そのうち、ハンバーガーでも食べさせてみよう)
そんなことを考えながら、浩平は帰路に就いたのだった。

掃除当番は二日ごとに交代なので、翌日も浩平は当番だった。
しかし二日目ともなると、瑞佳のチェックも厳しくなるのは言うまでもない。
「はい、浩平のほうきだよ」
授業が終わったかと思うと、素早くやってきて浩平にほうきを差し出した。
「ぐ、ぐあっ、急に盲腸が……っ」
「浩平、とっくに盲腸ないでしょ?」
「だったら脳溢血」

「死ぬよ」
「という訳で、これから保健室で休養をとってくる」
もちろん、本当に脳溢血だったら保健室で休養などとっていられる余裕はないのだが、瑞佳がぐったり疲れている隙に浩平は教室から飛び出した。
もちろん全力疾走だ。
さっきまでのは仮病だったと、その走りっぷりが証明しているようなものだが、そんなことは浩平は気にしない。
しばらく走って瑞佳が追いかけてこないのを確認すると、浩平は走るのをやめて歩き出した。さぼってどこへ行くという当てがある訳でもない。浩平の足はぶらぶらと廊下を散歩するのに飽きると、何となく屋上に向かっていた。
あの、可愛らしい笑顔の先輩のことが頭に浮かんだのだ。
(また、逢えるといいよな)
そんな期待をしながら浩平は屋上のドアを開けた。
そこには、見憶えのある少女の後ろ姿があった。
「よお、また逢ったな」
浩平はその人物の側に寄ると声をかけた。

「こんにちは、浩平君」
みさきは昨日と同じ、屈託のない笑顔を見せてくれた。
「今日も、夕焼けを見に来たの？」
「いや、そういう訳でもないんだけどさ。今日は夕焼けじゃないし」
「……そっか、ちょっと残念だね」
みさきの感情表現は明確で解りやすい。夕焼けでなかったことがよほどつまらなかったのか、肩をがっくり落としていた。
「それで、みさき先輩は？」
「元気だよ」
「そうじゃなくて、どうしてここに？　夕焼けを見に来たのか？」
みさきの表情はひどく不安げなものになった。
「……重要な訳があるんだよ」
浩平はみさきからその重要な訳についてすぐに説明を受けることはできなかった。
「みさきーっ」
校舎の中から女の子の声がすると、突然視線をあちこちにさまよわせ始めたのだ。
「みさきっ、どこよっ！」

女の子の声には、どうも怒気のようなものが含まれているようだ。だんだん声が近くなってきたので、浩平がみさきをちらりと見る。
「先輩のことを呼んでるみたいだけど」
「気のせいだよ」
声の主が階段付近をうろついているらしい。みさきの名前を連呼している。
「間違いなく呼び声が聴こえるけど？」
「眼の錯覚だよ」
狼狽しているのか、みさきはむちゃくちゃなことを口走っている。
「川名みさきっ！　いるのは解ってるんだからねっ。出てきなさいっ」
声の主が階段を駆け上がる音がした。
「えっとえっと、私はいないって言ってね」
そう言うとみさきは思ったよりも素早く扉の反対側に隠れてしまう。
その一瞬後、大きな音をたてて金属扉が乱暴に開かれ、一人の女の子が駆け込んできたのだった。
みさきと同じくらいの髪の長さの、どちらかと言えばしっかりお姉さんといった感じの少女が、屋上をあちこち見回している。みさきを呼び捨てしていたところからすると、彼

女も三年生なのだろう。
「絶対にここだと思ったんだけど、勘が鈍ったのかな」
数メートル先にみさきが隠れているのだから素晴らしい勘の冴えぶりである。
しかし、いないと言ってくれ、と頼まれてしまった立場上、彼女の勘を誉めてやる訳にもいかない。
彼女の視線が浩平に向けられる。
「ねえ、あなた。ここにぼーっとして能天気そうな女の子、来なかった?」
言い得て妙だと感心しながらも、一応はそ知らぬ顔をしてみる。
「確かに来たけどな、そこのフェンスをよじ登って飛び降りた」
「ええっ?」
みさきの友人らしい少女は慌ててフェンスに駆け寄ると、中庭に転がっているみさきを探したが、当然いるはずもない。
「いないじゃない」
少女は剣呑な表情で浩平のことを睨み、おもむろに頬を引っ張った。
「みさきの変装かと思ったけど、違うみたいね」
「そんな訳あるかっ」

「そうよね、あるはずないわよね。それじゃもし、ぼーっとしてていかにも何も考えてなさそうな女の子を見たら、深山雪見が探してたって伝えてね」
「だから飛び降りたって」
「お願いします」
有無を言わさず念を押すと、深山雪見と名乗る少女はそのまま出て行った。
解っていて意地悪をされたのではないかという気がしたが、悲しそうな顔で出てきたみさきにはあまり通じていないようだった。
「ひどいよ雪ちゃん、ぼーっとなんかしてないよ」
充分ぼーっとしているような気がするが、あえて浩平は言及するのはやめた。
「先輩の知り合いか？」
「うん、クラスメートだよ」
ずいぶん遠慮なく引っ張っていったので、浩平の頬はまだじんじん痛かった。
「何が何でも探そうって気迫を感じたけど、何だって先輩のことをあんなに追いかけてたんだ？」
みさきは真剣な顔でうつむいた。
「もしかしたら、あのことを今でも怒っているのかもしれない」

「あのことって？」
何かヘマをやって雪見を怒らせたというのは、充分有り得そうだった。自分では意識していないようだが、どことなくピントの外れた応答をする時があるみさきは、彼女のようなタイプを怒らせてしまうのかもしれない。
「……小学校の時に雪ちゃんの描いたうさぎの絵に、ちょび髭描いたこと」
「絶対に違う！　そんな昔のことで何で今日になって追いかけるんだよ」
「そうか、違うんだね」
みさきは少しだけ安心したようにうなずいた。
「先輩って最初に逢った時とずいぶん印象が違うな」
「そんなことないと思うよ。私はずっとこの私だよ」
みさきは決して浩平のことを映すことのない眼を向けて、寂しそうに呟いた。
(よく考えてみればそうだよな)
明るくて、どこかテンポがずれているけれど可愛くて楽しいみさきを、何となくしとやかで気弱な先輩だとイメージを作ってしまっていたのだ。外見の印象に引きずられて、結果的に偏見を押し付けてしまったことが恥ずかしかった。
半ば自己嫌悪に陥っていた浩平の横で、みさきはもう別のことを考えていたらしい。

「そう言えば、ちょうど引き分けだよね」
「引き分け？」
「屋上にどっちが先に来るか、だよ。昨日が浩平君で今日が私。ちょうど引き分け」
みさきは思いついたことが楽しいのか、にっこりと笑ってみせた。
「それなら、明日どっちが先に屋上に来るか勝負だね」
「勝負？」
「うん、勝負だよ」
「だけどさ、先輩の方が屋上に近いだろ？」
二年生の教室は二階にあるが、三年生の教室は三階だ。みさきが来る方が圧倒的に有利だった。しかし、みさきは全く動じない。
「ハンデだよ。女の子だからね」
浩平は、みさきが眼の見えないことのハンデ、と言わなかったことで、何となく好ましく思った。
だとしたら、正々堂々と受けて立つのが筋というものだろう。
「解った。その勝負受けた」
「うん」

どんよりとした雲が流されてゆくのがみさきの肩越しに見えた。

「そろそろ、本格的に冬だな」

「ほんと、手が冷たいね」

みさきが笑いながら自分の掌に白い息を吐きかける。

夕焼けというフィルターを通さないで見ると、みさきの肌はかなり白かった。透き通るような色合いの肌の少女は、冬の厚い雲の下で一層華奢な感じがした。

「俺、そろそろ行くけど、先輩はどうするんだ？」

「私はもう少しここにいるよ」

「そうか、一緒に帰ろうかと思ったんだけどな」

「今度一緒に帰ろうね」

「ああ、楽しみにしてるよ」

「うーん、きっとあんまり楽しくはないと思うよ」

「どうして？」

「その時になったら解るよ」

みさきがわずかに笑った。

突然、強い風がみさきの髪をざわめかせる。風の冷たさは、夕方だというのに夜を彷彿

させた。そろそろゆったりと立ち話できる状況ではなくなってきていた。
今夜はきっと冷え込むのだろう。
みさきが自分の体を腕で抱えた。
「やっぱり先輩も早く帰った方がいいと思うぞ」
「うん、そうだね」
厚い雲の隙間から覗いている太陽は、弱々しい光を発しながら沈んでゆこうとしていた。
「せめて校舎の中に入った方がいいと思うぞ。もう陽も暮れるからさ」
「……うん、そうかもしれないね。行こっか」
みさきもうなずいて浩平の後をついてくる。浩平が屋上のドアを開けると、みさきが小走りで寄って来て扉をくぐった。
さすがに校舎の中がひどく暖かく感じる。別段暖房がかかっている訳でもないのだが、冷たい風が入らないだけずっとましだということだろう。
みさきは外気で冷たくなった両耳に掌を当てた。
「これからは屋上にも行けなくなるな」
「……そうだね」
みさきは残念そうにうつむいた。

「みさきっ、やっと見つけた！」
いきなり背後から鋭い声がかかる。言うまでもなく雪見だった。
「……えーっと」
みさきが反射的に後ろに下がると、雪見はぱたぱたと駆け寄ってきて、まず浩平を睨んでみせた。
「嘘つき。やっぱり屋上にいたじゃない」
「だから、飛び降りたけど頑張ってよじ登ってきたんだって」
「うん、頑張ったよ」
理解不能といった調子で雪見はみさきを見ると、大きく溜息をついた。
みさきは神妙な表情で弁解を試みた。
「ごめんね、雪ちゃん。ちょび髭はわざとじゃないんだよ」
雪見はいぶかしげな表情を浮かべた。
「ちょび髭って何？」
「だから絶対違う。ところで深山さんはどうして先輩を追っかけてたんだ？」
「掃除当番さぼってどっか行ったから」
単純明快な理由だった。

よく考えると掃除時間のシフトは三年生も二年生も同じだ。掃除をさぼっている浩平と全く同じ時間に鉢合わせしていたということは、みさきも掃除をさぼって屋上に来ていたことの証明でもあった。
浩平の視線と雪見の視線がみさきに注がれる。
みさきはうつむいたり横を向いてみたり間が悪そうにしていたが、最後には小さく頭を下げた。そんな仕草も可愛らしい。
「……ごめんなさい」
「まあ、今回は許してあげるけど」
「ごめんね、雪ちゃん。この埋め合わせはするから、ね」
「期待してるよ」
雪見がくすっと笑いながらうなずいた。浩平が友情を温め合うふたりに手を振って教室へ戻ろうとすると、みさきが思い出したように浩平に声をかける。
「明日の勝負、忘れたら駄目だよ」
「解ってるって」
みさきがにっこりと笑って手を振ってくれる。何となく眼が合ってしまった雪見も、軽く会釈をしてくれた。

浩平はもう一度みさきに手を振ると、そのまま階段を降りたのだった。

翌日の授業が終わるチャイムが鳴った瞬間、浩平は戻ろうとする教科担任よりも速く教室から飛び出した。

何しろワンフロア分のハンデがあるのだ。全力疾走しないと負けてしまう。

昨日のみさきが雪見から隠れる時に走った素早さを考えると、かなり足は速そうな気がする。まだほとんど廊下に出ていない生徒達の間を必死で駆け抜けても、勝てるかどうかは五分五分だ。

体重にうまくスピードが乗っている。

（これは、いける）

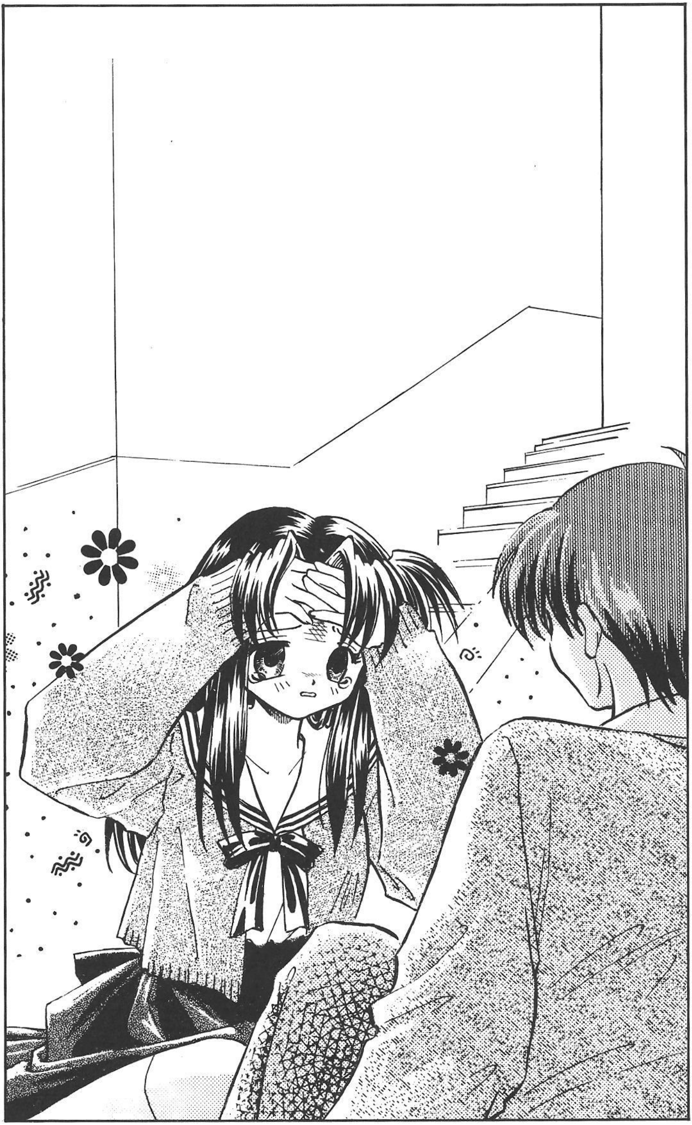
後は向こうに見える階段を駆け上がれば終わりだ。

浩平は勝利を確信してぐいっと体の向きを変えた。

その瞬間、浩平の視界が突然暗くなり、何かがごんっ、とぶつかってきたのだった。

「……ううっ、痛いよ。眼がちかちかする」

そこにいたのは眼に涙を浮かべながら額に手を当てて座り込んでいるみさきだった。よ



ほど痛かったのか、庇うように額を押さえている。
みさきは自分が他人にぶつかったことを理解してぺこぺこ頭を下げた。
「あ……えっと、ごめんなさい。大丈夫でしたか？」
その様子があまりに可愛くて面白いので、浩平は黙ってみさきを観察していた。
みさきはその沈黙を違う意味に取ったらしく、ますます狼狽の加減を深めた。
「あ、あのっ……もしかして、すごく怒ってますか？」
さすがに可哀想になってきた浩平はやっと口を開いた。
「先輩、俺だって」
「え、浩平君？」
「こんにちは、みさき先輩」
当然ながらみさきはぷんぷん怒り出した。
「ううっ、ひどいよっ。こんにちはじゃないよっ。もしかしたらぶつかった人が気絶しちゃったんじゃないかって、ほんとに心配だったんだよっ」
「わ、悪かった。本当に悪かった。ごめん」
すねたように顔を向けるみさきに浩平は謝り続けた。
しばらくすると、みさきの表情はふっと緩んだ。

「解ったよ、許してあげるよ。でも、その代わり……必ず仕返しするからね」
みさきはいつもの笑顔で微笑んでくれた。
「勝負は中断しちゃったけど、せっかくだから屋上へ行こうか」
座り込んだみさきに手を貸して立たせてやると、二人で屋上へ向かった。
金属扉を開けると、肌に触れたところが凍ってしまいそうな強風が吹き付ける。浩平は素早く扉を閉め直した。
「やめよう、ここは人間の来るところじゃない」
「寒かったの？」
「寒かったなんてもんじゃない。キタキツネとか白熊の棲息してそうな寒さだ」
夕焼けを見ている間に冷凍食品になってしまいそうだった。
「もうそんな季節なんだね」
「早いよな、時間がたつのも」
みさきは寂しそうにうなずいた。
「卒業まで、あっという間なんだろうね」
「そうか、来年は先輩も卒業だな」
「ほんと、早いよね。もう、今日は帰ろうか……」

ふたりは階段を降りながら薄紫色の雲が流れる空を見つめた。ガラスが風でがたがたと揺れている。
「じゃ、一緒に帰るか？」
みさきは軽く笑ってうなずいた。
「そうだね、でもあんまり一緒に帰ってる感じはしないと思うよ」
そう言えば前にも一緒に帰っても面白くない、と言っていたような気がする。どういう意味だろう、と思ったが、靴をはき替えて校門を抜けるとすぐに浩平は納得したのだった。

「着いたよ。ここが私の家」
みさきは眼の前に建つ家を指差してみせた。学校のほぼ真っ正面にある、ごく普通の家だった。庭の隅に小さな温室がしつらえてあって、そこに鉢植えが並べられているのが見えた。
確かに表札には『川名』と出ている。
みさきは嬉しそうに微笑んだ。
「今日は送ってくれてありがとう」
「……あ、ああ」

校門を出て道を横切っただけだ。これで送ったことになるのだろうか、と迷ったが、みさきが喜んでいるのだから問題はないのだろう。
「こんなに家が近いと絶対に遅刻はしないな」
いつも遅刻寸前で、幼なじみの瑞佳に叩き起こされてやっと始業に間に合う浩平としては、うらやましい立地条件である。
しかしみさきは首を振った。
「うーん、そうでもないよ。だって寝過ごしたら一緒だからね。でも、やっぱり家が近いと色々と便利だよ」
「忘れ物をした時とか、ありがたいだろうなあ」
「うん、ありがたいよ」
ほとんどドア・トゥ・ドアに近い状態だからこそ、眼の見えないみさきが一人でも支障なく学校へ通えるのだろう。
「そうだ。今から一緒に商店街にでも行かないか？」
かなり冷え込んではいるが、まだ陽は沈みきっていない。クリスマスの飾り付けや年末の賑わいを見せる商店街を、みさきと一緒に歩きたかったのだ。
「今は年末だから、商店街も賑わってると思うんだ。楽しいんじゃないかな」

「そう、だよね」
みさきが煮え切らない口調になっているのに、浩平は全く気付かなかった。
「よし、だったら行こう、先輩」
浩平はみさきの手を引っ張った。もちろん軽く誘導するだけのつもりだったが、みさきの行動は浩平の予想の範囲外だった。
脅えた表情で浩平の手を振りほどき、その場に力なく座り込んでしまったのだ。小さくうずくまるみさきの姿は、あまりにも痛々しかった。
「先輩……」
浩平は何と言っていいのか解らず、ただ、みさきに呼びかけるしかできなかった。
「ごめんね、浩平君」
みさきは無理やり笑顔を作って浩平に顔を向けた。
「浩平君が引っ張るから転んじゃったよ」
「ごめん、そんなつもりじゃなかったんだ……」
本当はもっと違う言葉が交わされなければならないはずだった。しかしみさきは決してそれを口にすることはなかったし、浩平もそのことを指摘することはできなかった。
みさきの笑顔は浩平の問いを拒んでいるように見えた。

「うん……解ってるよ」

やっとその笑みが自然なものになってきた。

それでも、少し寂しそうではあったけれども。

「今日は、これから用事があるから駄目なんだよ」

多分、特別な用事などありはしない。それは互いを傷付けない為のやさしい嘘だ。しかし少なくとも今の浩平にそれを追及する権利などない。

浩平がしてもいいのはうなずくことだけだ。

「誘ってもらえて嬉しかったよ……ばいばい、浩平君」

みさきは小さく手を振って、自分の家の庭を通って玄関まで歩いた。玄関の扉を開けたところで一度、振り返る。

「……ごめんね、ほんとに」

かすかな声で呟くと、扉を閉めた。

（先輩）

誰もいなくなった川名家の門の前で、浩平はしばらく黙って立ち尽くしていた。

振りほどかれた手。脅えた顔。

うずくまる、みさきの背中。

（俺は……）

無神経なやり方でみさきを傷付けてしまったのだ。

今すぐにでも謝りたかったが、それではかえってみさきに対して失礼なことになってしまう。つまり、今できる最良の方法は、心に留めておいて知らん顔することだ。

（俺って、本当に無力だ）

せっかく出逢った友達を無神経に傷付け、謝ることさえ許されない。彼女が傷を抱えていることが解っても、見ない振りをしなければならない。

いつか心の痛みさえ語り合うことができるほど親しくなることができるのなら、その時は絶対こんな思いを不用意にさせることはしたくなかった。

浩平はみさきを傷付けてしまったことで、ひどく落ち込んでしまっていたのだった。

第2章　びっくり箱昼食会

みさきへの気持ちを持て余しながら、浩平は学校でみさきに逢うことはなかった。気になりながらも何となくそのまま逢わずじまいになっていたが、思いもかけない時に鉢合わせてしまった。

寒い中、これからマラソンをするのかと、思わず浩平が溜息をついた瞬間。

「多分、浩平君」

突然、斜め後ろから声をかけられる。

そこにはみさきがにっこり笑って立っていた。

「こんにちは、先輩」

みさきの笑みに、あの時の悲しさは一切含まれていなかった。浩平の好きな、陽だまりのような笑みだった。それにつられて浩平も笑いかける。

「よかった。やっぱり浩平君だったんだね」

「凄いよな、先輩。溜息だけで俺って解るのか」

「さすがに溜息で当てたのは今日が初めてだよ。自分でもびっくりした」

みさきがいたずらっぽい表情で感想を漏らした。

「そう言えば、こんな時間に先輩はどうしたんだ？」

もうそろそろ授業が始まってしまうはずなのに、全然急ぐ様子もなかった。

「これから帰るところだよ」
よく見ると右手には鞄があった。
「半日授業だっけ。うらやましいよな」
「浩平君は？」
「これからひたすらグラウンドを走るんだよ。何でこんな寒い時にマラソンなんかしなきゃいけないんだろうな」
忍耐強くただ走り続けなければならないと思うとうんざりしてしまう。
「でも、私は体育の授業好きだよ」
「そうなのか？」
「運動は好きだからね。走るのも好きだよ。走るの、気持ちいいしね」
外見的にはみさきが体操服を着て走っているところは想像がつかないが、一度見てみたいような気がした。
「今度、見せてくれよ」
「うん、いいよ。それじゃあね、浩平君」
手を振ってみさきが歩き出そうとした時。
「こら、みさきも帰っちゃ駄目だからね」

背後からいきなり雪見が現れた。
そのように見えたのは浩平だけで、雪見の方はどうやらみさきを探していたらしい。
「今日はわたしの部活につきあってくれるって約束だったでしょ」
「あ、そうだね」
すっかり忘れていた、といった調子でみさきがうなずいた。
「せっかく半日なのに部活があるのか？」
しかも他の学年の人間は授業を受けているのだ。既に引退している生徒がほとんどの三年生だけで何をするつもりなのだろう。そんな浩平の疑問に気付いたのか、雪見が浩平に説明をしてくれる。
「うちの部は今が一番大切な時なのよ」
「私はそのお手伝いだよ」
「そうか、じゃあ先輩達も頑張ってくれな。俺も頑張ってマラソンしてくる」
みさきと雪見がうなずくと同時にチャイムが鳴り出した。
「ぐわっ、やばい！　じゃ、俺行くから」
「ばいばい、浩平君」
みさきが手を振ってくれるのに応えて手を振り返すと、浩平はグラウンドめがけて全力

疾走したのだった。

●●●

そこは、わたしにとってお気に入りの遊び場だった
教室の雰囲気もおとなびた感じがしたし、いろんな珍しいものがあったから、自分が通う小学校から帰ると真っ先に遊びに行った
ぶらんこや滑り台はなかったけど、この高校そのものがわたしのお庭みたいだった
廊下や、人気のない学食
小学校と別の花が植えてある花壇
こっそり入り込んだ屋上から眺める夕焼け
みんなみんな、大切なものだった

おおげさな言い方だけど、わたしは小さな世界を持っていた
その敷地のすみずみまで、探検してほしいと望んでいるような感じだった

今日もまた、夕食までの自由な時間を過ごすために『高校』へ向かう
今日は、何が見つかるだろう
何をして遊ぼうか

●●●

浩平が家からパンを持ってくるか来ないかは、同居している叔母の由起子がどれだけ仕事で忙しいかに比例する。由起子が買い物に行く余裕がなくなり、パンの買い置きがされていなくなると、浩平は学食で昼食を食べることになるのだった。

しばらくパンで済ませていたのだが、また忙しくなってきたのか、備蓄の食料がすっかり枯渇していたので、朝食を食べ損ねた浩平は、昼休みのチャイムが鳴ったと同時に学食へ走り出していった。

学食までやってきた時には、もう大勢の学生でごった返していた。

購買もあるのだが、安くてそこそこ程度においしいせいか、いつも盛況なのだ。うまく席を確保するのは、出遅れると至難の技だ。

運悪くも席を確保できない場合、テーブルの隅に立たせてもらって、トレイなしで丼を

抱えて食べることになる生徒もいるほどだ。
　とりあえず席を確保しにテーブルのあたりをうろついていた浩平は、見馴れた人物がうろうろしているのを見つけた。
「おーい、みさき先輩！　今から昼飯か？」
　ざわついた中で聴こえるようにやや大きな声を出した。
　みさきがもみくちゃにされながら振り向く。
「うん、そうだよ。浩平君も今から？」
「ああ、よかったら一緒に食べないか？」
「うん、そうだね。一人で食べても何だか寂しいしね」
「じゃあ、俺が料理を運んで来るから、先輩は座席を確保しといて」
　ちょうど向かい合わせた席が空いたところに、浩平が素早く走り寄ってみさきを座らせる。みさきは真面目な顔でうなずいた。
「任せてよ。どんなことがあってもこの場所は死守するよ」
「頼んだぞ。じゃ、みさき先輩は何にするんだ？」
「えっと、私はカツカレーを……」
　みさきは微笑んで財布を取り出した。

「も、持ってきたぞ……前半は」
浩平はぐったりしながらトレイを死守して戻ってきた。
何しろ、量が半端ではないのだ。
今持っているトレイにはみさき待望のカツカレーが3杯と、浩平が自分で食べる為のハンバーグ定食とお茶2杯分が乗っているのだ。
しかし、まだみさきに頼まれたメニューは全部ではない。両手で持ちきれないので、トレイ二つ分をまだ向こうに置いてあるのだった。
「先に食べてていいからな」
そうでないとトレイの量が多すぎて、隣の生徒がまともに座ることができなくなってしまうのだ。
みさきはカツカレーの匂いを嗅いで嬉しそうに微笑み、スプーンを握った。
「それなら、お先にいただくね」
「……そうしてくれ」
まさかみさきは食べ過ぎで自殺を図るつもりではないだろうか、とか、本当は浩平のことを恨んでいて嫌がらせしているのだろうか、などと、被害妄想的な考えが浮かびながら

も、再びトレイを取りに戻った。
しかし一瞬気になって後ろを振り返った時、その考えは吹き飛んだ。
もう既にみさきの皿からカレーが3分の1ほどが消えていたのだ。
とんでもないスピードで食べているはずなのに、がっついたようには見えないのは、楚々とした外見と、スプーンの使い方がきっちり躾を受けた人独特のそれだったからだ、と浩平は妙なところで感心したのだった。

トレイを持って帰ってくると、浩平が一番最初にしたのは積み上げられた皿を隅に寄せてスペースを空けてやることだった。明らかに隣に座った人間が狭そうにしているので、さすがに申し訳ない気持ちだった。
「おかえり、浩平君」
みさきのカツカレーは3杯目が空になるところだった。
浩平はそれを見ながら、自分の冷めかけたハンバーグに箸を入れた。
「昔から、ここの料理好きなんだ」
「安いしな」
「うん」

　しかし、眼の見えないみさきが毎日学食で席を確保するのは一苦労なのではないだろうか。そう思って話を切り出してみた。

「先輩、いつも一人なのか？」

「いつもは雪ちゃんや他の子と食べてるよ」

「じゃあ、悪いことしたんじゃないか？」

　浩平のせいで友達をすっぽかしてしまったのだろうか。そう心配したのを悟ったのかみさきは笑って首を振った。

「ううん、大丈夫だよ。雪ちゃんは気分が悪いから教室にいるからね。やっぱりさっきの時間が体育だったからかな」

「何やったんだ？」

「マラソンだったよ」

　マラソンの直後にこの食べっぷりを見せられるのは確かにごめんだろう。気分的には充分納得できる意見だった。

　みさきのスプーンは特に高速で動いているようにも見えないし、一口が多い訳でもないのだが、いつの間にか皿の中身が予想よりも大幅に減っているのだ。視界に入るたびに自分の眼を疑わねばならないのは精神衛生的に悪い。

もしかしたら口と胃の間に異次元への道でもあるのかもしれない、などと馬鹿なことを思うが、当のみさきは、おいしそうに食べているので食事を楽しんでいることだけは間違いない。
じっと観察してしまう浩平の視線を感じたのか、みさきは浩平の方へ顔を向けた。
「どうしたの？」
「いや、よくそれだけ食べられるなと思って」
浩平の驚愕にみさきはにっこりと笑った。
「私、食べるの好きなんだ」
「確かに、おいしそうに食べるなあ、と思うよ」
摂取量が段違いなだけである。
これがいかにも体格のいい、体育会系の学生が掻き込むようにして食べている量なら納得できなくもないのだが、細身の女の子が食べていると思うと、どこに入るのか見ている方が心配になってしまうのだ。
とうとう全ての皿の中身が消え去った。
「ごちそうさま」
みさきが軽く掌を合わせてみせる姿が可愛らしい。

浩平は疑わしそうにぼつりと訊いた。
「まさか、もう食べたりは……しないよな?」
「うん、多分ね。もしかしたらまたお腹が空くかも知れないけど」
嘘だろう、と呟きそうになったが、今まで食べていた間も全く苦しそうではなかったのを考えると、あながち嘘ではないかもしれない。
「やっぱりもうちょっとだけ食べようかな」
一瞬浩平は気が遠くなったが気を取り直した。
「もうやけだ。俺が取りに行くから好きなだけ食べてくれ」
「ありがとう、浩平君。じゃ、カツカレー3人前お願いするね」
ちょっとだけじゃなかったのか、という言葉は、喉から出る前に消えた。もう何も言うまい。修行僧のように忍耐強く、浩平は黙ってカツカレーを取りに行った。

みさきは今度こそ全ての皿を空にしたが、何皿食べたのか、浩平は怖くて数えられなかった。そんな驚愕と恐怖をよそに、みさきは幸せそうに微笑んだ。
「ごちそうさま。2回目だけどね。今日は誘ってくれてありがとうね」
「いや、俺でよければいつでも……」



浩平は最後まで言葉を続けることはできなかった。
すぐ後ろでがしゃん、と大きな音がして一瞬後、浩平の背中を異様な熱さが襲ったのだった。
「う、うわあ！」
素っ頓狂な叫び声を上げて、浩平は乱暴に立ち上がって振り返る。一体何が起こったのだろうか。
考える余裕はろくになかったが、そこにいた小柄な女の子が空のトレイを手におろおろしながら見ると、何度もぺこぺこ頭を下げた。
丸くて大きな眼が泣きそうにうるんでいた。
浩平は何となく背中の熱い部分に掌を触れてみる。
指に何か長くてやわらかな物体が絡み付いた。どうやら熱さの元凶はそれらしい。ぐにぐにとした触感の物体をひっぺがすと、それは何本も蠢く白い紐状のものだった。
「……うどん？」
いくつかの断片的な情報は、やっと組み合わさった。
「上着、脱いだ方がいいんじゃないかな、何となくね」
みさきがテーブルの向こうで助言する。

どうやらこの少女がつまずくか何かして、浩平の背中にうどんをぶちまけたらしい。
反射的に上着を脱いで、うどんをひっぺがし始めた。
その間も少女は頭を下げ続けている。
「し、死ぬかと思った……」
今日はよくよくスリルとサスペンスに満ち溢れた日である。
少女はずっと申し訳なさそうに頭を下げ続けていた。それを見ていると浩平の方が悪いことをしたような気分になってきた。
「いいって、そんなに謝らなくても。別に怒ってないから」
「ほんとに？」
そう言ったのは少女ではなくみさきだった。
「ほ、本当だって。別にこの子だって俺を狙ってわざとやった訳じゃないだろうし、俺もカツ丼を床に落としたことあるしな」
もちろん落としただけで他人にぶちまけるような派手なつまずき方はしなかったが、それはこの少女に言う必要のないことだ。
みさきがうなずいてみせる。
「私もあるかな、天丼だけど」

「まあ、そういう訳だから、気にすんな」
浩平は強引に結論に持っていった。これ以上この少女に頭を下げ続けられていては、無用の罪悪感でのたうち回ることになってしまう。
そろそろ昼休みが終わる時間だというのを幸いに、浩平は席を立った。
「じゃ、俺そろそろ戻らないと」
しかし、少女はにっこり笑ったかと思うと、肩にかけたスープでびしょ濡れの上着をぐいっと引っ張って浩平をじっと見つめた。
「ど、どうしたんだ？」
少女はそれに答えずひたすらじっと浩平を見つめている。
「洗濯するって言ってるんじゃないかな？」
みさきの助け船にその少女はうん、うんと二回うなずいてみせた。
「そうか？　俺は別にこのままでも構わないけど」
おおざっぱな浩平にとっては乾いてしまえば、かつおだし風味だろうが昆布だしだろうがどうでもよかった。さすがにカレーうどんだったら色合的に嫌なものがあるが、目立たなければ全然問題ないのだ。
しかし、少女は訴えるようにじっと見つめ続ける。丸くて大きな眼のパワーに根負けし

て、浩平が上着を渡すのはそれから二十秒後だった。

「わ、解ったよ。じゃあ、お願いするから」

少女は嬉しそうに上着を受け取った。小柄な少女が男物の制服を持っていると、普通に持っていても抱えるように見えてしまう。

浩平に向かってぺこっ、とお辞儀をすると学食の出口の方に小走りで向かった。

そして入口のところでもう一度頭を下げると、彼女の姿は人波に呑まれて消えてしまったのだった。

「変わった女の子だな」

「あ、女の子だったんだ」

「何を今更……」

「あの子一度も喋らなかったから気が付かなかったよ」

そう言えば先程の少女は表情をくるくると変えるのと、めりはりのあるボディランゲージのせいで全く意思疎通に問題はなかったのだが、一度も声を出さなかった。変わっている、と思ったのはそれが原因なのかもしれなかった。よほど無口なのだろうか。

「うーん、ほんとに変わった子だな」

「でも、いい子だよ」

微笑んで言うみさきに、浩平もうなずき返した。
「そうだな、わざわざ洗濯してくれるっていうことだし」
「でも、どうやって届けるのかな」
「……あ」
彼女は自己紹介をしていかなかったし、浩平も自分の名を名乗らなかったのだ。生徒手帳もズボンのポケットに突っ込んであるので、彼女が浩平の名前を知る方法はない。
当分上着なしで過ごす覚悟をしなければならないらしい。
みさきは苦笑しながら浩平の方に顔を向けた。
「風邪をひかないでね」
「……努力はしよう」
もうそろそろ昼休みも終わる頃だった。
暖房の効いた学食の外は、予想通り上着なしでは寒かった。

翌日の昼もあの少女を探して学食を覗いてみたが無駄に終わった。
シャツの中にTシャツを重ね着してみたが、やはりそれだけでは袖回り、腰のあたりの寒さはいかんともしがたかった。

（……明日もこれじゃあ結構まずいぞ）
放課後にはもう体の動きが鈍くなるほど寒かった。浩平は両腕で自分の体を抱くようにして二の腕をこすりながら廊下を歩いていた。
建物の中でこれでは、帰路の寒さは考えたくない状態になっていることだろう。
「お、みさき先輩。これから帰りか？」
昇降口から少し外れたあたりで立っているみさきを見つけて声をかける。
みさきが気付いて浩平に顔を向けた。
「下駄箱の人が少なくなるのを待ってたんだよ」
狭い下駄箱のあたりが帰宅する生徒の波でラッシュ状態だ。
「そ、そうか……俺も今、帰りだ」
「寒そうだね。声が震えてるよ」
声だけではない。体も小刻みに震えていた。浩平は大げさにうなずく。
「そうなんだよ。めちゃくちゃ寒いんだ。だからみさき先輩の上着をくれっ」
「嫌だよ」
芝居がかった口調で迫るとみさきはあっさりと拒否した。しかし顔は笑っている。その肩の向こうに見憶えのある人物が小さく見えた。

あのうどんを背中にぶちまけた少女だ。紙袋のようなものを抱えてこちらに向かってくる。浩平達の方を目指しているらしい。
「昨日の子だ。こっちに来るみたいだ」
あの少女は人込みをくぐって浩平達の方へ出てこようとしているのだが、成果ははかばかしくなかった。ちょうど人込みの流れに逆行して進もうとしているのが仇になっているらしく、一歩進んでは押し戻されを繰り返し、いつまでたってもたかだか数メートルを通過することができなかった。
「来ないね、その子」
「今やっと半分を通過したところだ……あ、また押し戻された」
運動部の生徒なのだろうと思われる男子の波が、あっという間に彼女を押しのけて突進してゆく。結局ぐったりとした彼女が浩平達の前に立ったのは、人込みがすっかり引いてしまってからだった。
大きく息をつきながら、少女は浩平の側に走り寄ってくる。
「大丈夫か？」
すっかりよれよれになっていたが、少女はにっこりと微笑んでみせた。大丈夫、ということらしい。

「俺達に用か？」
少女はうんっ、とうなずいて大きな紙袋を浩平に差し出した。中から男子生徒用の上着が覗いている。取り出すと、だしの匂いの代わりにふんわりとした洗剤の匂いがわずかに漂ってくる。
「洗濯してくれたのか？」
うんっ。少女はうなずいた。
「ありがとうな。おかげできれいになったよ」
もう一度少女は嬉しそうにうなずいてみせる。
「寂しぃよ」
みさきが話題から取り残され、軽くすねてみせた。
「何だか浩平君の一人芝居みたいだよ」
彼女が喋らないのだからみさきにはそう感じるだろう。何しろ彼女は今まで一度も口をきいていないのだ。
「しかし、やけに無口だよな」
「もしかして、この子喋れないんじゃないのかな」
みさきが軽く首をひねりながら呟いた。

「そりゃまた、極端な意見だな」
しかし少女はみさきの言葉に、うん、うん、とうなずいてみせていた。
「まさか、本当に喋れないのか？」
少女は今度は浩平の方に向かってうなずいてみせる。まだ信じられない浩平は疑わしそうな表情で言った。
「あ、って言ってみろ」
「あ」
横でみさきが口を開く。浩平はがっくりとうなだれた。
「先輩が言ってどうする！　もう一度だ。あ、って言ってみろ」
小さな口が『あ』の形に開く。しかし声は漏れなかった。
「じゃあ、い」
『い』の形に少女の唇が動く。それだけだった。
「次はアメリカの州全部だ！」
「そんなの私でも言えないよ」
もちろん浩平も全部言えないのだが、勢いで言ってしまったようなものだ。
少女はどうやら律義にアメリカの州を片っ端から言っているらしいが、やはりぱくぱく

と口を動かしているだけだった。
しかし、声を出せずひたすらぱくぱく口を動かしている少女は、だんだん疲れてきたようだ。
「悪かった。俺が悪かった。喋れないってのも大変だよな」
少女はわずかにうなずいた。
「自己紹介もできないね」
みさきが言うと少女はふるふる、と頭を振って、持っていたスケッチブックを取り出して、黒のサインペンで何か書き付けて二人の方へ向けて笑った。

上月　澪

スケッチブックいっぱいの大きな文字で書かれていた。
しかし、自己紹介できたでしょ、と微笑んでみせる少女は、ふたりの反応にがっくりと肩を落とすことになった。
「……悪い。漢字が読めない」
「ごめんね。字が見えない」

悲しそうにうつむくと、気を取り直してもう一度スケッチブックをめくってサインペンを走らせた。

こうづき　みお

「みお、っていうのか。俺は浩平だ。よろしくな」
「よろしくね、澪ちゃん」
やっとふたりに通じると、澪は嬉しそうに、うんっうんっ、と二回うなずいた。
みさきがにこにこしながら澪に訊ねた。
「澪ちゃん、一年生？」
澪はさらさらとサインペンで返事を書いてみさきの方に向けた。

そうなの

スケッチブックを向けられた紙の音で、返事が書かれたらしいことにみさきは気付くが、見えないものは読みようがない。みさきは困って口籠もった。

浩平は助け船を出してやる。
「一年らしいぞ」
「そうなんだ。私は三年生だよ」
うんっうんっ、と澪がうなずいた。とりあえず何となくコミュニケーションがとれている光景が微笑ましい。
その後部活に出るという澪と別れ、浩平とみさきは校門まで一緒に歩いた。
「澪ちゃん、いい子だったね」
「ああ、そうだよな」
「でも、どこかで名前を聞いたような気がするんだよ。うーん、どこだったかな？」
みさきは軽く首を傾げてみせた。数秒して軽くうなずく。
「雪ちゃんとこの部員じゃないかな、澪ちゃん」
「へえ、そうなんだ」
校門から出ると、前のようにみさきを自宅の門の前まで送って、浩平は歩き出した。
冷たい風が浩平の頰を撫でてゆく。
（やっぱり、上着があるとないのとじゃ大違いだ）
当然寒いのだが、体を覆う布地があるのとないのとでは温かさが違う。上着一枚のあり

がたみをしみじみ感じながら、浩平は自宅への帰路を辿った。
商店街の華やかなクリスマスの飾り付けが、陽が暮れかけて鈍い色を含んだ夕焼けに映えて美しい。
(今日は、夕焼けなんだな……)
みさきの好きな夕焼け。
何となく、今日は夕焼けなのだとみさきに教えてやりたくなった。夕焼けの下で小さく輝く飾りが美しいことを、つたない言葉でもいいから伝えたかった。
商店街には、今年のクリスマスナンバーが流れている。どちらかと言えば女性好みの、甘いラブソング。
それを聴きながら浩平は商店街をゆっくりと抜けていったのだった。

●●●

赤、オレンジ、サーモンピンク、うすむらさき
アウトラインが黄緑色に見える、ゆっくり流れていく雲
蜂蜜みたいにきらきら光る空

ずうっと見ていればどれだけでも変わってゆく夕焼けを、ぼうっと見ているのが大好きだった
屋上から見下ろすと、影みたいに沈んだ住宅街に、ぽつぽつあかりが灯る
そろそろ、おうちに帰る時間
今日のごはんはカレーライスだって、お母さんは言ってた
お腹が空いてきたから、もう帰ろう
私は屋上のドアを閉めて、ぱたぱた走り出した
また明日も夕焼けだといいな
そんなことを考えながら

●　●　●

その朝浩平は机に伏せって寝ているところを瑞佳に叩き起こされた。

「浩平っ、起きてよっ」
「うーん、しんどい。今日だけでいいから……休ませてくれ。眠い」
そのまま再び眠りの中に入っていこうとする浩平を、瑞佳は激しく揺すった。
「今日だから休んじゃいけないの！　今日から期末テストでしょっ」
そう言えばテスト勉強の為に机に向かい、ペンを持ち、教科書やノートを開いた記憶があった。しかし記憶はそこまでで途切れている。
「……えーと」
頬にくっきりと教科書の跡が付いている。教科書も体温ですっかり暖まっていた。どうやらそのまま寝たらしい。
勉強した形跡はなかった。ノートには何も書かれておらず、教科書に新たに線を引いたなどということもない。何もしないでそのままエアコンの風に吹かれていい夢を見ていた、という訳だ。
「浩平、ちゃんとテスト勉強した？」
「この万全の態勢を見ろ。徹夜で必死で勉強して、ついさっきうとうとし始めたところだ」
「でも、本の痕がすごくはっきり付いてるもん。さっき伏せたんだったらそんな風には絶対ならないよ」

瑞佳が当然の疑問を挟む。
一瞬浩平が間が悪そうな表情をしたのを、瑞佳は見落とさなかった。
「やっぱりやってないんだ。もう、ちゃんと普段から勉強してないと駄目だよ。今日はわたしが教えてあげるから、急いで学校行こ」
「悪い、長森」
早めに準備を済ませ、学校に向かう。
どうやら、今日は教室でぎりぎりまでレクチャーを受けて、浩平はテストに臨むことになりそうだ。

第3章　この空の向こう

テスト期間中は当然ながら午前中で授業時間は終わる。
まだ明日からもテストはあるのだが、拘束時間が終わるとやはり解放感はあった。
(どっか遊びに行こうかな……)
他の生徒は早々に帰ってしまっている。こんな時にはつるんで遊ぶ悪友、住井護も帰ってしまった後だった。
人通りの少なくなった廊下を、浩平は手持ち無沙汰に歩いていると、階段から上がってくるみさきと鉢合わせた。
「先輩、どうしたんだ。忘れ物か?」
みさきはにっこり笑って首を横に振った。
「図書室に本を返すのを忘れてたんだよ。家に帰ってから思い出して戻ってきたの」
みさきの手には普通よりは一回りほど大きな本が握られている。背表紙にはこの前有名な賞を取ったばかりの作家の名前が書かれていた。小説らしい。
それとは別に表紙の部分にビニールプレートのような、点字を記したものが貼ってあった。多分背表紙に書かれているのと同じことが記されているのだろう。
「これって……」
「うん、点字の本だよ」

みさきは浩平の為に分厚い本をめくって見せてくれた。確かに駅の券売機や街で見る点字のように、ぽこぽこと凹凸ができている。へこんでいる部分はどうやら裏のページの文字であるらしい。
「先輩、点字が読めたのか？」
「前には読めなかったんだけど、最近やっと読めるようになったんだよ。やっぱり読めた方がいいからね、ちゃんと勉強したんだよ」
「テスト期間なのに返しに行くのか。大変だよな」
「返却日は先週だったんだよ」
みさきはいたずらっぽい表情で笑った。
「浩平君はどうしたの？　今帰り？」
「あ、俺も図書室に行くところ」
どうせ暇なのだ。みさきにくっついて図書室に行くのも悪くない。ついでにテスト勉強でもしておこう。
「試験勉強に行くの？」
「まあ、そんなもんだ」
瑞佳が聞いたらひっくり返りそうなことを平然と口にする。しかし今日の騒ぎを知らな

いみさきは笑ってうなずいた。
「じゃ、行こうか」
二人は階段を昇って三階までやってきた。確か三年生のフロアの向こうから図書室へ上がる為の上り階段があるはずだ。浩平が歩き出すとみさきが制止した。
「そっちの階段じゃないよ」
ちょうど屋上と同じ四階になるのだが、それぞれ別の階段でないと辿り着けないようになっている。体が何となくいつも屋上へ昇る為の階段に向かっていたのだ。
「もしかして、図書室に行ったことないの？」
「言われてみれば、一度もないな」
「珍しいね」
「確かに」
現実には浩平の周りの男子生徒の何割かは、図書室など無縁の生活をしているはずだが、それが標準とは言えないだろう。
「こっちだよ。ついてきて」
みさきは浩平の手を取ると、楽しそうに走り出した。
予想していなかったリアクションに驚きながらも、手を引かれているので自動的に浩平

も走ることになる。
「そ、そんなに走って大丈夫なのかっ？」
「私、走るの好きだよ」
二人で手を取り合って廊下を走るというのも、なかなか恥ずかしい光景だったが、テスト初日のこんな時間に教室に居残っている生徒などいなかった。
ありがたいことに人目を気にする必要だけはない。
走るのが好きだというだけあって、みさきは軽々と廊下を曲がり、階段を駆け昇る。黒髪が風になびいてさらさらと音をたてていた。
「着いたよ」
四階は三階より下のフロアとは違って、校舎の半分ほどしか広さがなかった。図書室と、いくつかの資料室や物置があるくらいで、他には何もない。四階面積のほぼ半分が図書室ということになるだろうか。
みさきは浩平の手を放すと図書室の扉を開けた。
さすがに中学校の頃の図書室などより、数段立派な蔵書数を誇るようだ。南側に作られた閲覧スペースで、生徒が二十人ほどノートなどを開けて勉強していた。
「へえ、結構立派なんだな」

浩平が感嘆の声をあげると、たちまち非難の視線が突き刺さる。
「図書室ではお静かに、って、壁に貼ってない？」
小声でみさきが訊いてくる。
よく見るとそこかしこにそれらしい標語が貼ってあった。
「うーん、いきなり図書室が嫌いになりそうだ」
「浩平君だって悪いんだよ。テスト期間なんだから余計にね」
二人は空いている机のところに席を確保した。
「ちょっと待っててね。本を返してくるから」
そう断わるとみさきはカウンターの方へ向かった。
浩平は何となく教科書とノートを出してみたが、当然勉強するはずもなく、何となくみさきの後ろ姿を眼で追っていた。
みさきは図書委員の女の子と何やら話し込んでいるようだ。みさきの黒い髪がしゃらしゃらと揺れたり、図書委員の女の子がうなずいているのが見える。
(期限を過ぎてて怒られてるのかな)
しかし、特に変わりのない様子でみさきは戻ってくる。
「お待たせ」

「怒られてたのか？」
みさきは浩平を安心させるように笑って首を振った。
「ううん、そんなことないよ。さすがに半年遅れた時には怒られたけど」
少しだけ申し訳なさそうな感じをしてみせると、みさきは浩平の向かい側の席につく。
浩平は頭痛がした。半年、というのは並みでできる遅らせ方ではない。
「……もしかして、延滞の常習犯なんじゃないか？」
「うん、そうかもしれない。ちゃんと返却日前に学校に持ってくるんだけど、机に入れたまま忘れちゃうんだ。忘れっぽいからね」
「先輩って、しっかりした感じに見えるんだけどなあ。落ち着いて見えるし」
外見だけなら決して本を机に入れたまま忘れる、などという大ポカをするようなタイプには見えないが、そこがみさきらしい性格と言えなくもない。
「そうだったんだ。知らなかったよ」
みさきが感心したような表情を浮かべる。
「そう言えば、さっきの図書委員とは知り合いなのか？」
「ううん、全然知らない人だよ。もしかしたら廊下ですれ違ったことくらいはあるかもしれないけどね」

「親しそうに喋ってたから知り合いかと思った」
みさきは穏やかな眼をして首を振った。
「私、眼が見えないからね、相手のことをよく知ろうと思ったら話すしかないんだよ。言葉と言葉を交わして、それで相手のことを解って、私のことも解ってもらう……私には、それしかないからね」
「そうか」
「うん。でも、結局は人と話すことが好きだから、っていうのが一番の理由だけどね」
それは映像情報を除けば、眼の見える人間にとっても同じことだ。話した相手の気持ちを知り、解り合っていく為に、言葉を交わし合う。
(俺は、先輩みたいにそうできてるのか?)
言葉を交わした相手のことを、ちゃんと理解しているのだろうか。その努力をしているのだろうか。
例えば長年つきあってきた幼なじみの瑞佳や、今となっては唯一の身内である叔母の由起子のことを、ちゃんと知っているのだろうか。
考えるとあまり自信がなくなってきた。
「そうだ。浩平君の住所教えて」

みさきが微笑んで浩平の方を向いている。光を失っていても、眼に優しさは宿るのだと、何となく浩平は思った。
「住所？」
「うん、浩平君に年賀状を書こうと思って」
そう言えば年末の商店街には、華やかなクリスマスの飾りに押されて目立たないが、そろそろ干支のうさぎがちょこちょこと覗いていた。
「もう、そんな時期なんだな」
「うん、あっという間だよ」
みさきの表情に翳りが見える。どこか悲しそうだったが、その意味は浩平には解らなかった。みさきはその表情を隠すように下を向いて生徒手帳をポケットから出す。
「ここに書いてくれるかな」
「じゃあ、俺も先輩に年賀状書くから住所教えてくれるか」
「うん、嬉しいな」
浩平は一度みさきの生徒手帳に住所を記してから、個人情報が書かれている場所を見て自分の生徒手帳に写す。
「楽しみにしてるよ。浩平君の年賀状」

「あんまり期待しないでくれ。そんな凝ったのはできないから」
「それでも嬉しいよ」
「じゃあ、今日あたり年賀葉書を買っとくよ」
「うん」
帰りにコンビニででも年賀状を買っていこう。そう思いながら浩平はみさきと一緒に帰り支度を始めた。
テスト勉強をしなかったことを思い出したのは、みさきと別れた後だった。

帰り道、近所のコンビニに入って食料調達がてら年賀状のコーナーへ向かった。
(お、結構いろいろあるもんだな)
子供の好きそうな人気アニメのキャラクター商品に混ざって、うさぎの絵をデザインした年賀状が何種類もあった。その前で立ち止まるとあれこれと眼をやった。
しかし、みさきは絵のあるものを送っても見ることができない。だとすると字で書くしかないだろう。浩平は無地の葉書を籠に入れ、弁当のコーナーへ歩き出した。
一応明日からもテストはあるのだから、多少は勉強しておかねばならない。毎日瑞佳に叱られ続けている訳にもいかないだろう。

腹が減っては戦はできぬ、と、多めに籠に放り込んだ。
金を払って外へ出ると、冷たく乾いた風が吹いていた。
(今頃の空、ってのは妙に平面的に見えるよな)
青い空は澄んでいても、どうも水色のペンキを塗ったように淡い色合いだ。浩平は何となくぼうっと空を見つめた。
違和感があった。
(最近、こんな風じゃない空を見てた……)
あれは、どこだったのだろう。
もっとずっと鮮やかな、白い雲が映えて美しい空を見つめたのは。
いぶかしげに空を見上げながら、不明瞭な空の記憶を何とか思い出そうと努力した。
「悪いけどどいてくれないか？」
コンビニに入ろうとしていた大学生くらいの男に声をかけられ、浩平は慌てて入口から歩き出した。
テストが終わってから、浩平はみさき宛ての年賀状を書いた。
別に大したことを書く訳ではない。『あけましておめでとう。今年もよろしく』程度のこ

とだ。残りの葉書は正月に来た分の返事に回せばいい。
（そう言えば、年賀状なんてまともに書いたことなかったよな）
小学校一年の冬、母に教えられながら担任の先生に年賀状を書かされた記憶があった。緊張しながら『あけましておめでとうございます』と書いたそれは、多分他の生徒の書いたものより目立つものでもなく、そのまま埋没してしまうような代物だ。
ついでのようにクラスメートに年賀状を書き、母が自分の出す年賀状と一緒に郵便局に出しに行ったはずだ。
それを脇からうらやましそうに見ていた妹、みさおの視線で、自分が年賀状を人に出すことのできる『おにいちゃん』なのだと自覚して、妙に誇らしかったのを憶えている。
そう、それが最後だった。
ぎりり、と鳩尾（みぞおち）のあたりに重い痛みが走る。
（……次の年はそんな余裕なんかなかったもんな）
あまり思い出さないでいられたはずなのに、何故いきなり昔のことなど考えてしまうのか。馬鹿馬鹿しい、と笑う。
ことさらに明るい表情を作って、浩平はテレビを点けた。
テレビから安っぽいドラマが垂れ流されてくる。その作られた明るさに、浩平はなるべ

く埋没しようとしていた。

テストも何とか無事に終わり、あまり有り難くない答案用紙が返って来る。その日は午前中から雨が降り出してきていた。

ドロップのように大きな雨粒が降ったり止んだりを繰り返している。

（放課後までに止んでくれないかな）

家を出た時に雲行きが少し怪しかったのだが、面倒なので傘を持って来なかったのだ。用意周到な瑞佳は当然ながら傘を持っていたが、授業が終わると部活に行ってしまったので傘に入れてもらう訳にもいかない。

傘を持ってきた生徒は早々に教室からいなくなってしまった。もちろん、濡れるのが嫌な生徒はちゃっかりと傘に入れてもらって帰っている。

何となく帰りそびれたまま窓を見ていた浩平は、しばらくすると黒い雲が流れて陽光が射してくるのを見てほっとした気分だった。

浩平と同じように雨が止むのを待っていた生徒達も、ほっとした口調で挨拶を投げて帰って行った。

（じゃ、俺もそろそろ帰ろうかな）

帰りに商店街で何か温かいものでも飲んでいこうと重い、足を速めた。
ひんやりと湿っぽい風が吹き付けてきた。かなり風は強いようだ。
校門まで向かう途中、雲の切れ間から青い空が覗いているのを見上げた時、屋上に誰かがいるのを見つけた。
(こんな時に外か!?)
風を遮るものなど何一つない屋上は、下よりずっと寒いはずだ。
そこにいるのは女生徒だった。長い黒髪がばさばさと風ではためくのにも構わず、フェンスに寄りかかっているらしい。
「……まさか」
浩平は顔を強張らせた。間違いない。みさきだ。
くるりと後ろを向いて下駄箱まで走った。おざなりに上履きにはき替えると、階段を駆け昇る。
(何でこんな時に)
息をつく時間もなく屋上のドアの側まで寄ると、素手で持つのが嫌になるようなドアノブを回して屋上に飛び込んだ。
風にあおられて髪がうねるようになびく、みさきの後ろ姿があった。

その瞬間、びゅう、と激しい風が浩平の耳を打った。
「みさき先輩っ！」
強い風に負けないように大きな声を出す。何か、みさきが返事をしたようだが、浩平にはその声は届かなかった。
みさきが髪を押さえながら浩平の方を振り返った。
「……雨、止んじゃったね」
みさきは悲しそうな眼で空に広がってゆく青い部分を見上げた。
「雨が好きなのか？」
みさきはしばらく黙り込んだ。
「雨は濡れるから嫌いだよ。でも、降っていてほしい時もあるよ」
そう言うと、もう一度フェンスの方に向き直った。よく見ると袖が雨で濡れていた。これでは腕が冷たくて仕方がないはずだ。
「みんな、この空の向こうにいるんだよね」
みさきはうらやましそうに、見えないはずの空を見上げる。
「みんなって？」
「お友達だよ。クラスのね」

浩平は何と言ったらよいのか戸惑って黙っていた。みさきが寂しそうに笑う。
「さっきまでみんな一緒にお喋りしてたんだけどね、雨が止んだらみんな行っちゃったよ」
「先輩は一緒に行かないのか？」
みさきは曖昧にうなずいた。
「でもな、こんなとこにいても仕方ないと思うぞ」
ひどく寒いし、風にあおられて髪がくしゃくしゃになるばかりだ。
「私も、そう思う」
「だったら、一緒に帰ろうか。家まで送ってくよ」
一人ぽつんと立っているみさきの姿は、あまりに頼りなく、寂しかった。
こんな場所に一人でいてはいけないのだ。暖かい場所で息をついて、熱い飲み物でも飲んで落ち着くべきだと思った。
もちろん、それを浩平がみさきに差し出してやることはできないが、みさきの家はすぐ側だ。家族がそうしてくれるだろう。
うつむいたみさきに念を押すように、浩平はもう一度みさきに呼びかけた。
「先輩」
「……そうだね」

その時にはみさきの表情は穏やかなものになっていた。
浩平の方に笑顔を向ける。
「ありがとう、浩平君。行こうか」
浩平はみさきの先に立って重いドアを開けてやった。
ふたりで階段を黙って降り、すっかり人気のなくなった下駄箱で靴をはき替えると、校門に向かって歩き出した。
校門の側に来たあたりで、みさきは屋上を振り返った。視線を上へ向けたまま、みさきは浩平に話しかけた。
「今日はね、いいことだってあったんだよ」
「そうなのか」
うん、と小さくうなずいた。
「だって、浩平君と逢えたからね」
みさきの笑顔から寂しさがなくなったことが、浩平には一番嬉しかった。
約束通りみさきを家の玄関まで送り、浩平は一人帰路を歩く。
商店街のファストフードショップや喫茶店などには、浩平と同じ制服を着た生徒達が混ざっている。みんな寒さから逃れて楽しくお喋りしているのだろう。

（どうして、みさき先輩は友達と出かけないで、あんなに寂しそうにしてたんだ？）
童話の中の、魔女に閉じ込められて、どこにも出られないラプンツェルのようにうつむくみさきの姿は、あまりに悲しすぎる。人懐っこく、明るい普段のみさきを見ていると、余計にそのギャップが気になる。
例えば雪見あたりとでも商店街をぶらついて、楽しげに甘いものでもぱくついている方がよほど似合っているはずだ。
寒空の下を、根性でウィンドウショッピングを敢行する少女達が、浩平の横を通り過ぎていった。
友達とのパーティの話に興じているようだ。
（パーティ、か。もうあさってだな）
そう言えばクリスマスに遊びに出る予定は全くなかった。すっかりクリスマスの予定を入れるのを忘れていたのだ。
終業式が終わったら、ゲームセンターで時間を潰して、帰りにクリスマスらしい食べ物でも買って帰ろう。もしかしたら瑞佳あたりが何か差し入れしてくれるかもしれない。
由起子も会社のクリスマスパーティに出席するので、遊び相手を捕まえそこねると一人きりの時間を持て余すことになる。

（ま、それもいいか）
クリスマスは暖かい部屋で、テレビでも見て過ごそう。
実に若者らしくない予定を立てながら、浩平はクリスマスに食べるものについて考え始めたのだった。

浩平のわびしいクリスマスイブ計画は当日になってつぶれてしまった。
終業式に出席する為に生徒達がごった返している体育館で、住井護が岩を運んでみないか、と訊いたのだ。
「……岩？」
浩平があっけにとられて呟くと、住井はうなずいた。
「箕浦（みのうら）って憶えてるか？」
「ああ」
今は別のクラスだが、一年生の時に浩平や住井と同じクラスだった少年だ。
「あいつが地学部の部長だってのは知ってるか？」
「いや、そもそも地学部なんてものがうちの学校にあったことが初耳だ」
住井がにっと笑うと、実は俺もだ、と付け加えた。

「まあそれは置いといて、今日な、ＯＢから研究用の岩だの何だのが届くらしい。いっぱいあるらしいんだが、部員はみんなクリスマスだから出てこない」
「それで助っ人、か」
「見返りははずむって言ってたぜ。大体地学部なんて半分以上は幽霊部員らしいしな」
ここで後を逃したら、たった一人で岩と格闘する羽目になるのだから、箕浦は金でも何でも出すだろう。
「で、やるか？」
浩平は考え込んだ。
普通に考えればそんなことはごめんだが、懐はかなり寂しかった。背に腹は換えられない。住井に言いくるめられて安値で叩き売られる可能性もなくはないが、その時は責任をもって住井に損失補塡（ほてん）をしてもらおう。
「解った。騙されたと思ってその話を受けよう」
「よし。箕浦には言っておくから放課後に地学部へ行ってくれ」
そろそろ人の流れも動くようになってきた。浩平と住井は体育館の方に流れる列に加わって歩き出したのだった。

ＨＲが終わると、教室から嬉しそうに生徒達が飛び出してゆく。
帰り際、瑞佳が浩平の席まで寄ってきた。
「浩平、クリスマスはどうするの？」
「労働だ。地学部に雇われた」
瑞佳はにっこりと笑った。
「そうなんだ。えらいね」
「長森はどうするんだ？」
「いつもみたいに佐織(さおり)達と持ち寄りパーティだよ。これから家に帰ってお菓子とかお料理を作らないといけないの」
瑞佳は料理が上手なので、クリスマスパーティの帰りに余り物を差し入れしてくれる時がある。もちろん重要な栄養摂取源だからアピールは忘れない。
「何か食い物が余ったら差し入れしてくれ」
「うん、じゃあね」
瑞佳が手を振って教室を出て行った頃には、そろそろ教室からは人気がなくなってきていた。
（しょうがない。行くか）

浩平は溜息をつくと部室がある第二校舎の方へ向かった。

地学部で箕浦から一緒に荷物が置いてある場所と運ぶ場所をそれぞれ聞いた浩平は、思わず叫び声をあげた。

「な、何でそんな場所に置いていったんだ！」

運送業者が第一校舎の西の端にある客用入口前に置いていった荷物を、第二校舎三階、東端にある地学資料室まで運んでほしいというのだ。

ひたすら階段を昇り、渡り廊下を歩き、突き当たりまで進む。

第二校舎二階、渡り廊下を渡ったすぐのところにある地学部まで運べばいいと思い込んでいた浩平はその瞬間、騙された、と思った。

「先生がさ、一応標本のチェックとかを冬休みに済ませるって言うんだよ。授業で使えそうなものはそっちに回すかもしれないからって」

「歩く距離が全然違うぞ」

箕浦は肩身が狭そうにうなずいた。

「部員に話したら全員逃げたよ……。普段から出てない部員じゃ、そんなに強いことも言えなくてさ」

「ま、そうだろうな。仕方がない、雇われた身だ。やるか」
浩平達は第一校舎まで移動すると、誰もいない客用入口の前で呆然とした。
「……これは、何だ」
欠けない為にだろう。古い毛布の上にいくつもいくつも頭くらいの大きさの岩が置いてあった。それだけでなく箱に入った標本だの、雑誌だのが乱雑に積み上げられていた。
「家に置き場所がなくなって押し付けたんじゃないか？」
「言うなよ。俺もそんな気がする」
げんなりしながら二人は黙々と荷物を持って往復した。
それが終わったのは既に夕方近かった。
「折原、本当、に、すまなかった。これは、ほんのっ……お礼だ」
地学資料室のドアを施錠すると、箕浦はぜいぜい言いながら財布からお金を出した。
一万円。高校生のバイトとしてはかなり割がいいだろう。
「じゃあな、また来年」
箕浦は地学部の部室も施錠する為に階段を降りていった。
浩平は溜息をつきながら一万円札を自分の財布にしまって、渡り廊下の方へ足を向けた。
三階の渡り廊下に付いている窓から、桃色から濃い赤に染まりつつある空を見た。

今頃クラスの大部分の生徒はクリスマスイブを楽しんでいるのだろう。
それに較べると浩平のクリスマスイブは実にわびしいが、財布もうるおったことだし、まあいいとしよう。
(とりあえず、商店街で何か買い出ししていくか)
そんなことを思いながら第一校舎に差しかかる。
もうとっくに人気はなかった。三年生はさすがにクリスマスを謳歌する生徒は少ないだろうが、勉強に熱を入れなければならないからこんな時間に残っているはずもない。
しかし、ひとつの教室のドアが半開きになっているのを見て、浩平は何となく覗き込んでみた。
窓際の前の方の席に座って、夕陽が美しい窓の方を向いている生徒がいた。
黒い髪にオレンジ色の光を照り返し、美しい光景だった。しかし、その少女の後ろ姿はひどく、寂しそうだった。
「先輩」
「……まだいたんだね、浩平君」
さらさらと音をたてて、黒髪が衿から落ちる。みさきは穏やかな声で浩平に話しかけていた。しかし、その穏やかささえ寂しく感じてしまう。

「ちょっと用事があったんだ……先輩は？」
「私は、何となくね」
いつもよりずっと、か細げに見えるみさきは、小さな声で呟いた。
「みんな、いなくなっちゃったね」
「そうだな」
「だから、浩平君が声をかけてくれて嬉しかった」
「明日から冬休みだからな、みんな遊び回るつもりなんだろ」
「浩平君は、帰らないの？」
「これから商店街にでも寄ろうと思ってるんだけど、よかったら先輩も行かないか？」
みさきがこんな風に外を見ていたことは、前にもあった。普段のみさきと違って、そのまま消えてしまいそうな悲しい姿で空を見つめていた。
いつものように笑ってほしかった。
「駄目か？」
「ごめんね、浩平君」
みさきはうつむいたまま謝った。しかし、断わられても浩平はそのまま帰ってしまう気になれなかった。

どうしてもクリスマスをみさきと一緒に過ごしたかった。
そうでないとみさきは、教室に見回りの先生が来るまでずっとひとりで寂しそうにしているのではないかという気がする。
みさきが楽しそうにしている姿が見たかった。
「だったら、ここでやろう」
「……ここで?」
みさきは浩平の方を向いた。眼によぎるのは儚げなものであったけれど、浩平の言葉の続きを聞きたがっているのが解る。
浩平はたたみかけるように続けた。
「多分、家に帰ったら昔使ってたクリスマスの飾りとかが残ってると思うんだ。せめて電飾のツリーくらいは飾って、それから、お菓子とジュースくらいは用意して。そうしたら、充分クリスマスの雰囲気は味わえると思うんだけどな」
「浩平君に、迷惑がかかるよ」
「俺は何も予定はないから全然構わない」
みさきの頬が、夕陽に染められてほんのりと赤く見える。どことなく困ったような、それでも悪い気分ではないらしい表情で、みさきは念を押した。

「私でいいの？」
「ああ」
先輩だからこそ、一緒に過ごしたいんだ。そんな言葉は恥ずかしくて言えなかったが、代わりに力強くうなずいた。
みさきの顔に、嬉しそうな笑みが戻った。
「だったら、ここで待ってるね」
「すぐに戻って来るから」
「うん、待ってる」
浩平は教室から駆け出して階段を降りると、下駄箱で靴をはいて学校を飛び出した。
鮮やかな夕焼けの中、浩平は普段の遅刻寸前デッドヒートにも勝るスピードで家へ戻った。瑞佳と一緒でない分、加減して走る必要もない。
鍵を開けるのももどかしく、家の中に駆け込んだ。
古いものをまとめて突っ込んである押し入れから、それらしい箱をがさがさと引っ張り出し、床に片っ端から積んでゆく。
クリスリスツリーはどこにも見当たらない。
昔探していたボードゲームや、由起子が使わなくなった自動パン焼き機などが出てくる

が、肝心のものはどこにもなかった。
(捨てられたのか?)
だとしたら無意味に探している時間がもったいなかった。
浩平は荷物をそのまま放り出して、鍵だけかけると瑞佳の家へ向かった。確か瑞佳の家にも同じようなツリーがあったはずだ。
確か瑞佳はクリスマスパーティに出かけると言っていた。早く行かないと家にいないかもしれない。
「あれ、浩平」
瑞佳はちょうど大きなバッグを抱えて玄関から出て来たところだった。多分プレゼントや持ち寄りの料理などが入っているのだろう。
「長森、頼みがある」
「どうしたの? わたし、今から出かけるところなんだけど」
「時間はとらせない。ちょっと借りたいものがあるんだ」
瑞佳はドアの横に荷物を置いた。
「家庭用のクリスマスツリーを貸してくれ。おまえの家にもあっただろ?」
「あったと思うけど……」

「頼む！　貸してくれ、今すぐ」
瑞佳は慌てて家の中に入って行った。しばらく待つと疲れたような瑞佳が手ぶらで戻ってくる。
「ごめん、なかったよ。お母さんが去年捨てちゃったんだって」
「くそっ、困ったな。じゃあ、何か代わりになるものはないか？」
困り果てた浩平に同情したらしい瑞佳が心配そうに訊いた。
「代わりって？」
「何か灯りの点くもの、それとできれば何か食い物も」
「わ、解った探してみる」
もう一度瑞佳が中に戻っていった。中から瑞佳が母や祖母を呼んでいる声が聴こえてくる。先刻よりも長い時間待たされた後で、瑞佳が肩で息をしながら駆け出してきた。その手には大きめのスーパーの袋が握られていた。ポテトチップスの袋らしいものが透けて見えている。
「あったお菓子全部持って来たけど」
「ありがとう。全部もらっていく。明日弁償するから」
「そんなにどうするの？」

「もちろん食べる」
「みんなでパーティするの？」
「二人だ。そういうパーティなんだ。気にするな」
「まあ、浩平がそう言うなら気にしないけど……あと、灯りね。これしかなかったよ」
瑞佳が申し訳なさそうに一度スーパーの袋から白いものを引っ張り出した。どう見ても仏壇御用達の白蠟燭だった。
クリスマスには全然ふさわしくないが、暗闇で二人ぱりぱりとポテトチップスをかじるよりは数段ましかもしれない。
「これ、マッチね」
近所の酒屋の名前が入ったマッチを渡される。
「サンキュ、じゃあな」
浩平は瑞佳に手を振ると、急いで学校に戻っていった。もう夕陽の赤は色をひそめつつあり、雲の色は紺色に変わりつつあった。
下駄箱まで着くと適当に上履きを引っかけ、そのまま階段を駆け上がる。
目指す教室のドアを開くと、そこはもう薄闇の中だった。
「……浩平、君？」

半ば消えつつある夕陽の残照を受け、みさきはたたずんでいた。
「悪い、遅くなった」
浩平は肩で息をつきながら、開けた扉にもたれかかって呼吸を整える。
みさきはいたずらっぽい笑みを浮かべて首を振った。
「ううん、私も今来たところだったから」
「え？」
「一度言ってみたかったんだよ、今の台詞」
そう言えばデートで定番の台詞である。浩平は微笑んだ。
「そうだ。先輩、メリークリスマス」
「メリークリスマス、浩平君」
みさきの楽しそうな顔を見て、浩平は走ってきた甲斐があったと思った。

第4章　セレモニー

「あとひとつ、謝らなきゃいけないことがあるんだ」
「何？」
浩平はビニール袋から蠟燭を出しながら少し口籠もった。
「クリスマスらしい物、全然集まらなかった」
「そうなんだ」
「約束、守れなかったな」
みさきは黙って浩平のことを見つめている。
その表情は浩平が危惧していたような失望ではなく、包み込むような、やさしいものだった。
「あのね、約束って結果じゃなくって、守ろうとしたかどうかが大切なんだと思うんだよ。浩平君は私の為に頑張ってくれたんだよね？　だから、私は本当に嬉しいよ」
浩平は自分が小さな子供みたいに心細い顔をしているのではないかと思った。しかしその顔は決してみさきに見えることはない。
みさきはふんわりとやさしい笑顔を浮かべてくれた。
「ありがとう、浩平君」
その笑顔に見とれてぼうっとした浩平に、切羽詰まった表情でみさきが言った。

「でも、お腹空いたよね」
浩平はにっと笑ってみせた。
「あ、そう言えば食べ物の調達に成功したんだ。ポテチしかないけど」
「嬉しいよ」
明らかに幸せそうなみさきの為に、浩平はポテトチップスの袋を開いて机に並べてやる。醤油味のポテトチップスから匂う醤油の香りが食欲をそそった。
みさきが椅子につく間に次々と袋を破ってゆく。
「ありがとう、浩平君。いただきます」
みさきがうす塩味のポテトチップスに手を伸ばした。
「おいしい」
よほど空腹だったらしい。その食べっぷりにつられて、浩平もポテトチップスをかじった。いつも買わないメーカーのものだが、思ったよりおいしかった。
「確かにうまいな。このシリーズは食べたことなかったけど、結構いける」
「うん、おいしいね。今度買ってみようかな」
「こっちの醤油味のもいけるぞ」
「あ、それもう食べた」

二種類しかないポテトチップスでは仕方がないだろう。
浩平とみさきはあっという間に5袋もあったポテトチップスを平らげてしまった。
「お腹いっぱいになったね」
「そうだなあ。でも、クリスマスやってる雰囲気じゃないな」
「そうだね、何が足りないのかな」
可愛い飾りの吊るされたクリスマスツリー。輝くイルミネーション。甘くておいしいクリスマスケーキ。手の込んだご馳走。ほとんど何もかも足りないような気がしなくもない。
「そう言えば、一応蠟燭があったんだ」
空袋を片付け、浩平は蠟燭を立ててみた。
「どんな蠟燭?」
浩平は溜息をつく。どう見ても丑の刻参り御用達、よくてコックリさんの演出にぴったりの白い蠟燭だ。お祝いの席に似つかわしいとは言えない。
「仏間にあった蠟燭」
「仏壇から持ってきたの?」
「幼なじみの家から徴収してきた。これしかなかったらしい。とりあえず今は机の上に立ててみたけど」

二人して蠟燭のある場所に顔を向けている。
みさきが突然吹き出した。
「何だよ先輩、突然笑って」
「きっと凄く変な光景なんだろうな、って、想像しちゃった」
確かに凄く変な光景だった。
どんどんクリスマスとは無関係の、謎の集会めいてきたが、みさきが楽しそうに笑っているからそれでいいと思った。
「ね、蠟燭に火をを点けてみようよ。少しはクリスマスらしくなるかもしれないし」
「……そうだな」
怪しさは火を点けたくらいでは全然変わらないような気がしたが、多少はましになるかもしれない。浩平は瑞佳からもらったマッチをポケットから出して、マッチ箱を開けて一本取り出した。
「一応蛍光灯は消した方がいいと思うよ」
「そうだな」
浩平は入口のスイッチを押して電気を消した。教室の中が薄紫に染まる。
机のところまで戻ってきて、マッチをこすった。ぽう、と小さな光の点が現れる。それ

を蠟燭に近付けた瞬間、蠟の焦げる嫌な臭いが一瞬だけ鼻につく。
蠟燭の先にも小さな光がともった。それを確認してからマッチの火を消した。
みさきは蠟燭の方を向きながら、息で吹き消さないように小声で訊いた。
「クリスマスに見えるかな」
薄暗いところで固まって蠟燭に向かう二人。真っ白な蠟燭にともされた火はゆらゆらと揺れる。室内は段々闇の中に沈み、小さな灯りが唯一の光源となる。
ぼうっと浮かぶ二人の顔。
どう考えても怪しい儀式だ。
「現状維持ってとこだな」
不気味な光景なのは灯りを点けても一緒だった。
「そっか」
みさきはうつむいた。
「ごめんな、こんなものしか集められなくて」
「そんなことないよ。だって、ほら」
みさきは蠟燭の小さな火に掌をかざして微笑んだ。
「あったかいよ。だから、私はこれで充分だよ」

「そうか」
精一杯浩平の努力をねぎらってくれるみさきのやさしさが嬉しかった。
みさきは少し考え込むと、浩平の方を向いた。
「ねえ、もし今誰かがこの教室を覗いたら、二人でクリスマスを過ごしてるって思ってくれるかな」
「うーん、多分思わないんじゃないかな」
呪いの儀式を目撃したと思い込んで悲鳴をあげられることはあっても、いい雰囲気でクリスマスを楽しんでいるとは間違っても思われないだろう。
「それだけがちょっと残念だけどね」
みさきが少し苦笑した。

すっかり真っ暗になってから、二人は学校を出た。ほんの数メートルといった距離のみさきの家までエスコートしてゆく。
「今日は本当に楽しかったよ」
門に入ったところでみさきが振り返る。
浩平はみさきに華やかなクリスマスを用意してやれなかったのが残念だった。何もそれ

らしいものがないクリスマス。あったのはポテトチップスの袋と和蠟燭一本だけ。
思わず沈んだ声になってしまった。
「悪かったな、無駄に時間を使わせて」
「浩平君、本当にそう思ってる？」
みさきの顔に厳しいものがよぎった。真剣な表情で浩平の方を向く。
「もし、本当にそう思ってるなら、私だって怒るよ」
「……先輩」
「私はね、浩平君と一緒に過ごせて本当に嬉しかったんだよ。だから無駄な時間なんて言わないで、ね？」
みさきの言葉が染み入ってくるような気分だった。
浩平は泣き笑いに似た表情でうなずいた。
「解ったよ、先輩。楽しんでくれたなら俺は嬉しい」
「うん」
やっとみさきは表情をやわらげてくれた。
「それじゃ、新学期もよろしくな。先輩」
「そうだね、次に逢えるのは来年かな。その時はまた、元気に挨拶してね、浩平君」

「ああ」
浩平は自然に漏れる笑顔をみさきに向け、扉を開けてやった。
「ばいばい、浩平君」
みさきは手を振ると扉を閉めた。
閉められた扉を見つめながら、浩平は心の中で呟いた。
(じゃあな、先輩。また来年逢おうな)
来年もみさきの笑顔を見たかった。
浩平は一人帰路を歩く。
食事調達の為に寄った商店街には、楽しそうに歩く人達が大勢いた。何もかも揃った、至れり尽くせりのクリスマスを楽しむ人達。
しかし、今の浩平は彼らのことをうらやましいとは思わなかった。
傍から見たら暗がりでポテトチップスを食べて、蠟燭に向かう怪しい集会でも、みさきと一緒に過ごせて、その時間をみさきが楽しいと言ってくれたのだから。
胸の中が温かかった。
クリスマスらしい食べ物を適当に見つくろって買うと、そのまま家に向かう。
誰もいない家で食事を済ませ、テレビを見て眠った。

今日は本当にいい日だったと思いながら。

年が明けた。

浩平はゆったりと昼前に起きて一階に降りた。さすがに空腹になったのだ。

しかし、おせち料理などという日本文化の一端はこの家には存在しない。普段仕事に追われる由起子にとって、年末年始はゆったりとまとめて取れる休みでしかなかった。

空腹になったらもぞもぞ起きて来て、インスタント食品で腹をふくらませ、再びベッドに戻ってごろごろする。本来は浩平と同じく朝に弱い由起子にとって、寝正月は至福の時間であるらしい。

幸いインスタント食品、レトルトパックの類は山ほど買いだめしてある。

昨日由起子にお供を命じられて、スーパーで荷物持ちをさせられたばかりだ。一応正月用に酒なども買い込んであるが、ほとんどは由起子の口の中に消えるはずだった。

「浩平、あけましておめでとう」

リビングに来ると由起子がソファで年賀状を仕分けしている。

「これ、あんたのよ」

「あ、サンキュ。由起子さん、これからどうすんの？」

由起子は仕事の時とは違ってノーメイクだが、一応パジャマでない格好をしていた。正月にしては珍しい。
「寝たら眼が冴えちゃって、退屈だからお菓子でも作ろうと思ってね。浩平も後で味見してちょうだい」
よく見ると由起子の側には近所のコンビニの袋が置いてあった。足りない材料でも買い出しに行ったのだろう。
「あんたは何か予定あるの？」
「明日には住井達が来る。泊まってくと思うけど」
はいはい、と由起子はうなずいた。
「瓶だの缶だのはまとめてキッチンに出しとくのよ」
住井達が来ると正月は勝手に持ち込んだ酒でどんちゃん騒ぎなのは、すっかり読まれているらしい。浩平は苦笑した。
由起子はそのままキッチンの方へ入っていった。一応浩平もキッチンでカップ麺にお湯を注いで箸と一緒に持って出ると、自分の年賀状を持って2階へ上がった。
由紀子がキッチンを使っている時には落ち着いて食べられない。
自分の部屋でラーメンをすすり終えると、浩平は年賀状にかけてある輪ゴムを外す。

（案外来てるもんだな）

いつも綺麗な字で書き送ってくれる瑞佳や、クラスの面々から何枚も来ていた。もちろん、ダイレクトメールは別によけて捨てる。

「……あ？」

区分けをしている途中、ひどく目立つ葉書があった。

下手、というレベルの字ではないのだ。よくこれで届いたと感心してしまうほど、字として体をなしていない。実際、差出人の名前は全く読めなかった。

裏返すと、同じくのたくったような字と、ピンクのサインペンで描かれたイラストのようなものがあった。耳がふたつあるところから、それが干支のうさぎであるのだろうと推測するのがやっとだった。

（いたずらか？）

住井あたりが面白がって送り付けてきたのだろうか。そう思ったが、住井の年賀状はその下にあった。どうやら親が印刷に出した年賀状をそのまま流用したらしい、あまり若向きでないデザインの葉書に、２日はよろしくな、と書き添えてある。よく見るとふたつの年賀状は消印が違っていた。

浩平はしばらく問題の年賀状を見ていたが、一応他の年賀状と分けて机に置くと、ベッ

ドに横になってテレビを点ける。
ぽうん、と体が跳ねたその時、ひとつの考えが浮かんだ。
「ちょっと待て！」
浩平は乱暴にベッドから起き上がり、その葉書を手に取った。いびつなイラスト、読むのに苦労する文字。まるで小さな子供が書いたような年賀状だった。
（……みさき先輩だ）
精一杯、浩平に読めるように努力をして書いたのだ。出来を確かめられないまま、少しずつ、長い時間をかけて。
『浩平君に年賀状を書こうと思って』
去年、みさきはそう言っていた。約束通りみさきは年賀状を送ってくれたのだ。
その瞬間、浩平は自分が送った年賀状のことを思い出した。そっけなく、ただ『あけましておめでとう。今年もよろしく』と書かれた文面。
みさきは決してその文章に眼を通すことができないというのに。
自分の愚かさと思いやりのなさを心底後悔した。できることなら過去まで戻って、年賀状を書いている自分を殴ってやりたい気分だった。
浩平は急いで服を着替え、財布を持って階段を駆け降りた。

『先輩は俺に読める年賀状を送ってくれたんだ。俺だって……！』

ものを凄い音をたてて降りてきた甥に驚き、由起子はキッチンから出て来た。手にはどろりとした生地の付いた泡立て器を持ったままだ。

「ちょっとどうしたの！」

「本屋！」

立ち止まることなく玄関から怒鳴り返した。由起子には悪いが、すぐにでも行かなければならないのだ。

浩平は走った。

神社へのルートから外れている商店街へのルートでは、ほとんど人とすれ違うことはなかった。店のほとんどは当然ながらシャッターが下りていた。

商店街の中にある本屋も、三日までは休みと貼り紙がしてあった。

「くそっ」

こんなところで途方に暮れている場合ではないのだ。

(確か、幹線道路沿いの本屋って、年中無休だったよな)

商店街から引き返し、自宅とは反対方向へ曲がった。学校を通り過ぎた幹線道路沿いには大きな本屋があった。そこなら必ず空いているはずだ。

浩平は優に三十分は走って、いつもは行かない遠い本屋まで辿り着いた。
レンタルビデオ屋と兼用になっている、大きな郊外型の本屋は暇つぶしを求めて来た客達でごった返している。
浩平は点字関係の本を四苦八苦して探した。
「あ、あった……」
ぜいぜいと息をしながら、浩平は何冊かある点字の本を見つくろった。一通りの点字が載っていて、解りやすいものを選ぶ。
しかし、点字を記すには点字器や点筆などの専用の道具が必要となってくるのだ。そこまで用意している時間は全くなかったし、どこで売っているかも解らない。
(どうしたらいいんだ！)
とりあえず家へ戻りながら、点字を打つ方法を考えていた。
六つの点が規定の位置に並んでいさえすればいい。そう割り切ることにした。
(仕方がない。爪楊枝ででも打つか)
そう決まってしまうと何とかやるべきことが見えてきた。
浩平は家に戻ってキッチンに入った。
「おかえり、浩平。さっきはどうしたの？」

テーブルのところで紅茶を飲んでくつろいでいる由起子が訊いてきた。ケーキは既にオーブンの中で焼かれている最中らしい。
「今からどうしても書かなきゃいけない年賀状があるんだ」
浩平はおもむろに爪楊枝を数本摑むと、真剣な表情で返事をする。
由起子は軽く笑いかけた。
「そう。後でお茶とケーキを持ってってあげるわね」
甥のことを思いやっているのか、元々からの性格か、深いことは訊かないでいてくれる。
自分の部屋に戻ると、机に乗ったラーメンのカップを脇にどけて、浩平は本を開いた。
ひらがなが載っている箇所を見てから、一度レポート用紙を取り出した。
念の為、書き出してみた方がいいかもしれないと思ったのだ。

あけましておめでとう

たったそれだけの言葉を綴るのに、浩平は30分以上かかってしまった。一応日本語で書かれているはずのものなのに、馴染んでいない文字を記すのは大仕事だ。
(だ、濁点は文字の前!? うわ、書き直しだ)

いきなり打ち出しては葉書の無駄になるだろうと思っていたが、それ以上だった。シャープペンシルでいい加減に六つの点で文字を記してゆくだけなのに、ひどく戸惑った。

何度も消し直しては書き、やっと完成した『あけましておめでとう』は、消しゴムのかけすぎですっかり汚くなっていた。

問題はこれからだった。

穴の部分に点筆を押し込めばいいようにできている、ちゃんとした点字器がない以上、点字を打つのにとんでもない手間がかかる。

浩平は定規を出してレポート用紙に一文字に当たる六点と、空白の位置をきっちりと測ってシャープペンシルで点の位置に印を付けていった。

一応見本がある分、かなり楽にはなった。

それからコンパスを出して、何も書かれていない年賀状の表側にレポート用紙の点の位置に針を刺してゆく。

その途中で大事なことに気付き、浩平は手を止めて突っ伏した。

「左右逆だ……」

裏側から打つのでは凸面では逆になってしまう。浩平はもう一度点の位置を裏表逆にしたものを作り、もう一枚年賀状を出して穴を空けた。

その段階で表側にみさきの住所と氏名を書いた。

「……で、できた」

結局、全てが間に合わせの材料で何とか点字らしきものを打ち終わったのは、夕方になってからだった。

がちがちに肩がこって痛かった。

「あれ？」

気が付くと、本棚の前にケーキと冷め切ったお茶が乗ったトレイが置いてあった。その代わりにラーメンのカップは消え去っている。刻んだナッツの入ったパウンドケーキを頬張ると、アイスティになっていた紅茶を飲み干した。

完成した年賀状をポケットに入れ、トレイを持つとキッチンまで向かう。

リビングに由起子はいなかった。また眠ってしまったのかもしれない。

浩平はあまり音をたてないようにリビングを出ると玄関へ歩いて行った。ドアを開けるとすっかり暗くなってしまっている。

空気は冷たいが、風は吹いていない。鍵をかけて、浩平は歩き出した。

（先輩、ごめんな）

今から慌てて年賀状を出しても、浩平の罪悪感が消える訳ではないのだが、ちゃんとみ

さきに読んでもらえる葉書をすぐにでも届けたかったのだ。
いい加減な方法で打っているので、通常の郵便で運ばれている間に、点字がこすれて読めなくなるのも心配だった。
学校への道を一人歩く。
誰もいない学校の側に建つ川名家には、当然のように灯りが灯っていた。家の中でみさきは今頃食事をしたり、本を読んだりしているのだろうか。
川名家の門の前で、浩平はしばらく黙って立っていた。
外からでは家族の団欒の気配は窺うことはできない。
「……あけましておめでとう、先輩」
そう呟くと、浩平はポストにたった一枚の年賀状を差し入れたのだった。

●●●

ないしょで廊下に相合傘を書いた
私の名前と、大好きなドラマの俳優さんの名前がちょこんと並ぶ
ぜったいに見えないところだから見つからないよ

ドラマを見てて、直美ちゃんはそんなにかっこよくないって言ったけど、私はすごくいいなあって思うんだ
先週のラストで、思わず泣いちゃったよ
せっかく感動したのに、お母さんったらお風呂に入っててもったいなかった

来週は野球中継で潰れるんだって言ってた
つまらないね
次はどうなるんだろうな

●●●

冬休みが終わり、今日は始業式。
学期の初めも終わりも、長くて退屈な校長の話を聞かなければならないというのは、学生生活で理不尽だと思うことのトップ10に上がるだろう。もしかしたら延々と長話を聴くことで精神の鍛練をしろ、ということかも知れない。

長話地獄から解放されると、浩平は人込みの中でくきくきと肩を鳴らした。
冷たい空気もこんな時にはすがすがしい。
浩平が気分よく体を反らすと、屋上が見えた。
屋上に覆い被さる青い空が閉ざされたドームのように感じたのは、そこに立って外を見ているらしい人影があったからだろう。
「……先輩」
風に煽られて黒い翼のように髪がざわめいたのを見て、浩平は小声で呟いて走りだした。
小走りに人の波を抜けてゆく途中には、掃除当番らしい生徒達がほうきや雑巾を持って移動するのが見えた。今日はこの後大掃除だったかと思いもしたが、とりあえず屋上へ行く方が先だった。
金属扉が重いのは、風で押されているからだったらしい。いつもより苦労して扉を開けると、屋上に足を踏み入れた。
そこにいる女性は、白を混ぜた水色の空の下で風に吹かれていた。
「……みさき先輩」
何となく口籠もってしまった浩平の声に反応して、みさきは振り返った。浩平の好きな、全てを明るくしてくれる微笑みを見せてくれる。

「浩平君だったんだ。お久しぶりだよねっ」
「そうだな、去年のクリスマス以来か」
あの時からかもしれない。
みさきのことをもっとよく知りたいと思ったのは。
面白くて、可愛い先輩。眼が見えないことのハンデなどみじんも感じさせない明るさと、浩平には見えない傷を持った女性。
みさきが浩平に書いてくれた年賀状は、彼女の、掛け値なしの誠実さを示していた。その誠実さにふさわしいだけの行動を返すべきだった。
それなのに浩平が最初に送った年賀状は、みさきが読むことのできないものを送り付ける始末だったのだ。
「今、始業式が終わったところ？」
「ああ、今日は子供時代の感動秘話を延々と聞かされた」
くすっ、とみさきが笑った。
「あの人は話好きだからね」
「炎天下のグラウンドでなくて本当によかったよ……って、先輩は始業式には出なかったのか？」

「さぼっちゃった」
みさきがいたずらっぽく笑った。
「うわ、裏切り者」
「だって、退屈だからね」
「それはそうだけど……ううう、何だか理不尽に感じるぞ。俺もさぼればよかった」
「そう言えば、挨拶をまだしてなかったね」
みさきは笑顔を浮かべると、空から視線を外して浩平の方を向いた。
「浩平君、あけましておめでとう」
改まった口調で言われ、浩平は口籠もってしまう。
「あ、ああ」
「そうだ。年賀状ありがとう。それも二枚も」
びくり、と浩平の体が震えた。おそるおそる切り出してみる。
「……ちゃんと読めたか？」
「うん、あけさして、って書いてあったけど。三の点を打ち忘れたんだね」
点字の本を首っ引きで見ていたので、三の点が左下の点であることは憶えていた。
「あれ、どうやって打ったの？　点字の筆記具ってすぐには手に入らないよね」

「爪楊枝の裏で押したんだ」
みさきは楽しそうに笑い声をたてた。
「笑うなって」
「ご、ごめん……ちょっと想像しちゃって」
確かに自分で思い出しても間抜けな光景だった。にわか仕込みでまともな器具も揃わない中、間に合わせ的にそのへんの物で打ったのだ。
みさきの笑い声が消えたと思うと、感心したような表情になっていた。
「でも、大変だったでしょ？」
そこが、限界だった。
「ごめんな」
「どうしたの？」
「先輩は、俺の為に届くように書いてくれたのに……」
みさきの顔を見ることができなかった。みさきの誠意に応えられなかった罪悪感に押し潰されそうだったのだ。
「ありがとう」
何を言われたか意味が解らないまま、浩平は顔を上げた。

「え？」
「だって、ちゃんと届いたからね」
「俺は、自分が許せない。最低な奴だと思う」
「そんなことないよ」
みさきの声が揺れた瞬間、浩平は息を呑んだ。
みさきの、光を映さない眼から涙がこぼれていたのだ。涙は頬を伝いながら、一筋、コンクリートの床に落ちた。その表情を見た浩平は、それ以上自分の不手際を悔やむ気持ちを忘れてしまった。
それは今まで見たことのない、幸せな笑顔だったのだ。
「だって、嬉しかったから……本当に、嬉しかったから」
「先輩」
浩平が呆然とみさきを呼んだ。
「本当に、嬉しかったんだよ。だから、ありがとうだよ。だから……そんな悲しいこと言わないで」
この人は本当に年上なのだ。
お茶目な言動や、ふざけあっている関係のせいで普段意識はしなかったけれど、こんな

風に浩平を包み込んでくれる大きさを持っている人なのだ。
浩平は痛感した。
「みさき先輩、あけましておめでとう。今年もよろしく」
みさきはまたいつものいたずらっぽい笑顔になった。
「どうしたの？　いきなり改まって」
「何となくな、言いたかったんだ」
これからも一緒にいたい。みさきのことをもっと知りたかった。
みさきは姿勢を正し、両手を前に揃えてお辞儀を返してくれた。
「だったら私も、こちらこそよろしくお願いしますね」
「ありがとう」
こうやって受け入れてくれること、側にいること、そして許してくれたことに感謝したかった。
しかし、そんな気持ちに自分で照れてしまう。
「先輩、腹減らないか？　今から学食へ行こう！」
「私はあんまりお腹空いてないよ」
「今日は俺のおごりな」

「私、日替わり定食がいいな」
たちまち相好を崩すあたり、食べ物の威力は大きい。
「それと、カレーライス大盛りで」
「よし、それでこそ先輩だ」
「ちょっと引っかかるけど、でも嬉しいよ」
「じゃ、早速行こうか」
みさきが嬉しそうに食べているところが見たかった。
(ずっとこんな風にみさき先輩と過ごせたらいいのに)
もうすぐ卒業してしまうみさきと、こうしていられるのもあとわずかだ。できるだけ長く、みさきと一緒にいたかった。
二人は元気に階段を降りて行こうとした瞬間、何かが聴こえたような気がした。

『えいえんは、あるよ』
囁くような小さな声は、誰の声だか解らなかった。しかし、それは馴染みの声でもあった。すぐ側で、いつも囁いている少女の声。
浩平の頭に何故か今の白っぽい冬の空ではなく、鮮やかな青空がフラッシュバックする。

それは、夏の空。
いつまでもいつまでも鳴き続ける蟬の音。
痛みを伴う記憶を彩る、無限の青。
浩平は口の中がひどく乾いているような感じがした。
えいえん、と心の中で繰り返す。
(……どうして)
何かがあったはずだ。
そこに、誰かがいたはずだ。
その『えいえん』という言葉にはひどく大切なものが含まれていたはずだった。なのに、その部分に霧がかかったように不明瞭になっている。隣にいるみさきとの間に見えないフィルターが存在しているような気分だった。
「浩平君?」
みさきが不安な表情で振り返る。
「ほら、行こ。お腹空いちゃったよ」
「あ、ああ」
浩平は無理にみさきに笑いかけると、階段を降り始めた。

解っていることはごくわずかだった。何も解らないと言っても間違いではない。しかし、みさきとの幸せな時間が『えいえん』に取って代われること、『えいえん』こそが自分を呼んでいるものなのだということだけが、決定事項のように突き付けられていた。

『この世界は終わらないよ……とっくに終わっているんだから』

少女の声が肌に絡み付くように追ってくるのを、浩平は必死で聴かない振りをしていた。

第5章　閉ざした扉

浩平は周囲がぼんやりと明るくなってきた時の違和感に気付いて、うっすらと瞼を開いた。光の加減が自分の部屋のベッドと妙に違っている。

「……ベッド?」

ベッドではなかった。

浩平の頬の下に敷いていたのは、平べったい机だった。しかも、自室のデスクではなく、何と学校の机だった。

板の部分は浩平の体温ですっかり温まっているが、代わりに他の部分は冷たく冷え切っている。

それに気付いた瞬間、浩平はがばっと顔を起こした。

「嘘だろ?」

応える者は誰もいない。教室に射しているやわらかな陽光は、どう考えても早朝のものだった。浩平は腕時計を見た。

7時52分。

そろそろ日直が現れるだろうか、といった時間だった。

浩平は自分の記憶を辿った。最新の記憶は六時間目、地理の授業だった。途中で眠くなってしまったところまでで記憶はとぎれている。

つまり、それからずっと寝ていたことになる。
その証拠に、ずっと着ていた浩平の制服は少しよれよれになっていた。
(ちょっと待て。誰も起こしてくれなかったのか)
そのまま帰ってしまう生徒達はともかく、よく見回りの先生に見つからなかったものだ、と浩平は空しい感心の仕方をしたものだった。
何となく席を立つ。無人の教室は居心地がよくなかった。
空腹だが家に帰って何かを食べるほどの時間はなさそうだった。学食の給湯機でお茶でもいれて飲もうと外に出た。
購買にも、当然人はいなかった。外からはかすかに運動部の朝練している声が聴こえるが、その分余計に学食が静かに思える。
給湯機のお茶が出るところに湯呑みを置いてスイッチを押した。まだ昨日の茶葉が交換していないままで、わびしくなるような出がらしだった。湯呑みを返却口に戻して、浩平は学食を出た。
(何か、食う物が欲しいよな)
そう思うがさすがに贅沢は言えない。昼になったら学食までいち早く走ることにするしかないだろう。溜息をつきながら学食を出た。

口から白い息を吐きながら、浩平は階段を昇った。
「……あれ？」
階段の上の方からぱたぱたとかすかに足音がする。
どうやら上に向かっているらしい。浩平がお茶を飲んでいる間に誰かが上がっていったのだろう。
その足音がいきなり消えたように感じた。
浩平は何となく好奇心をそそられて足音の主を追った。さすがにこの時間だと暇つぶしの材料はほとんどないのだ。
二階の踊り場まで来ると、上からかすかに足音が聴こえる。音の響きからすると廊下を歩いているらしい。浩平は足を速めた。
三階に辿り着いた時に廊下の向こう側に、ちらりと人影が見えた。図書館に行く為の階段を昇ろうとしているのだろう。ひるがえるスカートと髪の毛が眼に入る。
どうやら女生徒らしい。
浩平はスパートをかけた。
(前にもこんなことあったよな)
たちまち加速して角を曲がると、突然どおん、と何かが当たる。

「ううっ……痛いよ」
浩平の考えは正しかった。前と同じようにみさきが頭を押さえて座り込み、涙ぐんでいる姿があったのだった。
「ひどいよ浩平君」
「ごめん、悪かった。でも、どうして先輩が……」
「ばたばた足音がするから気になって戻って来たんだよ。二回もぶつかるなんてひどいよ。痛かったよ」
「わざとじゃないんだって」
さんざん謝るとやっとすすり泣きが止まり、みさきは頭をさすって立ち上がった。その時には少し微笑みが戻っていた。
「えっと、おはよう。浩平君」
「おはよう、先輩」
みさきは少し赤くなっている額をさすりながら、スカートをはたいた。
「朝の空気って気持ちいいよね」
「そうだな、朝の空気って独特の雰囲気があるよな。そう言えば先輩、図書館に行くところなのか？」

階段の先には図書館くらいしか行く先はない。通学鞄を持って資料室だのに行くというのも変だ。
「うん、ちょっと用事があってね」
「こんな時間でも開いてるのか？」
教室なら日直が鍵を開けてくれるのだが、図書室だとどうなるのだろう。やはり図書委員が鍵を持ってくるのだろうか。浩平は首を傾げた。
みさきはポケットから一度何かを取り出して見せてくれた。
プラスチックのタグが付いた鍵だった。
タグにはマジックで『図書室』と書いてある。
「私ね、図書室の先生に合い鍵をもらってるから。本当は職員室に行くか、お昼になるまで待たないと開かないんだけどね」
「へえ、俺も行っていいか？　朝の図書室なんて初めてだ」
「うん、ありがとう」
みさきは笑ってうなずいた。
「じゃ、行こうか」
二人は階段を昇り始めた。

「先輩、まだ痛いか？」
赤くはれている額を見ると申し訳ない気分になってくる。
「大丈夫だよ。体は丈夫だからね」
「お詫びに今日は俺のことを思う存分こき使ってくれ」
「うん、そのつもりだよ」
みさきは笑いながら応じてくれる。こんな時に痛々しい痕が残ったままなのに、お詫びさえも拒否されるよりずっと気楽だ。
四階に着いて浩平は曲がった。
突き当たりの教室の扉に、見馴れない看板らしいものが出ている。『立ち入り禁止』とそっけない文字で書かれたプラスチック板が、何故か気にかかった。
「そっちじゃないよ。図書室はこっちだよ」
後ろからみさきの声がする。
浩平はみさきの方へ走り寄った。
「やっぱ、行き馴れないところだと迷うもんだな。いかに本に縁がないかばれたみたいで、結構恥ずかしいぞ」

「大丈夫、すぐに憶えるよ」
みさきがスカートから先刻見せてくれたタグの付いた鍵を取り出すと、俺がやるよ、と浩平が鍵を受け取った。
鍵を開けてからみさきに手渡すと、みさきはポケットにしまいながら横開きの扉を開けた。静かな廊下にがらがらと大きな音を響かせる。
閉め切ってあるはずなのに、図書室はひんやりと寒かった。
そして、何故か異様に暗い。
浩平は思わず後ろを振り返って廊下の窓と見較べた。
「この部屋だけやけに暗くないか？」
「カーテンが閉めてあるからだよ」
よく見ると窓には分厚いカーテンが垂れ下がっていた。
「日焼け防止だよ。本は直射日光に弱いからね」
蔵書が日焼けしないように、常にカーテンを閉めてあるのだということも、浩平には新鮮だった。
壁際にあるスイッチを入れると、室内は明るくなった。それだけで気分的に暖かくなったような感じがする。

みさきは白い息を吐きながら図書室の中に入っていった。
「……まだまだ寒いよね」
「先輩が卒業する頃には暖かくなってるって」
わずかな沈黙があった。
「そう、だね」
みさきは早足で奥の本棚の方へ行ってしまう。
目的の本棚の前で、背表紙を指でなぞりながら、みさきは真剣な表情で本を選んでいた。
やがてそのうちの一冊を取り、もう一冊も本棚から出すと大切そうに胸のところに抱えて戻って来た。書いてあるタイトルに見憶えはないが、その二冊が同じ本の上下巻らしいのは解った。
「それだけでいいのか？」
「私、読むの遅いから」
みさきが恥ずかしそうにうつむいた。
図書館の扉にみさきがもう一度鍵をかける。浩平はその後ろ姿を見ていた。
（先輩が卒業したら、こうやって廊下を歩くこともできないんだな）
卒業式まで、あと一月もない。こうしてみさきと話したり、歩いたりできるのもあとわ

ずかだ。
確かにそれきり逢えない訳ではない。同じ市内に住んでいるのだから、どこかで逢って話すことはあるかもしれない。しかし、そういう問題ではないのだ。
今、みさきとこうしていられる時間は、この一瞬は決して戻らない。
そのことを、卒業式という形で駄目押しされる。そういうことだ。
今なら、卒業式で泣く人間の気持ちが少しだけ解るような気がした。
浩平はみさきのさらさらと揺れる髪を見ているのが苦しくなって、何となく後ろを向いてしまった。
『立ち入り禁止』
さっきも見た看板だった。
(何だか、変だ)
まるでその教室への侵入を拒むように、プラスチックの板はかけられている。
入ってはいけない教室。
そう言えば女生徒の怪談で、この学校に開かずの間がある、という噂があるというのを瑞佳から聞いたことがある。ここがそうなのだろうか。
浩平は何となくその看板の方まで歩いて行った。

「浩平君、どうしたの？」
鍵をかけ終わったみさきが背後から問いかけてくる。
浩平はその教室の前からみさきを振り返った。
「先輩、この部屋って何だ？」
みさきは浩平の側まで歩いてくると、隣に立った。
「社会科資料室だよ」
「社会科資料室？　立ち入り禁止にしてたら備品とかどうするんだ」
「ここは、ほとんど使ってないんだよ」
みさきの声が妙に沈んだ感じに聴こえるのは気のせいだろうか。
「昔ね、この中で遊んでた子供が事故に遭ったんだ。だからそれ以来誰も入れないことになってるんだよ」
「事故？」
事故に遭った子供。多分その事故というのが女生徒達の罪のない怪談にまで発展したのだろう。しかし、入室禁止にしなければならない事故というのは、かなり大きいのではないだろうか。
「詳しくは知らないけどね」

みさきは扉から視線をそらした。
「ただの事故が怪談にまでなっちゃうなんて……ありがちな話だよね」
笑ってみせたみさきの表情が、ひどくはかなげなものに見える。
「先輩?」
「もうそろそろ、時間じゃないかな」
腕時計を見ると、8時22分をさしていた。そろそろ戻ってもいい頃だろう。
何となくみさきのことが気にかかったまま、浩平は教室に戻ったのだった。

予感があった。
その予感は、胸からさらさらと砂が流れ出すような不安感を伴って、浩平をさいなんでいた。炎を思わせる夕焼けの緋色が、それを一層激しくさせる。
授業が終わってから、浩平は屋上へ駆け出した。
(みさき先輩……)
約束した訳ではないから、屋上まで行っても逢えるとは限らなかった。
窓から射す夕陽に染まって、赤い人形のように見えるすれ違う生徒達の間を抜けて、階段を昇った。

重い金属扉を力いっぱい開け、浩平は屋上に立った。
明るい炎に灼かれるように赤く、みさきの全身は照らされていた。その幻想的な光景にあまりそぐわない、嬉しそうな笑みを浮かべる。
「浩平君も夕焼けを見に来たの？」
「いや、先輩に逢いに来たんだ」
みさきはわずかにうつむいた。
「そっか」
「でも、綺麗な夕焼けだよ」
みさきはフェンスにもたれかかって、どこまでも続く赤い世界を見上げた。決して見えることのない眼に、夕陽の輝きが映っている。
「何点？」
「75点」
「微妙なところだね」
「俺は辛口だからな」
75点を付けられる夕焼けなどめったにない。
みさきは、神話の星を探す子供のように天を仰いだ。

「今日は、どんな赤かな」
浩平も同じように視線を上にやった。
(赤い、世界……おれ、は……ぼくは)
無限の赤は濃度を変え、明度を変え、どこまでも広がっていた。何かを侵食されるような赤だけが、浩平の視界を埋めた。
浩平はただ、空を見つめていた。

えいえん。
大好きな妹との時間を奪われた子供は、永遠に幸せな時間が続くことを願った。そんなおとぎばなしを浩平は知っていた。
そう、それは本当のことだ。
忘れていたおとぎばなしの主人公は浩平自身だ。
(……俺は)
叶えられていたのだ。
聴き憶えのある少女の声が、浩平の脳裏で再現される。
『えいえんは、あるよ』

思い出したくなかった悲しい記憶が、次々と浩平の頭の中を流れていった。
死んでしまったみさお。けなげな、小さな妹。みさおが重い病気にかかったのは彼女のせいではなかったのに、そのせいで心細く、泣きたくてたまらない時に母は抱き締めてくれなくなった。心弱い母は夫を亡くし、娘まで奪われるということそのものに堪えられなくなってしまったのだ。
初めて浩平がそのことを知ったのは、にこにこと笑う母が家に奇妙な衣装を着た中年女性を連れてきた時だった。
『みさお、治るからね！　ちゃんと神様にお祈りしてもらうからね』
母の熱っぽい口調と、化粧っけのない中年女性の、貼り付けたように見える笑顔が不気味で、浩平は返事をすることができなかった。
今でも浩平は母が得体の知れない神に祈る姿を許すことはできなかった。
そんな祈りなどなくても、頑張ればみさおはきっとよくなると思って、友達とも遊ばずに学校と病院を往復していた。みさおが望めば何でもしてやるつもりだった。
……なのに。
必死で闘病生活を送っていたみさおは、報われることはなかった。
みさおが治ることだけを望んで、頑張ってきた浩平が健康になった妹を迎えてやること

はできなかった。
そして、神に祈った母が戻って来ることもそれきりなかった。
『時がたつというのがこんなことなら、ずっとみさおがいた時間にいたい』
時間など流れなければいい。
その願いは、叶えられていたのだ。
えいえんは、浩平をこの世界から迎えに来ている。
いつしか世界から浩平は剝離し、奪われてゆくのだ。
(先輩)
みさきと共に時を過ごしたいのに、自分自身が世界からめりめりと剝がされてゆく感触を今でも感じる。
わずかずつ、この世界から消えてゆくのだ。
そのことが理解できると、浩平の膝はみっともないほど震えた。
「みさき、先輩……」
「どうしたの？」
涙は出なかったが、声は泣いているようにかすれていた。
「もし、俺が先輩のことを忘れたらどうする……？」

唐突な問いに不思議そうな顔をしながらも、みさきは口を開いた。
「頑張って思い出してもらうよ」
「ところが先輩はその時既に遠くに行ってしまってて、俺に逢えないいんだ」
「電話、も、無理なんだね」
「ああ」
しばらくみさきは考え込んだ。
その表情はお茶目な普段のみさきではなく、大人を感じさせるものだった。その言葉に何か意味が込められていることを察したのだ。
「だったら、その時点では私にできることは何もないよ。その時の私じゃなくて、もっと前、浩平君が私のことを憶えていた時の私が、どれだけ浩平君と思い出を作ったかだと思うよ」
みさきにとって浩平の思い出は、忘れないでくれるほどたくさんあるのだろうか。
浩平の不安をよそに、みさきはにっこりと笑った。
「思い出がいっぱいあったら、きっと浩平君も私のこと思い出してくれるよ。そうすれば連絡も取れるよ」
「……そう、だな」

涙が、みさきの姿を滲ませていた。頬を濡らす涙の部分が、風に吹かれてひどく冷たかった。

「もし、今の話が逆だったら……」

浩平は言葉を切った。

それは言っても無駄なことなのだ。みさきの言葉通り、もう決定はなされた。浩平にできることは何もない。みさきの心にどれだけ浩平の思い出が蓄積されているか、だ。

「どうしたの？」

少し不安そうにみさきが訊いた。

「……何でも、ないんだ。ごめん、先輩」

浩平はそう呟くしかできなかった。

●　●　●

ただ、退屈だっただけじゃないかと思う

お母さんがクラス会で出かけた時、ちょうど面白いテレビもやってなかったし、お父さんも帰ってきてなかった

部屋の窓から見える空にだんだん星の光が増えて来て、とっても綺麗だったし、一度歩いてみたかったのもある

大きなお月様が昇ってきて、明るくなってきたら出かけてしまおう

『高校』は私の王国だったのに、夜の校舎を歩いたことはなかった
玄関に鍵をかけて私が家を抜け出したのは、お母さんが用意した夕ごはんを食べてすぐだった

月明かりは、電気の点いていない廊下を明るく照らしていた
暗がり、って楽しい
何か知らない、きらきらしたものが隠れているみたいで、すごくどきどきする

屋上から、大きな月を眺めよう
雲がにぶく光って、その中を月が動いていくのをじっと見てた
頬をなでていく風が冷たいのが気持ちいい

まだまだ探検したいところはいっぱいある
行ったことのない場所、開けたことのない扉
ほら、そこにもひとつ
私は階段を昇って開けたことのない扉を、音をたてないように開けた

何か、楽しいものがあるといいな
きっとどきどきするね

●●●

帰り道、夕焼けはだんだん闇に沈んでゆく。
浩平は不安定な気分のまま、商店街を歩いていった。
「あれ、浩平。どうしたの？」
よく行くクレープ屋『パタポ屋』の前から瑞佳が声をかけてきた。瑞佳の親友の稲木佐織（いなきさおり）や、他にも浩平がよく知らない女の子達が数人集まって、クレープを食べている。全員が私服で、大きめのバッグを持っていた。

「元気ないね。ひょっとして、お腹が空いてる？」
浩平は力なく笑った。
この焦燥感をどう説明したらいいのだろう。どれだけ言葉を尽くしても、『えいえん』の世界をどれだけ語っても、自分の頭がおかしいと思われるだけだ。
「そう言えば、腹が減ったような気がするな」
「あ、やっぱり。ちゃんと食べないと駄目だよ。じゃあ、わたし行くね。今日は佐織の家でパジャマパーティなんだ」
「そうか。じゃあな」
瑞佳はにっこり笑って手を振った。佐織が一応会釈をしてゆく。
ぞろぞろと浩平が来た方へ抜けてゆく女の子達を見送ってから、浩平は数人並んでいる行列の最後尾に並んだ。
（……何だ？）
瑞佳と一緒に歩く女の子の一人が、何故か不思議そうに浩平の方をちらちらと見ているのだ。しばらく首を傾げて視線を送っていたが、浩平と眼が合うと済まなそうに頭をぺこりと下げた。
奇妙な感じがしたが、そんなことを気にしている間に浩平の順番が回ってくる。

「お客さん、何にしますか？」
「そうだな。じゃあ、クリームチーズソース」
店員は手際よくクリームチーズとフルーツを和えたクレープを浩平に渡す。お金を払って、浩平は食べながら商店街をぶらついた。
沈んだ気分の時でも、おいしいものはおいしかった。
（ま、こういうもんだよな）
ぱりぱりと薄く焼けたクレープと、こってりと甘いクリームチーズで空腹は癒されてゆく。やはり胃にたまるからだろう。
満足しながら、浩平は近くにあったごみ箱へ紙を捨てた。

帰宅した時には由起子はいなかった。
ただいま、と声だけかけて中に入り、自室に戻って電気を点けた。
「……あ、やばい」
ベッドの布団が外に干したままだった。浩平は慌てて窓を開けて布団を取り込んだが、布団はすっかり冷たくなっていた。
座ってみると腰が冷えそうだ。浩平は布団を広げてエアコンを点けた。

しばらく布団を温めている間に、キッチンへ降りてお茶を飲もうと一階へ降りてきた浩平は、先刻暗いままにしてきたリビングやキッチンに電気を点けた。

（そう言えば、ここ最近由起子さんと逢ってないな）

キッチンでやかんをかけて、カップ麺のパッケージをぱりぱりと破ってスープや加薬を麺の上にかけた。

洗い桶には由起子が朝食を食べた時に使ったらしい皿が浸けてあった。スプーンと白く濁った水からすると、どうやらコーンフレークを食べたらしい。

浩平は洗い桶を何となく見ていたが、皿を洗うことにした。

普段は自分が使った皿さえ面倒で洗わないのだが、由起子に対して自分の気配を認めてほしくなったのだ。

消えてしまう、ということが体の奥では解っていても、頭ではそんな馬鹿げたことなど有り得ない、と否定したくなる。他人に言っても同じことを返されるだろうと思うと余計にそう思うのだ。

蛇口からお湯を出して、皿とスプーンを洗う。洗った食器をタオルで拭くと、浩平は食器棚にしまう頃には、やかんから湯気がしゅんしゅんと立ち始めていた。

浩平はお湯を注いでからも、自分の部屋にカップ麺を持って行かずに、キッチンで食べ

時を待っていた。その間に由起子が帰るかもしれない。
そんな期待をしながら待っていた。
（やっぱり、帰らないのか……）
溜息をつくと、箸を取り出してきてカップ麵を食べ始めた。
食べ終わってしまうと何もすることがない。
浩平は仕方なく空になった容器を片付け、箸を洗い桶に突っ込んだ。

テレビを見るのもリビングで見ることにした。
どうしても今日、由起子に逢っておきたかったのだ。
その日の番組は面白いものなどなかったが、浩平は忍耐強くブラウン管を睨み続けていた。

日付が変わっても、由起子は戻らなかった。
どうやら今日は忙しいようだ。多分夜中に車を走らせて戻って来るのだろう。
さすがに授業に差し支えるので、浩平は風呂に入ってパジャマを着ると二階に戻ろうとした。その時ふと思いついてリビングに戻ると、電話の傍に置いてあるメモを引っ張り出して、さらさらと書き付けた。

由起子さんへ

カップめんがもうなくなってるので
買い出ししておいてください

浩平

そこまで書いて浩平は困惑した。
（……何を書いたらいいんだ？）
しばらく首をひねって、やっと文章を作り出す。

かなり間抜けな文章だが、仕事のしすぎで体を壊さないでくれ、などと今更書くのも気恥ずかしいし、特別に用事がある訳でもない。
こんなものだろう。
メモ用紙をキッチンに置くと、浩平は自分の部屋に戻った。

ベッドに入る前、窓から外を見た。
空に月はなく、光の粒をこぼしたような星々が冷たく瞬いていた。浩平の息が白く吐き出される。
(……俺は、本当にいなくなるのか)
いなくなる、というのが頭ではぴんとこない。それでも神経の一番原始的な部分では、それをはっきりと感じ取っていた。
自分がいなくなる、というのはどういう感覚なのか。それはいなくなりつつある、という状態がもっと進行しないと身には染みないのかもしれない。
解らなかった。
それでも、自分の根源から堪えられなくなりそうなほど、寂しくてたまらなかった。
『思い出がいっぱいあったら、きっと浩平君も私のこと思い出してくれるよ』
みさきの言葉が蘇った。
(みさき先輩、俺が……いなくなっても、俺のことを思い出してくれるか……?)
周囲にいる人間の全てから浩平の記憶が消えても、浩平の姿を回想することができなくても、声だけで、思い出だけで、浩平のことを忘れずにいてくれるのだろうか。

もしみさきが浩平のことを忘れてしまったら、どうなるのだろう。
うすら寒い考えに、浩平は考えるのをやめて眠ってしまった。
聴き憶えのある少女の声が、何かを囁く。
それに何と返事をしたかは、浩平は憶えていなかった。

第6章　剝離

陽射しが浩平の顔にかかる。
うっすらと瞼を開けると、いつもよりも明るい陽射しのせいで、浩平はすっきりと目醒めてしまった。
（いい天気だな）
窓を開けると、気持ちのいい陽光が照っている。
昨日は布団が冷たくなってから取り込んだので、やはり干しておきたい。瑞佳が来る前にしっかりと陽に当てておこう。
布団を窓のところから干した。ぱんぱん、と叩くと結構埃が出る。
「……ええっ!?」
あることに気付いて浩平は思わず声をあげた。
太陽が上の方にあるのだ。どう考えても昼だった。念の為に時計を見ると、11時ジャストだった。
（長森、風邪でも引いたのか？）
しかし、昨日逢った瑞佳はとても元気そうだった。大体、具合が悪い時に友達の家に泊まりになど行く訳がない。そこまで考えて、佐織の家から直接学校へ行ったのかもしれないと思い至った。

しかし、それでもおかしいのだ。

世話焼きな瑞佳は、いつもはどこかへ泊まりに行ってもちゃんと浩平の家まで起こしにきてくれる。確か一年生の時に佐織と一緒に起こしに来たことがあったほどだ。

何の連絡も入れないままだということが奇妙だった。

もしかしたら留守電に入っているかもしれないと思い、一階に降りる。

リビングの電話には何もメッセージは入っていなかった。

（そう言えば、由起子さんはどうしたんだ？）

浩平は何となくキッチンに向かう。

洗い桶に浸けてあった浩平の使った箸は洗ってあった。そして、テーブルに置かれたメモは別のものになっている。

浩平へ

今日からちょっと忙しいので、買い出しは自分ですること。

お金は置いておきます。

ゆきこ

（うーん、由起子さん……仕事詰まってるんだな）
いつも通りの書き置きに、浩平はほっとした。

結局学校に行きそびれてしまった浩平は、夕方になってから学校の方まで足を伸ばした。
学校帰りの生徒達と何人かすれ違う。
校門のところまで来ると、ちょうど瑞佳が出てくるところだった。多分部活の帰りなのだろう。他の友達は一緒ではなかった。
「長森、今日はどうしたんだ」
「え？」
瑞佳の顔に一瞬困惑のようなものが走った。
それから数秒後、その困惑を自分に対しても浩平に対しても紛らわそうと、ぎこちない笑みを浮かべた。
「コウヘイ？　わあっ、今日起こしに行くの忘れてたよっ」
「お前なあ。いや、自力で起きなかった俺が悪いんだけど。起きたの昼だったぞ」
「ごめんねっ、浩平」

ひたすら謝る瑞佳に、浩平は苦笑するしかなかった。
「そう言えばさっき、俺のこと変な顔で見てただろ。あれは何だ?」
「わ、わたし……浩平が」
その瞬間、浩平は背筋にうすら寒いものが滑り落ちていったような気がした。
瑞佳の顔から、一切の表情が消え失せていく。眼に映った浩平の姿は認識されていない。まるで、どうでもいい通行人のように認識情報から削除されてゆくようだ。
堪えられなくなって、浩平は声をあげた。
「長森っ!」
「……あっ、こ、浩平?」
瑞佳は我に返って眼を丸くする。浩平は低い声で問い質した。
「さっきからどうしたんだ」
瑞佳は機械的に首を振った。
「何でもないよ。多分、ちょっと疲れてるんじゃないかな」
事実、瑞佳の顔色はよくなかった。しかし、浩平は瑞佳の言葉をそのまま受け取ることはできなかった。
「じゃあ、家まで送ってやるよ。倒れそうだからな」

「ごめんね、浩平」
やっと瑞佳は普段の笑顔に戻ってくれた。
こっそり息をついた浩平は瑞佳と並んで歩き出した。

瑞佳の家の玄関まで送ってから、浩平は念を押さずにはいられなかった。
「長森、明日は来るのか？」
「うん、行くよ。でないと浩平、また寝坊しちゃうもん。目覚まし時計、また止めたんでしょ」
「どうやらそうらしい」
「じゃ、また明日ね」
にっこりと瑞佳は笑うと、手を振って中に入っていった。
ばたん、というドアの音が妙に大きく感じる。
(今日の長森は何だか変だったな)
浩平は考え込みながら歩き出した。

とりあえず商店街で由起子に言われた通り買い出しをしないと、食べるものが家にない

状態だった。
　浩平はスーパーでカップ麺だのカップスープだのを、次々と籠に放り込んでいった。まともに料理をしないので、腐るものを買えないのはいつものことだ。
（あ、甘栗だ）
　何となく食指をそそられた甘栗を籠に放り込んだ時、入口から地学部部長の箕浦が入ってくるのを見た。
「おーい、箕浦！」
　しかし箕浦はちらりと浩平を見てふっと眼をそらすと、そのまま知らん顔でカウンターで何かを買っている。
（何だよ、あいつ）
　浩平は買い物を済ませてから、もう一度箕浦に声をかけようとしたが、その時にはもういなくなっていた。カウンターにはにこやかに愛想を振り撒く受付嬢がいるだけだ。
　違和感。
　浩平は頭の中でよくない考えが浮かびつつあるのを、押し殺そうとしていた。
　こんなはずはない。
　頭の中が霧がかったようにぼんやりとしか働かないのは、何か大切なことを忘れてしま

いたがっているからだ。そんな気がした。
仕方なく浩平は重いビニール袋をぶら提げて、よたよたと家へ向かったのだった。

そして潮が引くようにゆっくりとではあるが、その日はやって来た。

「またかよ……」
ベッドから体を起こし、浩平は頭を抱えた。
どうやら寝坊をしたらしい。時計はもうすぐ12時30分になるところだった。
来るべきものが来た、という感じだった。
あの様子が変だった日の翌日以来、瑞佳は毎日浩平を起こしにやって来てくれていたのだ。その間、浩平は気にするともなく周囲の人間を観察していた。
最初はわずかだった違和感が、徐々に大きくなってゆく。そのことを口に出せないまま3日が過ぎていった。
そして、再び瑞佳は来なくなった。
(そんなはずない)
浩平は乾いた声で笑った。

絶対に有り得なかった。
この街に引っ越して来てからの付き合いである瑞佳の記憶から、自分の存在が消え果てたなどということが、あるはずないのだ。
急いでパジャマを脱いで洋服に着替える。そのまま足早に階段を降りる途中、リビングに出てくる途中の由起子と鉢合わせした。
遅刻のことを叱られると思ったが、浩平は少し困ったように声をかけた。
「由起子さん、今日は休みなのか？」
びくっ、と由起子の体が震えた。
「……あ、あ」
由起子の眼に宿っていたのは脅えだった。
我が家に見知らぬ若い男がいて、さも親しげに話しかけてくる。その男をどう扱ったらよいのか戸惑っているのだ。
ゆるゆると首を振って、由起子はリビングの方へ駆け出した。
「おばさん、どうしたんだ！」
浩平が由起子を追いかけてリビングへ入ると、由起子はソファの背もたれの向こうに立ち、浩平から身を離そうとしていた。

「由起子さん、解らないのか！　俺だよ、折原浩平っ」
「……っ」
「由起子さんの甥だよっ。ずっと一緒に住んでる俺のことを忘れたのか!?」
強張った由起子の顔が、ふっ、とゆるんだ。
「こう、へい？」
「そうだよ。浩平だよ。どうしたんだよ、おばさん」
「解らない。でも……ごめんね、浩平。ちょっと一人にしておいて……私、変だわ」
何とか浩平のことを思い出したらしい由起子は、ソファのかげから出て来て座り込んだ。
由起子の介抱もしてやりたいが、とりあえず今は先にしなければならないことがあった。
「じゃあ俺、学校へ行くから」
「……行ってらっしゃい」
由起子がわずかに微笑んだ。
浩平は手を振ると、そのままリビングを出た。玄関のドアを締めると、浩平は全力疾走で駆け出した。
着いた時にはもう午後の授業が始まって間もない時間だったらしい。校舎はすっかり静

まっていた。
その時になって浩平は初めて、自分が制服を着て来なかったことを思い出した。
(さすがにこの格好で校舎をうろつくのはまずいな)
とりあえず授業中は、下駄箱のところで気配を殺して待っていた。
瑞佳に逢わねばならない。何故瑞佳が今日は起こしに来てくれなかったのか、ちゃんと訊かねばならないのだ。
聞いてしまえば大したことはないのかもしれない。例えば、朝出かける前に階段から落ちて、病院に行ってから直接学校へ向かった。そんな可能性だって考えられる。だとしたら瑞佳は教室にいない浩平のことを気にして、ずっと心配しているかもしれないのだ。『浩平、また寝坊したんだねっ』と頬をふくらませながら。
5時間目終了のチャイムが鳴った。
浩平は勇気を出して、教室に向かって歩き出した。
廊下を歩く私服の浩平に、生徒達の奇異の視線が突き刺さる。それを堪えて自分のクラスまで向かう。
教室から、ちょうど瑞佳が出て来た。
「……長森」

「え？」
瑞佳が顔を上げた。そして、不思議そうに浩平を見返す。
「長森……俺が、解らないのか」
「え、えっと……ごめんなさい。わたし、あんまり物憶えのいい方じゃなくって。すぐに思い出しますから」
困ったように額に手をやって考え込む瑞佳を見て、浩平はやっと認めた。自分があまりに希望的観測に頼っていたことを。
やはり、瑞佳の中から浩平の存在は消え去ってしまったのだ。それでも人の好い瑞佳は一生懸命誰とも知らない男子のことを思い出そうとしている。
浩平は首を振った。
「いや、いいんだ。よく考えたら初対面だった」
「でも、さっきわたしの名前を……」
瑞佳の表情が物悲しく見えるのは、浩平の感傷でしかないのだろう。
「長森瑞佳って言ったら、有名人だからな。それで知り合いみたいな気分になっちまったんだ……悪い。じゃあな」
浩平は後ろを向いて歩き出した。

これ以上、浩平の存在に戸惑う瑞佳を見なければならないのは、あまりに辛かったのだ。
「お前、何をやってる？」
瑞佳と話していた浩平を見て、呼び止めた者があった。
「……あ」
毎日見飽きた顔がそこにあった。担任の渡辺茂雄（わたなべしげお）こと『髭』だった。髭はいぶかしげに浩平を見て言った。
「この学校の生徒か？　とりあえず事情を訊きたいから、一緒に……」
浩平は最後まで訊かずに走り出した。
「あ、待たんかっ！」
ここで捕まっている余裕などない。
それに、どう説明したらいいのだろう。
浩平は必死で人通りのない方向へ逃げて行った。
（やっぱり、忘れられてるんだな……）
浩平は自分の胸からあたたかなものが全て流れ落ちてゆくように感じた。
夕方になっても、浩平はふらふらと廊下を歩いていた。

窓からは真っ赤な夕陽が差し込んでくる。浩平の顔も赤く染められていた。
その頃になると、私服の生徒もそれほど目立たない。部活の間、自分で持ち込んだトレーニングウェアを着る生徒もいないではないからだ。
（もう、帰らなきゃな……）
そう思いながらも何故か学校を立ち去れずにいた。
由起子しか浩平を憶えていないのだとしたら、せめて唯一憶えていてくれる由起子には忘れられたくない。それだけがこの世界への浩平の拠り所なのに、いつまでも未練たらしく学校をうろついているのだ。
「あっ」
ぼうっと夕陽の中で佇んでいた浩平は、突然走り出した。
階段を駆け昇り、屋上の扉を開ける。
そこには、フェンスにもたれて夕陽を眺めるみさきの姿があった。つややかな黒髪が、わずかな風のせいではらはらと揺れている。
「……先輩」
浩平はおずおずと声をかけた。
もしみさきが浩平を忘れていたら、みさきの見えない眼に映る浩平が他人でしかないの

だとしたら、もう世界中の誰も浩平を憶えてなどいまい。
何故か、そんな確信があった。
「みさき……先輩」
しかし、みさきはおずおずと振り返り、こう告げたのだった。
「どこかで……お逢いしましたか？」
何も、なくなってしまったようだった。
全てが崩れ落ちて、日常が消え去ってゆく。その言葉を聞いた時、浩平ははっきりと悟った。夕焼けが見える時間まで学校を離れられなかった理由。
(俺は……みさき先輩が好きだったんだ)
みさきにだけは憶えていてほしかった。
大好きな人だから。
こんな時に自覚させられてしまった自分の気持ちをもて余していた。
「冗談だけどね」
「……え？」
「ごめんね、浩平君」
みさきの顔を見ると、いつもと同じ笑みが浮かんでいた。

「……せんぱい？　どうして」
浩平は自分が何を言っているかも解らないまま、笑顔のみさきを問い質す。
「えっとね、浩平君。前に階段でぶつかった時、私だって解ってたのにずっと黙ってたでしょ？　だからその仕返しだよ。驚いたかな」
いたずらっぽく種明かしをしてくれる。
浩平はみさきと知り合ったばかりの頃を思い出した。額を押さえて座り込んでいた、可愛らしいみさきの様子が思い浮かぶ。
子供っぽい、お茶目な仕返し。
普段なら笑って終わるところだし、みさきもそのつもりでいたのだろう。まさか本当に浩平が誰からも忘れられた状況であるなどと思うはずもない。
みさきは悪くないのだ。
気持ちが高ぶって声が出なかった。何も言えないまま、浩平はみさきの背中に腕を回し、おぼつかなげに抱き締めていた。
「……こ、浩平君、どうしたの……!?」
みさきが狼狽してわずかにもがく。
「や、やめてよ。浩平君、やめてくれないと、悲鳴あげちゃうよ……」

憶えていてくれたのだ。
大好きなみさきだけは自分を憶えていてくれたのだ。
「浩平君、恥ずかしいよぉ……あ」
みさきの抵抗が止まった。
「もしかして、浩平君……泣いてるの？」
浩平の頬から流れる涙は、みさきの首筋にぽたぽたと落ちていた。泣いていることを指摘されても、涙は止まらなかった。
みさきは小声で呟いた。
「ごめんね、浩平君」
「……何で、謝るんだよ」
泣いたことで喉が嗄れているようだった。喉の粘膜が妙に痛かった。
「よくは解らないんだけど、私が悪いんだよね？　だからだよ」
先輩は悪くない、と言おうとした瞬間、みさきの声がたよりなげなものとなった。
「私、浩平君に嫌われたくないよ。どうしたら許してもらえるの……？　浩平君の心を傷付けたこと……」
浩平はわずかに首を振ると、腕の力を強めた。

「……もう少しだけ、もう、少しだけ……このままで」
押し殺した声でそう呟くのが精一杯だった。
みさきはどこまでもやさしかった。
「本当に、少しだけだよ」
みさきはふっと力を抜いた。
浩平はみさきが苦しくないように気を付けながら、伝わってくる体温を感じていた。好きな人が自分のことを憶えていてくれる証として、彼女を抱き締めていられる。
そのことが幸せで、浩平は涙が止まらなかった。

風が冷たくなって、夕陽が沈んでしまってから浩平は腕を離した。
「みさき先輩……ごめんな」
「ううん」
包み込むような笑みを浮かべてくれるみさきが、またフェンスにもたれかかる。
「私、どうしようかと思ったよ。私がふざけたせいで浩平君を傷付けちゃったのならどうしよう、って」
「大丈夫だよ、先輩。本当は……俺、ちょっと落ち込んでて、先輩にまで知らん顔された



時に涙が止まらなくなっちゃってさ。みさき先輩のせいじゃないんだ」
学校の誰も、自分を憶えていないのです。
一緒に住んでいる叔母でさえ、自分のことをうろ覚えなのです。
そんなことを口にすれば冗談としか思えない。それに、みさきに話しても心配させるだけで、現状が好転する訳でもないのだ。
浩平はなるべくやさしい笑みを浮かべた。
「先輩がいてくれて、本当によかったと思う」
「そう言ってくれると嬉しいよ」
みさきが笑い返した。
見えていなくても、笑いの気配は伝わったのだろう。浩平に向かって笑い返したのだ、というのはすぐに解った。
「お腹、空いたね」
みさきは胃のあたりを軽く押さえている。
「うーん、じゃあそろそろ帰ろうか」
いつまでもみさきに寒い思いをさせておく訳にもいかない。ずっと側にいてほしいが、それを望むのはわがままでしかない。それ以前に遅くなってから私服の生徒と一緒にいた

ことを見られてしまっては、後でみさきが説明に困ってしまう。
この学校で浩平はもう『いない生徒』なのだから。
「送ってくよ」
浩平はいつも通り屋上の金属扉を開けてやると、みさきが扉をくぐった。
二人で降りる階段に響く足音が大きく反響する。
「そう言えば雪ちゃんがね、澪ちゃんが劇に出るんだって言ってたよ。私は見られないけど、澪ちゃん、頑張ってるらしいよ」
「劇？」
あの小さくて感情豊かな下級生と劇がどうして関係あるのだろう。
ぴんと来ない浩平に、みさきは説明してくれた。
「雪ちゃんね、演劇部の部長なんだよ。三月に舞台をやるんだけど、澪ちゃんも劇に出るらしいよ」
「へえ、澪は演劇部だったのか。知らなかった。でも、そう言えば深山先輩って、三月にはもう卒業してるんじゃないのか？」
みさきは軽くうなずいた。
「うん、そうだけど劇が終わるまでは雪ちゃんが部長なんだよ。毎年そうなんだって」

「知らなかった」
春に演劇部の公演がある、というのは一年の時に聞いたことがあるが、演劇にさほど興味のない浩平は見に行かずじまいだった。しかし、毎年評判はいいらしい。
しかし今年は、見に行ける状態かどうか非常に怪しかった。
「浩平君は見に来るの？」
「どうかな。休みに早起きするのがしんどいような気がしなくはないけど」
「そうだよね」
そんなことを喋っている間にみさきの家の玄関まで辿り着いた。
「浩平君、元気が出たみたいだね。ほっとしたよ」
「そうだな」
「じゃあ、またね」
みさきが手を振って家に入ってゆくのを見送ってから浩平は歩き出した。
道を歩いていても、誰も話しかけてはこない。世界中に浩平を知っている人間はみさきと由起子の二人だけなのだ。
（……由起子さんは、いつまで憶えていてくれるんだろうな）
今日の様子からすると、由起子の記憶から自分が消えるのはそれほど遠くないはずだっ

た。由起子の顔に浮かんだ見知らぬ者に対する脅えが頭に浮かぶ。それでも、今憶えていてくれること自体が嬉しかった。

家に着くと、由起子の車は駐車場にはなかった。

浩平はしばらく空っぽの駐車場を見つめていたが、鍵を開けて家に入った。誰もいない部屋に電気を灯しながらリビングまで来る。

　　浩平へ

会社の急用ができたので、今から出社します。

多分今日は帰れません。夕食は適当に済ませて下さい。

　　　　　　　　　　ゆきこ

いつもはそれほど頻繁に置き手紙をしてゆく由起子ではない。浩平の記憶が曖昧になったことに対する罪悪感があるのかもしれない。

そんなことを思いながらも、浩平はここにもまだ自分を忘れていない人がいることが嬉

しくてたまらなかった。
山のように買ってあるカップ麺を食品棚から取り出して、お湯を注いで二階へ持ってゆく。こんな気分の時にリビングで一人食事をする気力は涌かなかった。

オムレツのような月が空に浮かんでいる。
(みさき先輩、そろそろ寝てるかな)
眠る前、みさきのことを考えた。
明日からはまともに学校に行くことはできないだろう。苦手な早起きをする必要がなくなってしまった訳だが、そのことはちっとも嬉しくなかった。
毎日でもみさきに逢いに行きたい。
大好きな人の記憶から、自分の姿が消えていないことを知りたい。
そんなことを考えながら浩平は眠りについた。

●　●　●

どうなってるのか、私にはよく解らなかった

でも、何だか眼のあたりがすごく熱い
どうしてなんだろう

私が最後に聞いたのは、誰かの足音
よくお菓子をくれる、やさしい先生の叫び声だった

第 7 章　花の匂い

浩平の日課はあの日以来変わってしまった。

昼近くに悠々起きては、洗濯をしたり、布団を干したりする。世話焼きの瑞佳が来なくなってからは、当然全部自分でしなければならない。

それも馴れてしまうと大したことはない。

布団は出かける前に取り込んでおけばいいいし、洗濯物はまとめて洗濯機に放り込んで、後で乾燥機にかければ終わりだ。

自分の生活臭というのを、ある程度は始末していかないと、消えてしまった後で由起子が怪しい汚れ物を見て脅えるだろうと思うと、毎日しっかりと洗濯はしなければならなかった。

代わりに他のノルマは何一つなくなった。期末テストの為に勉強する必要もないのだ。

気楽と言えばこれほど気楽な状態もないだろう。

世界から切り離されつつある、という状態は、浩平にとってひどく宙ぶらりんで不安な感じだった。

（そろそろ時間だな）

浩平は上にスタジャンを羽織って、そのまま一階に降りて行った。

放課後になると、浩平は学校の校門で待っている。それが平日の予定だった。

校門のところにいる私服の浩平に、生徒達のごく少数は不思議そうな眼を向けるが、やがて何も映らなかったかのように、そのまま眼をそらしてしまう。

出てくる生徒達の中に、黒髪を揺らしながら歩いてくる少女の姿があった。

「よお、先輩」

浩平はみさきの側に近付いて声をかけた。

「こんにちは、浩平君。最近、よくここで逢うね」

「そうだな。たまたま帰る時間が一緒なんじゃないか？」

実際には浩平は授業に出ていないのだから、学校帰りも何もあったものではないのだが、みさきにそれが解るはずもない。

雪見が一緒だった場合はさすがに説明に困るだろうが、受験だけでなく演劇部の公演で忙しい雪見は、もっとずっと遅く帰るらしく、一度もかち合ったことはなかった。

「一緒に帰ろうか」

「送ってってくれるんだね」

みさきが嬉しそうに笑った。

校門の位置からみさきの家まで、だいたい50メートル。たったそれだけの距離を、ゆっ

くりと歩き、時折立ち止まって喋り、ひどく時間をかけて進むのだ。
浩平はほんの数分の大切な人との時間の大切さを、一秒一秒噛み締めるように過ごした。
歩いている途中、みさきの掌が当たった。
(手を、つなぎたいな)
まるで子供のような気持ちに自分でも照れてしまう。それでも、勇気を出してみさきの手を握ってみた。
「わあっ」
突然みさきが大声を出した。あまりに大きすぎる反応に、浩平は慌ててしまう。
「ど、どうした」
「今、誰かに手を掴まれたんだよ」
緊張するみさきに、浩平は自分のミスを悟った。
困ったように息を吐く。
「……掴んだんじゃなくて、つないだつもりだったんだけど」
みさきはきょとんとした顔をしていたが、すぐに納得した。
「浩平君だったの？」
「……ああ」

問い質されてみると、自分のしたことがとても間抜けに見える。
「どうして急に?」
どことなく戸惑ったみさきの声のせいで、尚更恥ずかしくなってきた。浩平はみさきに見えないと解っていても、つい赤面した顔をそらしてしまう。
「いや、何となくな。嫌ならいいけど」
「いいよいいよ。つないで帰ろうね」
みさきはにこっと笑うと、荷物を持っていない左手を差し出した。その掌をみさきが驚かないように、最初はそっとつないた。
すべすべとした掌は案外ひんやりとしていた。
その後でしっかりと握る。
みさきも恥ずかしそうにうつむきながらも、笑顔を絶やさず歩いてくれた。
「今日は浩平君、無口だね。せっかく一緒に帰ってるのに、もっとお話しようよ」
確かに学校の前を無言で手をつないで歩く二人、というのも、相当恥ずかしい光景ではあった。
しかしこうしていると、どうしてもみさきのことを意識してしまう。
「うーん、そ、そうだな。先輩はつきあってる奴とかいないのか?」

「いきなりな質問だね」
みさきは少し呆れた顔になった。浩平は慌てて付け加える。
「いや、気を悪くしたなら謝るよ」
「謝らなくてもいいよ。ただ、驚いただけだから」
「やっぱりぶしつけだったかな」
みさきは浩平の方を向いた。みさきの大きな眼に浩平の姿が映っていた。みさきに見えることのない小さな浩平の顔が、恥ずかしげに見返している。
「でも、訊きたかったんだよね？　つきあってる人はいないよ」
「先輩だったらずいぶんもてると思うんだけどな」
みさきは純和風の美少女だし、性格も可愛らしい。もちろん大食漢であるところが男子の失望を買うかもしれないが、食べる姿も楽しげなのだから、多少の男は逃げてもある程度はもてないはずはないだろうと踏んでいたのだ。
「そんなことないよ」
みさきが首を振ると、さらさらと黒髪が揺れた。
「でも、告白くらいはされたことあるだろ？」
「うーん、そうだね」

「だったら」
浩平は最後まで言うことはできなかった。
みさきがきっぱりとした声で言葉を続けたからだ。
「でも、私は絶対に断わるよ……そんなの、残酷だからね」
「……え」
みさきが真面目な表情で続けた。
「私とつきあうってことは、私の背負うハンデをその人にも押し付けるってことだから。一緒にいる時間が長ければ、その人に迷惑をかけると思う」
「そんなことないって」
自分ならみさきのハンデを共に背負えと言われたら、必ず背負ってみせる。
そう言おうとした瞬間、みさきが浩平の方をまっすぐ向いた。
「浩平君、世の中の人は浩平君が思ってるほどいい人ばかりじゃないんだよ」
その眼がひどく悲しそうだったせいで、浩平は言おうとしていた言葉を口にすることができなかった。
多分、みさきのハンデを共に背負いたいと言った男もいるのだろう。
その結果、愛情が冷めたという理由でなく、去って行ったのだとしたら。

例えば、家族の反対。ハンデを持つガールフレンドができたことを、一方的に反対する親もいるかもしれない。

そういう親はどうするだろう。

例えば、いきなり家まで訪ねてきてこう言ったかもしれない。『うちの息子とこれ以上つきあわないで下さい』と。その後で障害のあるみさきに対して偏見はないのだとくどくど言い訳したとしても、していることの酷さは同じだ。

そして、好ましいと思っていた少年の会話がぎこちなくなり、やがて、彼は話しかけなくなってしまう。

「苦しい思いをするのは、私だけで充分だよ。だから、私は自分の好きな人を束縛するようなことはしたくない……絶対」

これが、浩平に対しての拒否であることだけは解った。

やさしい言葉で、浩平の思いを退けようとする。

(先輩、俺は……そんな奴らと違う)

声を大にして言っても、今の浩平にはどう違うのか説明できなかった。

みさきが好きだ。

その気持ちは揺らがない。

しかし、それを伝える言葉を浩平は持っていなかった。
「そう言えば、あと一週間だね」
突然みさきが明るい口調で話題を変える。
「卒業式か？」
「うん、早いよね」
こうしてみさきと一緒に帰ることができるのも、あと一週間だ。
「今まで卒業式って言ってもぴんとこなかったけど、今年は違うな……」
浩平は溜息をついた。
「浩平君は卒業式に出席するの？」
「できれば出席したいと思ってる」
せめてみさきが卒業するところを見送りたかった。
みさきが嬉しそうに応じる。
「確か、在校生代表で何人か出席できるよね」
「だったら絶対に出席する。先輩の……門出だからな」
それまで何が何でもこの世界にいなければならない。
みさきが卒業証書を受け取って、おめでとうと言う時までは。

「……門出、か」
みさきは何故か寂しそうに視線を落とした。
「どうした？」
「浩平君、絶対に来てね」
ひどく真剣な表情でみさきは訴えた。
「ああ、絶対行く」
「……来なかったら、凄く怒るよ」
「解った」
そう言うと、みさきは笑顔になった。
帰宅する生徒が、後から後から追い越してゆく。ひどくゆっくりと歩いていたのに、川名家はもうすぐそこになっていた。
浩平は玄関の側でみさきの手を離した。
「送ってくれてありがとう。約束、忘れないでね」
「ああ」
「ばいばい、浩平君」
みさきはドアを開けて家の中に入った。

『約束、忘れないでね』
みさきの言葉が頭の中で繰り返される。
忘れるはずがない。これから卒業式まで、みさきの為にこの世界にしがみ付いてでも列席するつもりだ。
この時、浩平の心は『できるだけ長くみさきの側にいたい』から、『必ず卒業式まではみさきの側にいなければならない』に変化したのだった。

卒業式を二日後に控えた浩平は、たまにはカップ麺以外のものが食べたくなって商店街までハンバーガーを食べに行った。
どうも麺類ばかりすすっていると、体力がなくなるような気がするのは気のせいだろうか。たまに食べる肉類は異様に滋養豊かなものに感じる。
自炊しないので、しばらく肉っけとは無縁の生活をしていたのだ。
「繭(まゆ)、こっちのパンプキンパイもおいしいよ。一口食べて」
「みゅー」
中学生くらいの女の子が二人、おいしそうにハンバーガーを食べているのを見て、浩平は妙に感慨深い気分になった。

（……友達とハンバーガーを食う、なんてのも、しばらくしてないな）
ほんの一ヶ月くらいで、まるで仙人にでもなったようだ。
浩平はハンバーガーの残りを手早く押し込むと、そのままトレイを持ってごみ箱の方へ向かった。

帰り道、夕陽に照らされながら家への道を歩く。
最近夕方になると、あの消えてゆきそうな感覚が襲ってくるようになっていた。自分が世界から切り離されて、そのまま折原浩平という人間の存在はなかったことにされてしまう。その感覚に身をゆだねれば、すぐにでもえいえんはやって来そうだ。
（消える訳には……いかない）
浩平はぎりぎりと唇を噛み締め、その感覚と戦っていた。
やがて、地面を踏み締めている感触を認められるくらいになってきた。浩平は息をつくとゆっくり歩き出した。
家の側まで来た時、ちょうど後ろから車が追いぬいていった。
（由起子さん、今日は早かったんだな）
浩平は足を速めて家まで近付いた。

ガレージから由起子の車のドアが開けられた音が届く。数秒後ドアが閉まり、由起子が歩いてきた。
「……あ」
「何かしら？」
由起子が不思議そうに微笑みかける。
とうとう由起子は浩平を忘れてしまったのだ。
浩平はどう言おうか迷ったが、軽く頭を下げた。
「すみません……えっと、逆光のせいで学校の先生と間違えたんです。ごめんなさい」
「そう、それじゃ」
由起子は一度うなずくと、そのまま家の中に入っていった。
(これで、由起子さんにも忘れられちまったな)
浩平は昨日まで自分が寝泊まりしていた家を素通りした。もうここは、小坂由起子一人の家であって、浩平の居場所はなくなったのだ。
予想していたとは言え、今まで家族として暮らしてきた由起子が、自分を忘れてしまったことはショックだった。
浩平はすぐ側の角を曲がって、商店街の方へ逆戻りした。

夜までは公園のベンチに座って休んだり、ゲームセンターで暇をつぶしたりするしかないだろう。その後はさすがに野宿ができるほど暖かくはないし、コンビニをはしごして朝まで過ごし、由起子が出勤するのを見計らって家に帰って休むしかない。

浩平は溜息をついた。

翌朝、由起子の車はいつものように七時にはガレージを出て行った。

物陰からそれを窺っていた浩平は、素早く玄関まで駆け寄ると鍵を開けた。さすがに一晩中立ちっぱなしでコンビニの雑誌を立ち読みしたりしていたのだから、すっかり脚が疲れきっていた。

とりあえず筋肉をほぐす為に風呂に入ろう。

浩平は風呂場で蛇口をひねり、湯船にお湯を張った。15分程度で入れるようになるだろうか。一応タイマーをセットする。

その間に着替えを取ってきて、暇な数分をお茶を飲んで待っていた。タイマーが鳴ると、浩平は風呂まで移動する。

歩き続けた後に湯に浸かると、やはり気持ちがいい。これから好きな時に風呂に入れるかは非常に怪しいので、今のうちに家風呂を堪能しておくことにした。

いつもよりはゆっくり風呂に浸かって、浩平は風呂から出た。
風呂上がりに朝食のラーメンを食べていると、電話のベルが鳴った。
(みさき先輩だな)
三年生が学校に来なくなってから、みさきは毎日浩平に電話をくれるようになった。
大したことを話す訳ではない。何ということのない世間話を15分くらいする。それがここ数日の浩平にとって一番大切な時間だった。
「はい、折原です」
『えっと、川名です。明日のことで電話したんだけど』
明日は卒業式だった。ずっと消えようとする自分を押しとどめ、その為だけに世界にしがみついているのだ。
しかし昨日までと違い、今日の電話は公衆電話からかけているようだ。
「明日だよな、卒業式」
『で、浩平君は今日は学校に来ないの？』
浩平は眼を丸くした。卒業式の前日、設営などの為に在校生は休みだったはずだ。
「……え？」
『卒業式に出席する人は、明日の準備があるから学校あるよ』

「知らなかった」
ここ数日学校には行っていないのだから、知っているはずもない。みさきはそれを知らせる為に学校からかけてくれたのだろう。
浩平の困惑をよそに、みさきは続けた。
『やっぱりだね。私も多分知らないと思って電話したんだよ』
「ありがとう。今から行けばいいのか？」
『うん、もうすぐ始まるから急いでね』
「サンキュ」
浩平は電話を切った。
ラーメンのカップを片付け、箸を洗うと急いで二階に上がった。せっかく着替えたが、もう一度制服に着替え直さなければならない。浩平は慌ただしく学習机の椅子にかけてあった制服に袖を通した。
学校へ行く道すがら、浩平は考えた。
もちろん、浩平には在校生代表の仕事などあるはずもない。行ってもすることはなく、体育館に入ることもできないのだ。
それでも、久しぶりにみさきと逢いたかった。

卒業式まで見ることはできないと思っていた、みさきの顔が見られることがとても嬉しかったのだ。

風の中に花の匂いを感じる。

(もう、春なんだな)

どこからか漂ってくるほのかな匂い。梅のようにはっきりとした芳香がある訳でなく、まして沈丁花のくらくらするような甘い匂いではなかった。

桜だ。

中崎町にある市民公園には、一番メジャーなソメイヨシノは植えられていない。三月に入るとハツミヨザクラという少し小さな桜が満開になるのだった。

風に乗って香りが届いたのだろうか。

高校の敷地には桜は植わっていないから、桜の樹々の下を卒業式にくぐる、というような光景はないのだが、桜が咲く頃の卒業式、と思うと、どことなくしんみりする。

卒業証書を手にして、満開の桜並木の下を歩くみさきが思い浮かんだ。

黒髪に降る桜の花びらは着物の柄のようで、和風の顔立ちをしたみさきにはよく似合うだろう。

腕時計を見ると、そろそろ時間が迫っていた。
浩平は足を速めて学校へ向かったのだった。

青い空に、細い飛行機雲のラインが一直線に引かれていた。
（あったかくなったよな……）
浩平のすることなど何も用意されていない準備に、参加することはできなかった。仕方なく屋上に寝そべって、雲が形を変えるのをずっと見ていたのだ。
ほんの二週間前には、こんな風にひなたぼっこができる暖かさではなかったのに、季節はゆっくりと、ゆっくりと春に近付いてくる。
「……明日も、晴れるといいな」
みさきの門出なのだから、卒業式は青空の下であってほしい。
例えみさきに空の青を見ることができなくても、その風の温もり、花の匂い、鳥のさえずりは感じられるはずなのだから。
「さぼってる生徒発見」
扉の方から声が聴こえた。
「よお、先輩」

浩平は視線を頭の上の方へやった。
上下逆のみさきがコンクリートの床から生えている。
「こんにちは、浩平君」
「別にさぼってる訳じゃないぞ。単なるイメージトレーニングだ」
みさきがくすくすと笑いながら、浩平の側に近付いてくる。スカートが揺れた拍子に白い下着が一瞬見えてしまう。
「……先輩、見えてるぞ」
「えっ!?」
みさきは赤面してスカートの裾を押さえる。
浩平は素早く起き上がった。スカートの中の光景に多少未練がないでもないが、これ以上みさきを困惑させる訳にもいかない。
「ひどいよぉ」
「見たんじゃなくて見えたんだよ。不可抗力だって。それに、ちょっとしか見えてないし」
「それでも嫌だよっ」
もっともな意見だった。
「ごめん」

浩平に過失があるかどうかはともかく、一応謝った。みさきもそれ以上追及はせず、にこやかに顔を空の方に向けた。みさきの頬をそよ風が撫でてゆく。

「先輩、卒業するんだな」

「おかげさまでね」

「寂しくなるな。そうだ、もう一年勉学に勤しんでみないか？　俺と机を並べてさ」

そうしたいという個人的な気持ちはともかく、一応冗談のつもりだった。

しかし、みさきはいつものように笑ってはくれず、沈んだ声で呟いた。

「そう、しようかな」

ただ風の音が響くばかりの静寂に堪えられず、浩平はややわざとらしいが明るい声で切り出した。

「そうだ。卒業式の日、二人でどっかうまい物でも食べに行こうか？　卒業祝いに好きなだけおごるからさ」

みさきの食べる量を考えると相当痛い出費だが、お祝いだと思えばきつくはないだろう。

「それなら学食がいいな」

「学食かぁ」

確かに安いしそこそこおいしいのだが、それではあまりにもお祝いという感じがしなか

った。浩平は少し沈んだ声になった。
「せっかくだから商店街にでも行かないか？　お祝いなんだからもっと高いもの食べてもいいんだしさ」
みさきは眼を伏せた。
しばらく何事かを考え込んでいる表情が、どことなく暗かった。
「みさき先輩？」
浩平はためらいがちにみさきの名を呼んだ。
「……うん」
「何だか、今日は先輩らしくないな」
「そんなこと……」
みさきは抗弁をそこで途切れさせ、フェンスにもたれかかって呟いた。
「今日は、いいお天気なんだよね？」
「あ、ああ」
「明日もあさってもいい天気……きっと、楽しいんだよね」
みさきが何を言いたいのか、浩平にはまだ解らなかった。
抑揚のない声で、みさきは続けた。

「たくさんの人の喧燥に囲まれて、あちこちで楽しそうな笑い声が聴こえて、賑やかな客引きや実演販売の声……好きなものを食べて、好きな服を着て、暖かな陽射しと、桜の香りを感じながら、好きな人と一緒に歩く。きっと、楽しいんだよね」
「だったら行こう。好きな人は用意できないかもしれないけど、それ以外なら俺が何とかするよ、だから……！」
「ごめんね」
みさきは悲しそうに遮った。
「……どうして」
「怖いから」
消えてしまいそうな声で告げられた言葉はひどく重かった。
「どうしようもなく……怖いんだよ。外の世界が、この学校以外の場所が」
「でも、先輩いつも……」
学校の中のみさきは、あんなに明るくいろんな場所を駆け回っていたではないか。盲目であることを感じさせないほど、みさきは自然に振る舞っていた。
「いつもは、この学校の中にいるからね……この学校は、私が唯一光を取り戻せる場所だったんだ」

浩平は息を呑んだ。

みさきの見たくなかったものが言葉で告げられる。

「私ね、家が近いせいもあって、物心ついた頃からこの学校を遊び場にしてたんだよ。小学校が終わると、次は高校。毎日毎日、勝手に忍び込んで校舎の中を走り回ってた。最初はもちろん先生に見つかって、外に連れ出されたりもしたんだけどね、そのうち先生も何も言わなくなったよ」

悲しいことが語られようとしている。それは浩平にも解った。

しかし、みさきの顔には無邪気な笑顔が浮かんでいた。過去の幸せな時を思い起こしているせいだろう。

「生徒の人もね、よく一緒に遊んでくれた。昼休みに学食に連れてってもらったりもした。だから、私も大きくなったら絶対にこの学校に通うんだって、そう思ってた。そして、小学校六年の時」

突然、みさきは浩平の方を向いた。

「私は、眼が見えなくなった。その時から、私の中の風景は時間を止めたんだよ。私は私の知っている場所でだけ、真っ黒なスクリーンに鮮やかな景色を映すことができる。ずっと大好きだった、この学校の中でだけ、ね」

浩平はみさきの眼に涙が滲んでいるのを見た。
たったひとつの、眼が見えないことを忘れていられる場所から、明日みさきは卒業して
ゆかなければならない。そして知らない場所で、何も見えない暗闇の中で、盲目という事
実と向き合わねばならないのだ。
みさきが前に言っていた社会科資料室の事故の話を思い出した。
あれは多分みさき自身のことだ。
みさきは、手の甲で涙を拭って笑顔を作り、きっぱりとした口調で告げた。
「卒業式、必ず来てね。多分浩平君に見送ってもらえたら、笑顔で卒業することができる
と思うんだ」
「約束するよ」
「寝坊なんかしたらほんとに怒るからね」
いたずらっぽくみさきが釘を刺した。
「ああ、絶対にみさき先輩の卒業を見届けるよ」
消えてゆく浩平がみさきの為にたったひとつできること。大好きな人の門出を見送って、
『さようなら、先輩』と告げてあげることだけなのだ。
これから本当に『見えない世界』と対峙しなければならないみさきが、この居心地のい

い小さな楽園と別れを告げる時を、ちゃんと見守ってあげたい。
浩平は黙って決意を固めたのだった。

その日は、昨日よりもずっと澄んだ青空が美しい卒業式日和だった。
ほとんど雲さえない快晴だ。こういう日を卒業式日和というのだろうか。
目覚まし時計が鳴り出す前から浩平は起きていて、駄目押しのように鳴る時計をきっちり止めた。
（今日なんだ）
浩平は自分がひどく緊張しているのを感じた。
消えてゆこうとする感覚は頻繁に浩平を襲うようになっていた。一日に数回、薄れてゆこうとする自分の気配と戦い、己を取り戻す苦しみを味わうことになった。
それも、この日の為だ。
浩平は久しぶりに制服を着込んで、鏡を見ながらネクタイを整えると、余裕を持っていい絵を出ることにした。
学校に近付くと、卒業式に参列する家族らしいフォーマルウェアの人達や、いつもよりどことなく張り詰めた雰囲気の生徒達がちらほら歩いている。

やがて、紙で作られた花が飾られた卒業式の看板が見えてくる。それだけで、校門もいつもとは全然違うように見えてしまう。

まだ受付に向かっていない親族達が、卒業する生徒の今後について世間話をしているのが耳に入った。自分の息子がどこかの大学に入る為に、マンションを借りてやったただの、自分の娘はどこの推薦に通っただの、必死で頑張ってきた受験生の苦労など全く感じないような口調で喋っている。

それに混ざって制服の生徒達も何人かいた。

卒業生はあらかじめ入場しているのだろう。クラスの学級委員が混ざっていたので在校生代表で出席する生徒達だと見当がついた。

彼らの席は決まった数しか用意されていないから、そこに紛れて入場してしまうことはできないだろう。とすると、一般入場で入るしかない。

先生が在校生達を呼びに来て、ぞろぞろと引き連れてゆく。浩平が受け持ってもらったことのない、一年生担当の教師だった。

浩平はしばらく親族がうろついているのを樹の陰で見ながら考えた。

(兄弟が卒業するって言えば入れるよな)

実際に、他の生徒達と一緒に行かず、親らしき中年夫人と喋っている在校生が二、三人

まだ残っていた。
やがて、さっき在校生を連れて行った先生が戻って来る。
「ご父兄、ご親族の皆様、あちらでお手続きの上、こちらの指示に従って体育館にご入場下さい。ご不明の点がございましたら受付におります教師にお訊ね下さい」
浩平は素知らぬを顔して歩き出した親族に混ざった。
体育館に道なりに行く途中、中庭にテーブルが出してあった。毛筆で『受付』と書かれた紙が、べったりと垂れ幕のように貼ってある。
先に着いた父兄が、受付の芳名帳にペンで書き付けている姿が見えた。
「……まずい」
その父兄の前に座っていろいろ説明している教師は、浩平にもお馴染みの担任、髭だったのだ。ここからは聴こえないが、ぽりぽりと頭をかきながら何か喋っているらしい。
父兄の方を向いているので、幸運なことに浩平の方には気付いていなかった。
この行列の中で制服姿の生徒は全部で三人。ごまかして入場するには学生の数が少なすぎる。
普段は他人の顔を憶えないので有名な髭だが、この前浩平は勝手に校内に入って来た不審人物だと思われている。怪しまれている時にどう思われるかを実地で試してみる余裕は

全くなかった。
何が何でも卒業式に出なければならないのだ。
こんなところで捕まっている場合ではない。
浩平はさりげなく行列からずれて行き、目立たなくなったところで校舎の方へ足早に向かった。
渡り廊下の方から回り込んで、卒業生が入った入口へ走り出した。
(頼む！　開いててくれっ)
開いていさえすれば『トイレに行ってました』とでも嘘をついて入ってしまえばいいのだ。その後で父兄の席についてしまえば何も問題はなかった。
しかし、既に卒業生の入った扉は閉められて、内側から鍵がかけられていた。
思わず拳を振りかぶって鉄の扉に殴りかかりそうになってしまい、ぎりぎりで手を止めた。ここで騒ぎを起こしたらどうしようもない。
他の出入り口を全部回ってみたが、全て閉められていた。
苛立って腕時計を見ると、卒業式の開始まであと三分しかなかった。一般入場はとっくの昔に終わっている。
(もしかしたら、髭がいなくなってるかもしれない！)

わずかな望みにかけて、浩平は受付のテーブルの方へ全力疾走した。
そこにいたのは、髭と別の先生だった。ふたりは何事か打ち合わせをしているようだった。浩平は、髭がその先生と交代して去ってくれることを祈った。
しかし、ぺこりと会釈して去って行ったのはその先生の方だった。
髭はのんきそうな顔で空を見上げ、退屈そうにあくびをしていたが、ずっとそこを動く様子はなかったのだった。
遠くで、金属扉が閉められた音が響いた。

浩平はどうすることもできず、ただ、屋上に寝そべって、体育館から漏れる『蛍の光』や『仰げば尊し』が、響いてくるのを聴いていた。
(俺は……先輩との約束を守ることができなかった)
みさきも『仰げば尊し』を合唱しているのだろう。
浩平は彼女の門出を見届けることはできず、こんな場所でこっそり歌を聴くだけだ。
(消えても、いいか)
みさきの一番大切な卒業を祝ってやれなかった浩平は、この世にしがみついている意味をなくしつつあった。

そのまま青い空に吸い込まれてゆきそうな感覚はだんだん強くなってゆく。遠すぎて言葉の意味は解らないが、あの少女が呼んでいるような気がした。

（……俺は）

浩平はうとうととまどろみ始めた。

「夕焼け、綺麗？」

金属扉を開けて、みさきが入って来るのに気が付いて、浩平は目醒めた。空はいつの間にか澄んだ青から鮮やかな赤に変わっている。

「ああ、綺麗だぞ。そうだ、先輩……」

浩平は体を起こしてみさきの方を向いた。

「卒業おめでとう」

「ありがとう。浩平君、ちゃんと約束を守ってくれたんだね」

みさきは晴れやかな笑顔を向けてくれた。

浩平は低い声で、約束だからな、と付け加えた。

「ほら、見て」

みさきが手に持っている円筒形の黒い卒業証書入れを見せてくれた。中央にはピンクの

リボンが巻いてあった。
「ちゃんと卒業証書もらってきたんだよ」
「先輩だったら卒業証書より紅白饅頭の方が嬉しいんじゃないか？」
「もちろん貰ってきたよ。ほら、浩平君の分も」
よく見ると何故かみさきは紅白饅頭を二箱持って来ている。そのうちの一箱を浩平に手渡してくれた。
「俺の分はどこから調達してきたんだ？」
「お饅頭は好きじゃない子もいるからね。貰ってきたんだよ」
確かに紅白饅頭と言えば、大きすぎて食べきれない人もいるだろう。それに、あんこ関係は食べ飽きてしまうと、大量に処理するのは難しい。
しかし浩平は甘党なので、紅白二個の饅頭くらい何でもなかった。
「あ、ありがとう」
「後で食べようね」
みさきはやはり紅白饅頭を楽しみにしていたのだろう。とても嬉しそうだった。
「でも、ほんとにあっという間だったよ」
「卒業式が？」

みさきは首を振った。
「ううん、この三年間のこと。中学時代の三年間は本当に長かったけど、高校の三年間はすぐだった……これで最後だと思うと、今まで当然のようにあったものが、全部かけがえのないものに思えるんだ」
「そうか」
みさきはうっすらと瞼を細める。
「浩平君も絶対にそう思うよ。あと一年したらね」
一年後を待たなくても、浩平にはみさきの言いたいことは、悲しくなるほど身に染みていた。かけがえのない世界。当然のように思っていた周囲の人達との関係。その全てがみさきを除いて消え果ててゆこうとしているのだ。
浩平は、ねじ切られるような心の痛みをみさきに悟られないように、大きくうなずいてみせた。
「私、これから学校の中を歩いてみようと思うんだよ」
「今からか？」
太陽の赤は既に固まりかけた血のように濃い色になり、沈んでゆくところだった。
そろそろみさきは帰らなければならない時間ではないかと思ったが、できるだけ長く一

緒にいたかったので、浩平はそ知らぬ顔でうなずいた。
「それなら俺もつきあうぞ。弁当ももらったことだしな」
浩平は紅白饅頭の箱を持ち上げてみせる。饅頭が滑って箱に当たる音がした。
「ほら、行こうぜ」
浩平はみさきに先立って歩き出し、扉を開いた。
今にも太陽が沈もうとしているのとは反対側から、丸い月がぼんやりと昇ってくるところだった。

第8章　月の下で

廊下に射す赤い光はいつもよりねっとりと濃く、その中を二人分のひょろりとした影が泳いでいるようだった。
「子供の時もね、廊下を走り回って怒られたんだよ」
「先輩、昔から同じことをしてたんだな」
「そうかもしれない……あっ！」
みさきが突然軽い声をたてて、廊下の壁沿いに座り込んだ。
「どうした？」
「ここにね、私の落書きがあるんだよ」
「昔のか？」
みさきはにっこりと笑った。
「あちこちに書いたんだけど、ほとんどが見つかって消されちゃったんだよ。でも、ここの落書きだけは最後まで残ってたんだけど……まだ、あるかな」
浩平はみさきが指差すあたりを見た。
そこに見えたのは多分、塗られてから一、二年程度しかたっていない、何も書かれていない壁だった。
何も言えないでいる浩平に、みさきは寂しそうに微笑んだ。

「そっか、やっぱり消されちゃったんだね」
浩平は明るい声を作って訊いてみた。
「どんな落書きだったんだ？」
「恥ずかしいよぉ」
「いや、ぜひ訊きたい」
恥ずかしがっているみさきがひどく可愛くて、好奇心を大いに刺激されたのだ。みさきは照れながら念を押した。
「……笑わない？」
「絶対笑わない」
「誰にも言わない？」
「こう見えても口は堅い方だ」
みさきが声をひそめて、相合い傘、と呟いた瞬間、浩平は吹き出してしまったのだった。
「ひどいよおっ！　笑わないって約束なのに」
「悪いっ。あんまり可愛かったんで、つい」
「浩平君、嘘つきだよ」
みさきはすねて口を尖らせた。

「もう笑わないから許してくれよ。ところで、誰の名前を書いたんだ？」
「嘘つく人には教えてあげないよ」
「もう絶対に笑ったりしないから」
「でも教えない」
みさきは走り出した。
浩平は苦笑しながらみさきの後を追いかけた。

みさきの言う通りにいろんなところを歩いている間、小さな思い出の数々を話してくれた。
小さな頃に校庭に遊びに来ていた犬と一緒に遊んだこと。辛かった中学時代に、泣きたくなると高校の校庭の目立たないところでこっそり泣いたこと。高校に入学してから学食のメニュー制覇が一週間で終わってしまったこと。
最初は怖いと思っていた女の先生が、みさきの事故の後にしょっちゅう病院に見舞いに来て、みさきの為にいろいろ話をしてくれたこと。
点字を覚えたら、と勧められたのも、その先生からであること。
淡々とした口調で小さな、思い出を浩平に語ってゆく。

その間に窓から射す光は赤い夕陽ではなく、うす蒼い影を伴う淡い金色に変わっていた。
「ごめんね、こんなに遅くまで」
「俺のことは気にするな。どのみち叔母さんも夜遅くにならないと帰ってこないしな」
その叔母にとっくに忘れられている、というのは、みさきに言う必要のないことだ。
しかしその言葉で安心したらしく、みさきは息をついた。
「それなら、もうひとつだけわがままを言わせてくれるかな」
「ひとつでもふたつでも、好きなだけ言ってくれ」
みさきは嬉しそうに笑ってから、ふと思い出したように顔を上げた。
「最後に行きたいところがあるんだけど」
「解った。つきあうよ」
みさきが行きたいところなら、校長室だろうが食堂の調理室だろうがどこへでも行くつもりだった。多分、みさきと一緒にいられる時間はこれが最後だ。みさきが望むだけ、ずっといてやりたかった。
「じゃ、行こうか」
浩平はみさきの先導されてその場所へ向かった。

澄んだ闇の中に、みさきが最後の一年を過ごした教室はあった。
「懐かしいな」
「この間までここで勉強してたんだろ?」
「それでも懐かしいよ」
みさきは教室の中に入っていった。電気を点ける訳にはいかないので、薄暗がりの中、浩平も後を追った。
月明かりが射し込んでくるせいで、歩くのに全く支障はない。
月光で蒼く浮かび上がる姿がかぼそげに見えるみさきは、かたん、と椅子を引いて窓際の前から三番目の席に座った。
「そこが先輩の席なのか?」
「今日まで、ね。明日からは違う人の席だよ」
寂しそうなみさきがごく自然に机の中に手をやって、小さな声をたてた。
「返却するの、忘れてたよ」
申し訳なさそうにそう言って本を二冊取り出した。
浩平はその本に見憶えがあった。みさきと一緒に図書室に行った時に借りていたものだ。
「今から返しに行ってくるよ」

「でも、鍵が閉まってるだろ？」
「……鍵は、あるよ。合い鍵も返すの忘れてたから。今日は本だけ返して、鍵は明日返しに来るよ」
　みさきはますます肩身の狭そうな様子になった。
「それなら俺、今から行ってくるよ」
貸し出しカードを書いていないのだから、本棚に戻しておけば大丈夫だ。
「浩平君、道に迷わないかな」
「あれだけ迷えばさすがに憶える」
「じゃ、お願いしようかな」
　みさきは笑いかけると本を2冊と合い鍵を手渡した。
「じゃ、行ってくる」
　浩平は教室から出た。

　三年生の教室からだと図書室は近い。月明かりだけで充分問題なく図書室に辿り着いた。
安っぽいプレートのついた鍵を射して回すと、あまり音をたてないように中に入り込んだ。
「……うわ」

その瞬間、浩平は思わず声をあげた。

図書室の中は一条の光も入ることのない暗闇だったのだ。今日の月はほぼ満月に近い。この暗さは異常だった。

しかし、数秒してからカーテンのことに思い至った。厚手の、日光を遮るカーテンは灯りのついていない部屋の中を、闇で覆っているようだった。

これだけ外の光が入らなければ、蛍光灯を点けても何も問題はなさそうだ。

浩平は手探りでスイッチに手を伸ばして点けた。

今までの闇とは全く異質の、眼を射すような明るさに、浩平は思わず瞼を閉じた。

点字の本棚は壁際にある。本を戻してしまえば終わりだ。浩平は歩き出そうとした。

しかし、ふと、足が止まった。

(俺は、スイッチをオンにするだけで、光を取り戻せる……だけど、先輩は)

みさきは眼が治らない限りずっと暗闇に居続けなければならない。見えない場所をさ迷い歩いているのだ。

浩平はスイッチをオフにした。それだけで、再び闇が訪れる。

(みさき先輩は……こういう視界で歩いているんだ)

浩平はわずかに背筋に震えがきているのを自覚した。

怖い。闇というのはこんなに怖いものだったのだ。前にみさきが『怖いから』と言った気持ちが泣きたくなるほど実感できた。
しかし、思い切って足を踏み出してみる。何事もなく木製の床に軽く足をつくことができ、浩平はほっとした。
もう一歩。そしてもう一歩。
手を前に差し出して障害物がないかを確かめながら、浩平は歩いた。
「うわっ」
突然、何かに足をすくわれた。その何かはがしゃん、と軽い音をたてる。浩平は体がその転倒に対して何も身構えないまま、無様に転んだ。それからしばらくして触れた感触から、浩平がつまずいたのが椅子であるのが解った。
制服の埃を払って立ち上がったが、さっきの転倒で自分の位置も、本棚がどこにあるのかも解らなくなってしまったのだ。
戸惑った浩平は、自分が本を持っていないことに気が付いた。
もう一度床にしゃがみ込み、落とした本がどこにあるのかを探す。腕を伸ばし、何かが触れるのを待つ。何かが当たった。しかし、冷たくて硬い。浩平はそれをとりあえず引っ張ってみた。がしゃあん、と大きな音をたてた。

浩平は体をびくっと震わせてあたりを振り返った。
何も見えるはずなどない。ただ、闇だけがそこにある。あれだけ浩平を脅えさせた音も、何事もなかったように闇に吸い込まれていった。
この闇の中、足元も全然解らないままで、もし、階段があっても段差など解らないままで足を踏み出してしまうのだ。
(もし、このまま闇が途切れることがなくて、二度と光が戻らないと告げられたら、俺はどうするんだろう……)
答えはひとつしか出なかった。
どう考え直してみても、それ以外の答えは出なかった。
浩平はそんな自分の心の弱さが嫌でならなかった。陳腐なドラマでは必ず、苦悩する主人公は最後に違う答えを出すのだ。友達に励まされ、その苦しみを考えれば全然見当違いの慰めに、さも元気付けられたような顔をして。
理不尽な気がした。
しかし、それが自分の弱さに対してなのか、陳腐なドラマの主人公であるのかは解らなかった。
(先輩は、どうだったんだろう)

そう考えた時に、突然、視界が真っ白になった。
「浩平君、いるの？」
「……あ、ああ」
見えてみると、大きな音を出して倒れたのがただのごみ箱だったことや、あれだけ探しても触らなかった本が二冊とも、案外近くに転がっていたのが解った。
みさきが心配そうに入口から入ってくる。
「あんまり遅いから探しに来ちゃったよ」
「あのなあ、子供じゃないんだから」
「うん、そうだよね」
みさきは少し悪いかな、といった表情でうなずいた。
「そろそろ戻ろうか」
「ちょっと待ってくれ」
浩平は床に落ちている本を拾って、点字の本のコーナーまで行って本を戻した。心配そうに立っているみさきの側に走り寄り、部屋の電気を消した。
二人は下駄箱に向かう為に階段を降りていた。

これで最後だ。そう思うとみさきに嘘をついたまま別れるのは嫌だった。みさきは失望するかもしれないが、本当のことを告げたかった。

小さな声で呟く。

「先輩、俺、嘘ついてた」

「卒業式に来てくれなかったこと？」

「どうして……」

みさきはわずかに微笑んだ。

「浩平君、嘘つくの下手だからね。それに、『蛍の光』を在校生が歌ってくれた時、浩平君の声が聴こえなかったから」

「……ごめん」

みさきは浩平の方を向いた。

「言い訳は？」

「ない」

できるはずがない。卒業式に出られなかったのは事実だし、世界から引き剝がされてゆく浩平の現状を説明することなどできないのだ。

みさきの笑い声はやさしかった。

「浩平君、やっぱり嘘つくの下手だよ。卒業式を見てもらえなかったのは残念だけど、その後私の為に一緒にいてくれたから、それだけでも嬉しいよ」
「……ごめんな」
みさきが卒業式を浩平に見送ってもらうのを、どれだけ楽しみにしていたかを知っていると、その言葉に申し訳なくなってしまう。
「だったら、これから卒業式をしようよ」
「……これから？」
「うん、この前のクリスマスの時みたいに、二人だけの卒業式」
浩平は去年のクリスマスパーティを思い出した。
クリスマスらしいものなど何もない、怪しい儀式と見紛うばかりのクリスマス。それでも幸せだった時間。
浩平もみさきと同じように、やわらかな表情を浮かべる。
「在校生が俺だけでよければ」
「うん、卒業生も私一人だけだけど」
もうすぐ一階の階段を降りきってしまうところを、二人は引き返して階段を昇っていった。

もう一度、みさきの教室まで戻って来た二人は、そっと横開きの扉を開けた。
すっかり夕方の気配はなくなり、教室は夜の空気をたたえていた。
みさきは窓際に寄って、星空を眺めているようだった。現実に眼には見えなくても、記憶の中の一番鮮やかな星空を映し出しているのだろう。その後ろ姿は、星のシャワーを浴びている神話の少女のように非現実的だった。
浩平はその姿に思わず見とれていた。
「えっと、最初はどうするのかな」
「あ、え……えっと」
「やっぱり校歌を斉唱する？」
「そりゃまずいだろ。今だって小声で話してるんだから」
ただでさえ人気のない時間だ。そんなことをしようものなら、走ってきた先生に丁重にお叱りを受けたあげく、外につまみ出されるのは予想に難くない。
「だったら在校生の送辞だね」
「掃除？　暗い中でそんなのしても、きれいにはならないと思うぞ」
「そうじゃなくて、卒業生を送り出す言葉だよ」
やっと頭の中に『送辞』という言葉が浮かんできた。

「そ、そうだった。だったら……おめでとう、先輩」
みさきは黙って浩平の方を向いている。しばらくすると困ったように口を開いた。
「続きは？」
「これで終わりだけど。もしかして、普通はもっと長いのか？」
浩平はおそるおそる訊ねた。式と名の付いたもので、居眠りをしないで済ませたものはないのだ。特に長話となると、てきめんに眠くなってしまう。
「今の160倍くらいは長いよ」
「ぐあっ、そうだったのか！　校長の長話より短いくらいでよかったのか」
「でも、内容的には間違ってないと思うよ。次は卒業生の答辞だね」
みさきは照れたように一度うつむいて、やや緊張したように喋り始めた。
「今日は本当にありがとう。私、浩平君に逢えて本当によかったと思ってるよ。もし、あの夕焼けの日に私が屋上へ行かなかったら……浩平君が屋上に来てくれなかったら」
みさきの声がわずかに震えていた。
月明かりを受けて、みさきの眼のあたりから、光るものが落ちてゆく。
「そう思うと……たくさんの選択の中で、浩平君と出逢えたことが」
みさきは声を詰まらせてうつむいた。

「……ごめん。感謝の言葉がいっぱいで、これ以上、声にならないよ……ありがとう、浩平君」
最後の方はしゃくりあげた音と一緒になって、はっきりとは聴こえなかった。
みさきは無理に笑みを浮かべ、明るく言った。
「……えっと、次は何かな」
「校長の話じゃないか?」
「それは無理だね。ということは、PTA代表の挨拶も駄目だね。残ってるの、卒業証書の授与だけだよ」
「うーん」
みさきは黒い筒を浩平に渡した。
「これを、もう一度先輩に渡せばいいのか?」
「名前を呼んでからね」
浩平は卒業証書を持って背筋を伸ばした。
「みさき先輩」
おごそかな口調で名を呼んだが、そこでまたクレームがついた。
「こんな時に先輩は付けないよ」

「じゃあ、呼び捨てか？」
「フルネームでね」
浩平はもう一度卒業証書を持って構えた。
「川名みさき」
「はい」
仰々しく証書を手渡すと、みさきが一礼した。
「もしかして、これで終わりか？　5分もかからなかったな」
「あんまり盛り上がらなかったね」
「ま、二人だけだからな」
スケジュールのほとんどを省略したのだから盛り上がらないのも当然である。
「そうだなあ、せっかくだからこれでも食べようか」
「私もちょうどお腹が空いてたところだよ」
浩平は紅白饅頭の箱を開け、月明かりに白く輝く饅頭をかじった。みさきが食べているのは本来ならピンクに見えるはずの饅頭だった。
真っ暗な教室で二人並んで饅頭をかじる。クリスマスの時には仮にも蠟燭があったが、その時以上に間抜けな光景だった。

「絶対に変な卒業式だよな」
「でも、私はこんな卒業式の方が嬉しいな」
みさきの声は明るい。浩平はこんな状況でも励まして、楽しんでくれようとするみさきが愛しく感じた。
やさしくて、可愛い先輩。誰より強い先輩。最後に好きになったのが彼女であったことが誇らしく、嬉しかった。それは同時に、そのみさきと別れなければならない時間が来ることが、身を斬られるように辛いということでもあった。
「先輩、キスしていいか」
みさきは頬を染めてうつむいた。
「理由によるよ」
「先輩のことが好きだから」
「……卒業式の後に告白なんて、ドラマみたいだね」
「こんなベタベタなの、今時ドラマでもやらないだろ」
二人して笑い合ってから、みさきは真面目な表情になった。
「浩平君、前に言ったよね。絶対断わるって」
「俺は先輩の側にいたい」

このまま消えてゆかないで、ずっとみさきの側にいられたらどんなにいいだろう。
「……駄目だよ」
「先輩の一番近くにいたいんだ。もちろん、俺のことをそういう意味で何とも思ってないんだったら断ってくれて構わない。でも、もし……」
「私はね」
みさきは強い口調で浩平の言葉を遮った。しかしその語調はすぐにもろいものになった。
「好きな人を、束縛したくないんだよ。だから、浩平君の気持ちに応えることはできない」
「迷惑がかかるから？　そんな理由で断わるんなら、俺だって怒るぞ」
「でも……」
「俺はずっと先輩の側にいる。何があっても、必ず最後には先輩の側にいる」
浩平は誓った。
それは、今も呼んでいる『えいえん』から必ず戻ってくるという決意だった。その時には誰も浩平のことを憶えていなくてもいい。みさきの為に、この世界に戻ってきてみせる。
事情は解らなくても浩平の気持ちは通じたのだろうか。
みさきが顔を上げた時にはもう、迷いはなかった。
「私、馬鹿だから言葉通りに受け取るよ」

「受け取ってくれ」
「後悔しても、知らないよ」
「ああ」
「本当に……信じていいんだよね」
「……ああ」
みさきは頼りなげに浩平に顔を向けた。浩平はみさきの眼に戸惑った浩平自身が映っている。浩平はみさきの肩にそっと手を置き、唇を重ねた。
触れ合った部分から伝わってくる、みさきの温もり。
今、こうしてしまうことは、正しくないのかもしれない。好きだという気持ちを、最愛の人との絆を頼りにしているだけの、みっともない行為なのかもしれない。
それでも、浩平はみさきの温もりが欲しかった。そうせずにはいられなかった。
浩平はみさきの背中に腕を回して、力を入れた。
「……浩平、君？」
みさきは後ろ手に壁を触り、ぺたんと床に座り込んだ。浩平はみさきを追いかけるように自分もしゃがみ、もう一度みさきを抱き締める。
前に抱き締めた時には動転していて気付かなかったが、みさきの体は思っていた以上に



ほっそりとか細く、やわらかかった。
背中に回していた右手でそっとみさきの胸を覆った。戸惑った表情のみさきが、ためらいがちに抗弁する。
「浩平君。私も、女の子なんだよ」
「知ってる」
一番好きな、最愛の女性だ。
「恥ずかしいんだよ」
「それでも、俺はみさき先輩が好きだから」
みさきはうつむいて、聴こえないほど小さな声で言った。
「……きっと風邪ひくよ」
「俺は構わない」
しばらくの沈黙の後で、みさきはぽつりと呟いた。
「私も、構わない……かな」
夜目にも真っ赤になっているのが解る頬に指を触れながら、浩平はありがとう、と言って制服の上をたくし上げ、ゆっくりとはだける。
みさきの腹部から胸にかけて、蒼白い光を受けているせいか真っ白に見える。その姿は

普段のみさきとは全く違った、ぞくりとする色気をたたえていた。
「お腹がすーすーするよ」
みさきは恥ずかしそうに口許に手をやった。
「ね、私、変じゃないかな」
「変な性格だとは思うけど」
「性格じゃなくて」
みさきはすねた表情を浮かべる。
「私、自分のことが一番解らないから……私が知ってる私は、小学校までの私だから」
「大丈夫だって。俺が保証する。もっとも、俺の保証なんてこれに関しては当てにはならないけど」
「浩平君がそう言ってくれるのなら、それで充分だよっ」
涙を浮かべながら嬉しそうに笑顔を見せてくれる。
「触ってもいいかな」
「……うん」
浩平はぎこちない手つきで、みさきの形よい胸を撫でてゆく。くすぐったそうにみさきが体を震わせ、浩平の掌に自分の掌を重ねた。

「先輩、ちょっと手をどけて」
「変なことしない？」
「多分する……先輩が好きだから」
浩平がみさきのことをじっと見つめると、みさきは少し怒ったように責めた。
「ひどいよ。そんなこと言うなんて」
真っ赤になって付け加える。
「……私も好きなんだから」
みさきは掌をどけた。
浩平はみさきが痛くないように気をつけて、硬い床にみさきの体を横たえてゆく。埃っぽい床に、みさきのつややかな黒髪が散らばっていった。
「ごめんな、こんな場所で」
「いいよ、浩平君だったらね」
浩平はスカートのホックに手をかけたが、初めてのことに緊張しながら浩平を受け入れてくれようとするみさきを、この埃だらけの床で全裸にするのはしのびなかった。
ホックから手を外し、そのままスカートの中に手を差し入れる。
「浩平君？」



足をもぞもぞと動かし、ほんのわずかに切なげな抵抗をする。浩平は下着に両手をかけて、ゆっくりとずらし始めた。
「ちょっと腰を上げてくれると嬉しいんだけど」
みさきは不安げな表情を見せながらも、少しだけ腰を浮かせた。月光の下で、みさきのその部分が露わになっている。浩平は耳にがんがんと響く自分の鼓動を聴きながら、その部分に指を這わせた。
なめらかな皮膚とは感触の違う場所を探り当て、指を動かす。
こつ、こつ、と何か軽い音が響いた。よく見ると、みさきの爪が頼りなげに床に爪を立てているところだった。
「ごめんな、先輩。こんなところで」
本来なら肌触りのよいシーツの上に横たわるべきなのだろう。背中に当たる感触も最悪に違いない。
みさきは恥ずかしそうに訊いた。
「浩平君、だよね……？」
「あ、ああ」
「よかった。浩平君、喋ってくれないから」

浩平はみさきを抱き寄せた。
「俺以外の誰がいるんだよ」
「そうだよね」
みさきは安心したように微笑んだ。
浩平はみさきを抱く腕を腰に回し、自分の性器をみさきの部分にあてがった。
「先輩」
そのままゆっくりと、その部分に挿入してゆく。みさきの部分は緊張のせいもあってきつく浩平を拒んでいた。それでも、みさきの体を引き寄せると、わずかに沈んだ。
形よい眉を痛みに歪めながらも、みさきは浩平の方をじっと向いていた。
何かを突き破ったような感覚が走ったのと同時に、浩平はみさきをきつく抱いた。
「……浩平君っ」
涙を浮かべて、みさきは浩平の制服の端を掴んだ。
何も見えない闇の中で、みさきの腕は浩平を探し求めるように強く浩平を抱き締めた。
そんなみさきを浩平も必死で抱き寄せる。
最後の瞬間まで、力尽きるまで、互いの体温を感じていた。
「……浩平君でよかったよ。今、眼の前にいてくれる人が、私を抱き締めていてくれる人

が浩平君で」
終わった後で、くったりと浩平の肩に倒れ込んだままのみさきが呟いた。
「一緒に、いてくれるんだよね？」
「ああ」
みさきの声がかすかに震える。
「約束したんだよね……？　後悔、してないよね？」
涙で潤んだ眼を月明かりに輝かせながら、みさきはいつもの笑顔を浮かべてくれた。浩平はもう一度みさきを抱き締めた。

月はいつの間にか高くまで昇っていた。
抱き合いながら月を眺めている時、みさきが屋上に行こう、と言った。
「屋上？」
「きっと、星が綺麗だと思うよ」
月はここからでも充分美しいが、星は空を全部見上げるのが一番綺麗だ。しかし、浩平は夜空からさっきの暗闇を想像してしまい、一瞬体が強張ってしまう。
「駄目かな」

「そんなことはないけどな」
「だったら、ね」
にっこりと笑って、みさきは軽く甘えてみせる。
浩平は立ち上がるとみさきと一緒に教室を出た。
屋上に通じる扉を開くと、冷たい風が吹いた。三月上旬では夜風はまだ寒い。闇に溶け込んでおぼろげにしか見えないフェンスを、音をたてて風が吹き抜ける。
しかし、空気が冷たい分だけ、星はさえざえと輝いていた。
みさきは夜天を仰いだ。
実際には星はみさきを照らしていたが、浩平はみさきの姿が闇に消えてゆくような気がしてしまった。
「みさき先輩、一つ訊いてもいいか」
「何？」
押し殺したように低い声で、浩平は訊いた。
「生きてくの、嫌になったことってないか……？」
訊ねていいことではないのは解っていた。それでも浩平は知っておきたかった。
浩平が馬鹿な質問をしたことを後悔する程度には長い時間沈黙してから、みさきはいつ

も通りの笑顔を向けた。
「あるよ、もちろん」
浩平は息を呑んだ。
不思議なくらいいつもと変わりない笑顔で、みさきは話し始めた。
「もう二度と眼が見えないんだって理解した時、死のうと思った。先生や両親はいつか医学が進歩したら、きっと眼が見えるようになるんだから、それまで頑張ろうって言ってくれたよ。でも、私は自分の眼が二度と光を取り戻さないって知ってたんだ。先生やお父さんやお母さんが嘘ついてるって知ってたんだ……だからね、死のうと思った」
みさきは見えない眼で星々を見上げて微笑んだ。
「綺麗だよね、きっと」
星空は泣きたいほどに綺麗だった。
だからこそ、この光景を二度と見られないと思い知らされた気持ちを考えると、浩平はただうなずくだけしかできなかった。
「どうして……先輩はこの世界に留まろうと思ったんだ」
「私ね、あんまり考えるの得意じゃないけど、その時はいろいろと考えたよ。ずっとずっと一生懸命考えた」

動くこともできないベッドの上で、嫌になるほど考える暇はあっただろう。
「好きなドラマがあったんだよ」
みさきは昔浩平も何度か見たことのある人気ドラマの名前を言った。
「大好きな俳優さんがいっぱい出ててね、毎週欠かさず見てたんだ。一話終わったらその次が気になって、今度はどんな話だろうって考えながら過ごして、次の回もまた面白くて……その繰り返し。だからね、眼が見えなくなった時、一番悲しかったことはね、そのドラマの最終回が見られなくなったことだった」
みさきは笑った。
「考え込んでるうちに最終回が終わってね、友達がいつもみたいに電話してきたんだ。私はもうすぐ死ぬつもりでいたから、何となく相槌を打ってたんだけど、最後にこう言ったんだ。最終回、面白くなかったね、って。みさきが考えた方が面白かったよって」
「……そうか」
「そしたら何だか馬鹿馬鹿しくなっちゃって。その程度のことで悩んでたんだって。その時にね、先生の言葉を信じてみてもいいかな、って思ったんだ。もし治らなくたって、綺麗な夜空を見ることはできなくても、そこに星が輝いてるのを知ってる。私が立ってる世界に存在してる。だから、この世界が好き。もう別の世界へ行こうなんて思わない」

みさきはもう一度満天の星を浴びるように上を向いた。
「ね、星空、綺麗だよね」
「ああ、綺麗だ」
今度はそう答えることができた。
みさきは浩平と同じように別の世界へ行くつもりだった。この場合は死を選ぼうとして。
でも自力で戻って来たのだ。悩んで、苦しんで、それこそ内臓を吐き出すような苦しみを越えて、この世界を選んだのだ。
そして、最後に踏み出せない場所へ、浩平は連れて行きたかった。
「明日、二人でデートしよう。どこでもいい。好きなところに連れてくよ」
みさきは払拭されたはずの脅えを見せてうつむいた。
「……私が行きたい場所は、怖いところなんだ」
「俺がいるから。ずっと、側にいる。それでも怖いか?」
「浩平君、頼りないからなあ」
いたずらっぽい表情でみさきが告げた。
「商店街、それから桜の見える公園。浩平君のおごりでね」
「解った」

「信じていいんだよね」
「ああ」
「信じるよ。浩平君の言葉、全部」

それからみさきを家まで送っていき、浩平は月を見ながら考えていた。
あと少し、もう少しだけ時間が必要だった。みさきの為に、自分がみさきにしてやれる、最後のこと。その為に。

もう時間は残されていなかった。
翌朝目醒めかけた時、浩平の意識は拡散し、消えてゆこうとしていた。澄んだ青空の中にかすんで消えようとする意識を必死でかき集め、オリハラコウヘイという存在を形作る。
そして出かける準備をして足早に、もう戻ることはない家を出て行った。

約束より少し送れて、川名家に到着した。
「わ、悪い。ちょっと遅れた」
「いいよ、私も今出てきたところだから」

みさきは趣味のいいカットの青いジャンパースカートと生成り色のセーターを着ていた。
私服のみさきを見たことがなかった浩平は思わず狼狽してしまう。
「先輩、どうしたんだその格好。制服はどうした？」
みさきは微笑んだ。
「昨日学校を卒業したんだよ。それでまだ制服を着てたら変な人だよ」
「そうか。それもそうだな」
「ねえ、この格好似合うかな」
みさきはくるっと一回転してみせる。
「ああ、よく似合ってる」
みさきは外見上はいつも通りに微笑んでいたが、浩平は時折みさきの動きがぎこちなくなるのを見逃さなかった。自分を守ってくれるアジールから、初めて出なければならないみさきは、明らかに脅えていた。
「じゃ、行こうか」
「うん」
ゆっくりとうなずいたが、みさきの表情にはまだ恐怖があった。
「大丈夫、俺がついてる」

「手、繋ごっか」
みさきは浩平に掌を差し出した。
脅えながらでも、浩平と一緒に不安な外界へ踏み出してゆこうとするみさきの手を、浩平はしっかりと握り締めた。
その瞬間、くらくらと分解されてでもいるような感じになった。
消えてゆこうとする自分自身を、みさきの掌をきつく握ることで必死で押しとどめた浩平は、商店街の方へ歩き出した。

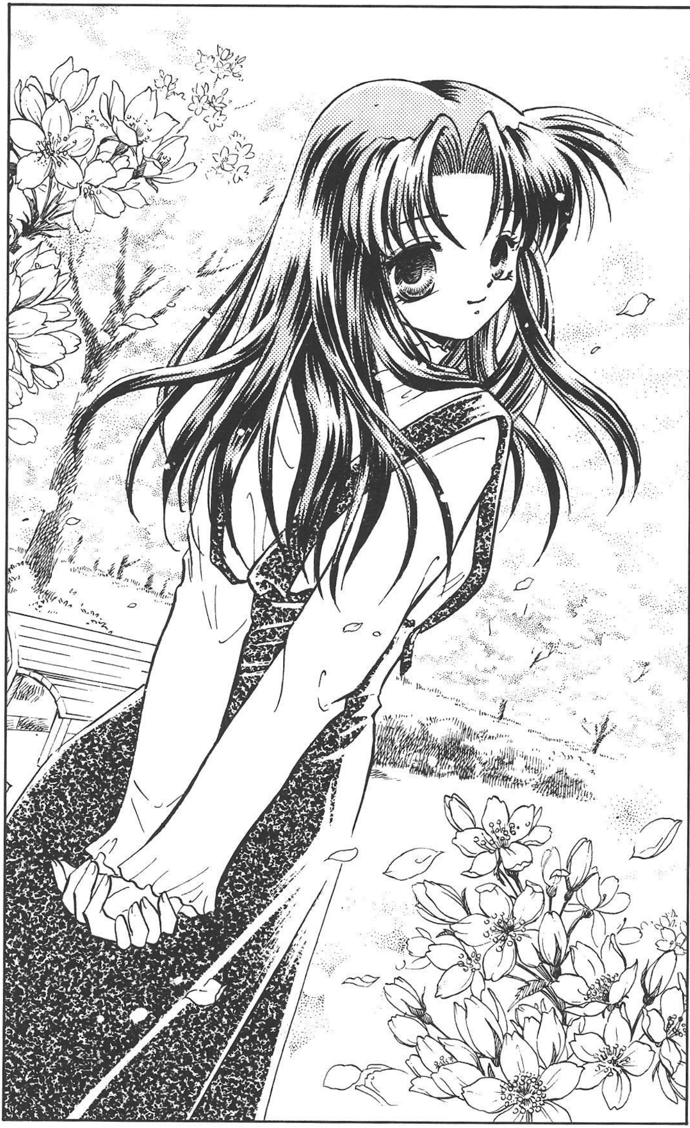
二人は世間話をしながら商店街に近付いた。
最近食べたおいしい菓子の話題、道を歩く途中に咲く沈丁花の甘い香り、最近読んだ小説が凄く面白くて、本当にどきどきしたこと。
浩平が商店街まで着いたことを告げると、みさきは立ち止まった。
「風が違うね」
そう言うみさきの髪を、そよ風がわずかに揺らしてゆく。
「屋上は屋上の風、商店街は商店街の風……場所によって違う風が吹くんだね。今までそんなことも知らなかった。ううん、知ろうともしなかった。きっかけはたくさんあったは

ずなのにね」
　寂しそうな顔を商店街の喧燥に向ける。
「商店街の風はどうだ？」
「うん、気持ちいいよ」
　側を通り抜けてゆく自転車の音。買い物客の喧燥。何か食べながら歩く人達の話し声。
その全てが新しい風のはずだった。
「そう言えばお腹空いたね」
「そろそろ昼飯にするか」
　まだ少し早いが、混み合わないうちに食事にした方がいいかもしれない。
「確か浩平君のおごりなんだよね？」
「おう、任せとけ」
　みさきはやはり食べ物が関わってくるととても嬉しそうだ。
　浩平はみさきの手を引いてファストフードショップへ入った。さすがにここならみさき
がどれだけ食べても財布の痛み具合は少ない。
　みさきを席に案内する。
「先輩、注文は何にする？」

「浩平君と同じ物でいいよ」
普段の食欲を知っていると、びっくり驚くような返事をした。
「遠慮せずに店のメニューを全制覇したっていいのに」
「そんなことしたら、次に浩平君と一緒に来る時の楽しみがなくなっちゃうよ」
次は、一緒に来ることは多分できない。
それでもみさきの言葉が嬉しくて、そして悲しかった。

軽く食事を済ませて店を出ると、二人は歩き出した。
「ねえ、今私達のことを見た人は、私達を恋人同士だと思ってくれるかな」
「ああ、大丈夫だ。それ以外には見えないだろ」
二人きりで周囲に迷惑な甘い空気を振りまいているのだから、それ以外の組み合わせに見えようはずがない。
浩平はみさきの手を引いて商店街から出た。
水色のクレヨンで塗ったような可愛い青空の下を、桜の咲く公園まで歩いていった。
この近辺で『桜の咲く公園』はいくつかあるが、今満開の桜を誇っているのはハツミヨ

ザクラの咲く市民公園以外になかった。
休日にもなると花見に来た人達で賑わうが、気持ちいい気候でも平日の昼間は人出は少ない。公園を横断する遊歩道を、二人はゆっくりと歩いた。
桜がまとめて咲いているのはもう少し向こうだ。
あたたかな陽射しの中、みさきはかすかに花の匂いがする風を受けながら言った。
「私ね、学校の屋上が好きだった理由が解ったような気がするんだ。一番、近い場所だったんだよ……私が憧れていた世界にね」
何十本とある桜の樹から、何枚も何枚も花びらが舞い落ちる。
みさきは頬を撫でる花びらを受けながら、くすぐったそうに笑った。
「私、本当に馬鹿だよ。どうして今まですぐ側にある世界に気付かなかったんだろう」
みさきの笑顔が、共有している時間が、浩平にとってかけがえのないものだった。そのかけがえのないものを置いて、浩平はどこに消えてゆこうとしているのだろう。
考え込んだ浩平は、向こうからアイスクリーム売りの声がするのに気が付いて、明るい声をたてた。
「お、もうアイスが売ってるのか」
「陽射しが暖かくなったからね」



「買ってこようか？」
「大丈夫か？　一人で」
みさきはすねた表情を作りながらも笑っていた。
「それは年上に言う言葉じゃないよ」
「じゃ、お願いしようか」
「うん、任せて。ねえ、バニラと抹茶、どっちがいい？」
浩平は書かれているメニューを遠目に眺めた。
「抹茶は売ってないみたいだぞ。チョコレートならあるけど。俺はバニラがいいな」
「そうなんだ。私、好きなのに。じゃあ、私はチョコミントにするよ」
みさきは手を振るとアイスクリーム売りの掛け声がかる方へ向かった。
その瞬間。
浩平の視界が、いきなり遠のき始める。これが終わりなのだ。この世界の、全ての思い出が、大事にしてきた気持ちが、最愛の人の姿が薄れてゆく。
（先輩……）
薄れてゆく自分の意識を保とうと、みさきのことだけを考え続けようとする。
浩平がいなくなったことで脅えるだろうみさきへの謝罪。そして、みさきと交わした約

束。

『何があっても、必ず最後には先輩の側にいる』

大好きなみさき。可愛くて、やさしいみさき。彼女の側に必ず戻ってくる。

それを言う為に必死で声を絞り出そうとした浩平が最後に見たものは、ぼんやりと桜のピンクの中にかき消されてゆくみさきの後ろ姿だった。

エピローグ

みさきは浩平が待つベンチに、アイスクリームのコーンを三つ持って戻って来た。右手に持ったふたつのコーンが不安定に揺れる。

「お待たせ、浩平君。おじさんにね、ひとつおまけしてもらったよ。新発売のヨーグルト味なんだって。あ、これ私が食べていいのかな。はい、これは浩平君の分だよ」

差し出そうとしたが、どれがどの種類だか解らず、みさきは困ったように笑った。

何故かひどく違和感を感じる。

「はい、浩平君が選んでね……ねえ、どうしたの？　早く取ってくれないと、私が全部食べちゃうよ」

浩平の答えはなかった。

みさきは明るい声を作って語りかけ続ける。

「そうだ、また二人でどこか出かけようよ。浩平君、もうすぐ春休みだよね？　私ね、いっぱい行ってみたいところがあるんだよ。眼が見えるようになってからって思ってたんだけど、浩平君と一緒なら……ねえ、どうしたの、浩平君」

それでも、浩平の返事はなかった。

強い風が吹いて、花びらがざあっという音をたてた。その何枚かがみさきの頬に触れてゆく。

その瞬間、みさきはベンチには誰もいないのだということを納得した。
「約束したよね？　ずっと一緒にいるって……なのに、どうして？」
前兆がなかった訳ではなかった。
浩平の、時折見せる不自然な態度。卒業式の夜、みさきの言葉を聞いた時の対応。浩平が反応していたのは『この世界からいなくなる』ということに対してではなかったか。
みさきを、閉ざされている状況から必死で引っ張り出そうとしていたのは、当然掛け値なしの愛情からでもあっただろうが、自分自身が閉ざされてゆこうとするからこそ、みさきを解放したかったのではないだろうか。
理由などないのに、そんな気がしてならなかった。

半泣きでアイスクリームを全部平らげてから、みさきはおそるおそる公園を出た。
(自分で行くんだよ、自分で)
商店街から市民公園まで、それほど遠くはない。大体10分程度だ。一度商店街に戻って、それから自宅まで歩くことは不可能ではないはずだ。
しかし頭の中で思うのと、実際に歩き出すのとでは全然違う。
怖かった。心細かった。

なるべく道の隅の方へ寄って、たった一度しか通っていない道をゆっくり歩く。行きに自分の手を引いてくれた浩平はいない。

みさきは涙がこぼれそうになるのを堪えて、唇を結んだ。

助けを求める方法はいくらでもあった。しかし、みさきはそうしたくなかった。自分の力で家まで辿り着きたかったのだ。

頭の中で市民公園が商店街からどの位置にあるのか考え、陽光が当たる方向から南を割り出した。

(なら、こっちが商店街だよ)

平日の昼間で、それほど車通りの多くない場所なのがありがたい。みさきは迷いながらも着実に商店街に近付いて行った。

(浩平君、世界は……綺麗なんだね)

泣きたいほど辛いのに、肌を撫でる風の甘やかな匂いも、太陽の暖かさも、さわさわと聴こえる葉ずれの音も、何もかもが胸が痛くなるほど美しかった。

おまじないのように何百回も『浩平君』『浩平君』と唱え続けながら、みさきは商店街まで辿り着いた。

(浩平君、私、ここまで自分で来られたんだよ)

一時間前の自分はこの商店街で浩平に手を引かれ、未知の世界に脅えながら歩いていた。しかし、今は違う。もちろん脅えはあるが、自分の力で歩き出してゆけることに気付いたのだ。それを浩平に見てほしかった。

みさきの眼にもう涙はなかった。

それ以降、浩平のことをどこでも聞くことはできなかった。

演劇部の公演の時に、みさきは思い切って雪見に訊いてみた。

「雪ちゃん。浩平君のことなんだけどね」

「浩平君って誰?」

雪見は不思議そうに訊き返した。

みさきは戸惑ったが、屋上で掃除をさぼったみさきをかばった話をしてみる。名前が思い出せないのだろうと思ったのだ。

それでも、雪見は困った口調で告げたのだった。

「そんなことあったかな。憶えてないけど」

それ以上訊こうとした時、公演開始のチャイムが鳴った。

「あ、ごめんね。また後で」

雪見は走り去った。
仕方なく舞台の袖でみさきは待っていた。もう一人訊かねばならない相手がいる。浩平と逢ったことのある人物がいたのだ。
澪だ。
舞台が終わってから雪見を間に挟んで、澪に同じ質問を繰り返してみる。
さらさらとサインペンをスケッチブックに走らせる音がしてから、雪見がそれを読み上げてくれる。
「ええとね、『知らないの。ごめんなさい』って」
まるで浩平の存在に消しゴムをかけたように、折原浩平という少年の名を訊くことはできなくなっていた。職員室に行って浩平の担任だった、髭こと渡辺先生にも訊いてみたが、やはりはかばかしくなかった。
その時点でみさきは、浩平が異常事態に陥っていて、少なくともみさきの辿ることのできる全ての人間の記憶が、そんな人物はいなかったように書き換えられているのに気が付いた。
注意深く浩平の話題を避けて話をすると、ある程度思い出してくれる。例えば、澪と出逢った時の話をしてもらった時、うどんをぶちまけて制服を洗濯してもらった時のことを、

現実に澪は思い出してくれた。

しかし、その制服の持ち主がいつの間にかみさきにすり換わっている。

そんな徒労を繰り返し、みさきは浩平のことを訊こうとするのを諦めた。

そして新年度を迎え、みさきは本格的に眼の治療の為に病院に通うことにした。

週三回、隣の市にある総合病院に通院する。

前から通っていたところで、ある程度馴れてはいたが、そんなにしょっちゅう病院に行くのは、怪我をした直後以来だ。治らない、と思ってから、それを思い知らされるのが怖くて、病院に行くのを遠ざけていたせいもある。

最初の数回は母についてきてもらったが、帰りは病院でタクシーを呼んでもらって乗るのだから、と一人で行くことにした。

担当の先生から光が取り戻せるかもしれない、と聞いたのは、晩秋の頃だった。

すぐに見える、という状態にはならないが、光を感じる状態までは回復する可能性は充分ある、と先生は力強い声で言ってくれた。

(このことを、浩平君に教えてあげたいな)

そう思っても、浩平はいない。

この世界に存在したのかさえ時々解らなくなる。そんな不安にかられると、みさきは浩平にもらった年賀状にそっと触れる。

『あけさしておめでとう』

3の点を打ち損ねた、浩平が必死で作ってくれた年賀状。

字を判別しやすいつるっとした紙ではなく、普通の年賀葉書に無理やり点字を打ってあるので、どれだけ指の痛い思いをしたのか想像に難くない。

「ねえ、浩平君……誰も浩平君のことを思い出してくれないよ」

大好きなのに。

浩平の声も、全ての思い出も、掌の感触も、初めて触れ合ったあの時も、全部みさきの中で一番大切なものなのに。

みさきはどうしても涙をこらえられなかった。

浩平と出逢った思い出のある初冬に、みさきはふと昔のことを思い出した。

中学の頃によく見た夢だ。

みさきはお気に入りの学校の中を駆け回っていた。そこは、永遠にいてもいいみさきだけの王国で、みさきの家と高校だけしかない世界だった。

景色はどこまでも美しく、全ての場所はみさきの為に存在した。
朝起きるたびに、それがただの夢だったことがひどく辛く、もう一度あの夢に戻れたらよかったのに、と泣いたものだ。
高校に入学してからは一度もその夢を見ることはなくなり、みさきもそんな夢を見ていたことなど忘れていた。
ある意味で、高校に入学したのはその夢に戻ったのと同じことだったのだから。
その夢を見ていた頃の自分と、消えてしまった浩平が重なって感じた。
(でもね、私はちゃんとその夢を終わらせてきたんだよ。それを浩平君が手伝ってくれたんじゃなかったの？　なのに、どうして浩平君は戻ってこないの？)
最後には必ず側にいる。
その約束を叶える為に、浩平は絶対に戻って来る。
心の中でみさきは何度もそう呟いた。

やがて、冷たい風がぬるくなって、花の匂いを運んで来るようになった頃。
みさきは再び高校の門をくぐった。
校門には去年と同じように卒業式の看板が立てられているはずだ。去年触った紙製の造

花の感触を思い出した。みさきはまだはっきりと記憶に残っている、数年前の映像を暗闇に投射して、体育館の方へ歩いた。

「川名さんですね？」

一年ぶりに聞く懐かしい声に、みさきは微笑みを浮かべた。

この学校で一番馴染んだ、小さな頃から知っている宮本先生の声だった。みさきが眼を怪我した時に、いつも見舞いに来てくれた先生。

みさきの為に点字を勉強して、点字の本を図書館に入れてもらえるように手配し、最後の年には担任になってくれた先生。

恩師という言葉を誰か一人に向けるなら、彼女以外にいないだろう。

みさきの記憶にある宮本先生の姿は四十代の、生真面目そうな印象だったが、実際にはもっと年老いて、白髪も増えているのだろう。

それでも、少し聴くだけだと硬く感じる声の中に潜むやさしさは、一年ぶりのみさきにもよく解った。

「元気で過ごしているようですね」

「おかげさまで。先生は今年も三年生の担任ですか？」

「ええ、本当は嫌なんですけどね。悲しいですからね、教え子の旅立つ姿を見ることは。

もちろん、誇らしいことではありますけど」
「はい」
そんな気持ちで自分も送り出してもらったのだと思うと、どこかくすぐったいような気もした。
「それで、今日はどうしたんですか？」
「どうしても送り出したい卒業生がいるんです」
みさきはやわらかな声で言った。
「私の他には誰も卒業をお祝いしてくれない、かわいそうな後輩なんです」
「そうなの？　どうして」
先生は少し驚いたようだった。みさきはいたずらっぽく付け加えた。
「多分、日頃の素行が悪いからですね。か弱い女の子を一人残して、どっかに行っちゃうような人ですから。ほんとに、ひどい人ですよ」
みさきの強調の仕方が、親しい相手に対するものだと口調で解ったのか、先生はかすかに笑って話を変えた。
「そう言えば、少し髪型を変えましたね」
両サイドを三つ編みにして、後ろのところでリボンを結んである。雪見が遊びに来た時

に、いろいろヘアスタイルを研究してみたのだ。サイドの髪が頬にかからなくてすっきりとしているのが気に入っていたし、雪見も似合うよ、と言ってくれたのだ。

「おかしくないですか？」

「ええ、大丈夫よ。よく似合ってます。でも、あんまり卒業式に参列するようには見えませんね。どちらかと言うと、恋人に逢いに行くみたい」

「そんなんじゃないですよ」

照れて否定したが、頬は熱くなってしまう。

みさきは先生に挨拶をすると、体育館に向かった。

父兄の並ぶ席に座って、みさきは卒業式が進行するのを聴いていた。

名前を呼ばれた生徒が、緊張した声で返事をして卒業証書を受け取る。みさきは神経を張り詰めて、その名前を聴いていた。

「以上、卒業生３６５名」

一番聴きたかった名前は呼ばれなかった。

卒業生の数に、浩平は入っていなかったのだ。

（浩平君、誰もお祝いしてくれないね。でも、浩平君が私を送り出してくれたみたいに、

私も今、ここで浩平君を送るよ。そうできるのは私一人だから)
おめでとう、という言葉を浩平に対してかけてあげたかった。
式が終わり、浩平がいないまま、卒業生達は嬉しそうに退場していった。

かけられなかった言葉を抱いたまま、みさきは懐かしい校舎の屋上に向かう階段を昇っていった。

(早く帰ってこないと、私、君のことを嫌いになっちゃうよ)
大好きな人との思い出の場所を、無意識的に求めていたのだろうか。
その重ささえも懐かしい金属扉を開けて、みさきは屋上に入り込んだ。冷たい風と、暖かな陽射しが入り交じった初春独特の風に吹かれて、みさきは瞼を細めた。
「明日はいい天気だな」
あたたかな声がかけられる。みさきはびくん、と立ち止まった。
それは、よく知っている人の声。大好きな人の声。
「そっか。今日は、夕焼け……なんだ。夕焼け、綺麗?」
「65点ってところだな」
初めて逢った時のように、浩平は言葉を返してくれる。みさきは涙をこらえているせい

で、喉がひどく痛かった。
「待ってたよ……待ってたんだよ。あの日からずっと」
「ただいま」
やさしい響きで浩平の声が囁いた。
「駄目、だよ……っ。挨拶はちゃんと、大きな声で」
「ただいま、先輩」
「お帰りなさい、浩平君っ」
みさきは浩平の胸にすがりついた。浩平の腕がみさきの背中に回される。泣きながら、みさきは一年ぶりに逢った恋人のあたたかさを嚙み締めていた。
「馬鹿だよね、私達……まだ昼過ぎなのに、夕焼けだって」
「ああ」
「アイスクリーム、もう溶けちゃったよ」
「そうか、残念だな」
浩平の指が、みさきの涙を不器用にぬぐってゆく。
「卒業式、さぼったら駄目だよ」
「ちょっと寝過ごしたかな」

こんな喋り方も前と変わらなかった。
「ちょっとどころじゃないよっ。ずうっと、待ってたんだよ。毎日待ってたんだよ」
「ごめんな」
みさきはそこまで言ってから、大切なことを思い出した。
ずっと言わなければならないと思っていたこと。みさきが言ってもらって何より勇気づけられた言葉。開かれた世界へ、踏み出した人の為のはなむけ。
「浩平君、卒業おめでとう」
約束通り戻ってきた浩平に、みさきは晴れやかな表情で告げたのだった。

了



あとがき

　こんばんは。館山緑です。
　何とか遅咲きの桜が咲く季節に『ＯＮＥ　～輝く季節へ～』の3巻をお届けすることができて嬉しいです。
　もしかしたら、ＰＳ版でみさき先輩の魅力にノックアウトされた方が、新たに手にとって下さっているかもしれませんね。（ゲームショップに見に行ったら、売り切れていたので買っていないのですが）
　今回の話は皆様が予想していた通り、みさき先輩バージョンです。
　おおらかで、包容力があって、そこからは解らないけど心の傷を背負っている川名みさきという女の子も、とても書くのが難しいキャラクターでした。
　大変だ、難しいとばかり言っていると、口癖と思われるかもしれませんが、今回今までとは違った形で七転八倒することになりました。
　眼の見えない女の子を書く為に、不十分とは言え必死で資料を読み込んだり、作中の年賀状についても自分で草稿を作ったりしてみました。ついでにクリスマスメッセージも作って友達に送ったのは再利用というやつです。
　作中には浩平君が爪楊枝で点字を打つところがありますが、あれはきっと後でしばらくまともに指が使えなかったのではないかと同情しました。（試しに一点だけ打ってみたのだけど、

一文字分打つのは断念しました）

他にもみさき先輩に関わるストーリー的なギミックで、想像を絶するほど無茶をやったのですが、そういう趣向を無意識に立ててしまい、七転八倒する癖があるのは、いわゆる自縄自爆の典型なのだと思います。

何人かの読者の方から、館山のホームページについてお問い合わせがあったのですが、現在はホームページを開設する予定はありません。そもそもワタシの家はローテクなので、ホームページなんて大変なものには全然対処できないのでした。

行ってみたいなと思われた方には申し訳ないのですが、その分お手紙で感想などを送っていただけると、ワタシだけでなく、この本を作る為に頑張って下さった他の方達にも反響が伝わるので、よろしかったらお手紙を下さると嬉しいです。

これからいろいろ活動する予定がありますので、思いがけないところでお眼にかかれるかもしれません。また、どこかでお逢いできたら嬉しいです。

それでは、また。

瞼を閉じれば夜　四月

館山緑

ONE～輝く季節へ～③

1999年4月30日　初版発行

原　　作　Tactics
著　　者　館山　緑
発 行 者　髙橋　豊
発 行 所　株式会社ムービック
〒173-8558 東京都板橋区弥生町77-3
Tel.03-3972-1992
編集装丁　柏木秀博
黒木三郎（デザインワーク）

9784896014341

1920293008578

ISBN4-89601-434-0

C0293 ¥857E

定価／本体価格857円+税

発行／株式会社ムービック

8320-0331-WA03

ONE

～輝く季節へ～